鹿児島県史料

旧記雑録後編

四

題字

鹿児島県知事

鎌田要人

例　言

一　本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）「後編舊記雜錄」を底本とし、巻五十九から巻七十七までを収めて、「鹿児島県史料旧記雜録後編　四」として刊行するものである。本書に収載した文書の年代は、慶長十年から寛永二年までの二十年間である。

一　底本に欠脱した一部の文書・記録・記事を、鹿児島県立図書館所蔵本から採録増補した。

一　底本に省略されている連歌や起請文の神文部分は、東京大学史料編纂所所蔵の「島津氏世録正系統図」「島津家重書」などより補充し、補充部分は▽　△で示した。

一　収載された文書について、原文書や影写本がある場合にはそれにより修正したが、いちいちそのか所は示さなかった。

一　文書・記録・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一　文書・記録・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一　巻末に文書目録をかかげた。

一　刊行にあたって文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ　文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、「　」（墨書）、『　』

（朱書）で囲んだ。

ロ　合点は、頭または右肩に「レ」（墨）、「レ」（朱）で示した。

ハ　文書の年月日・差出・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

ニ　書状の封じ目は、底本にあわせて「／」や「／」を併用した。

ホ　花押は（花押）とし、適宜に人名を傍注した。また底本に「在御判」とある場合でも、原文書や「島津氏世録正統系図」などに花押があれば、（花押）と改めた。

ヘ　端裏書・付紙などは、「　」で囲み、右肩にその旨を注記した。

ト　文書・記録・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一　原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は▨を以て示し、解読困難な字は▩又は▩▩にして（ヨメズ）と注を付した。

一　原文の抹消は、その文字の左側に「ミ」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一　頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連か所の文末にまとめた。

一　人名・地名には適宜に傍注を付したが、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　漢字は原則として底本の用字に従った。

一　異・略・俗体文字は、大部分当用漢字に改めた。

一　変体仮名などは、現行の平仮名に改めた。

一　当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

陳（陣）　蜜（密）　諏方（訪）　麑（鹿兒）　飛彈（驛）　太輔（大）　狼籍（藉）　百性（姓）

玄番（蕃）　愛岩（宕）　覚語（悟）　案堵（安）

旧記雑録後編四　目次

例言……一
目次……四
巻五九　慶長　一〇（一六〇五）年　正月――一二月（義久公・義弘公・家久公）……一
巻六〇　慶長　一一（一六〇六）年　正月――一二月（義久公・義弘公・家久公）……五三
巻六一　慶長　一二（一六〇七）年　正月――一二月（義久公・義弘公・家久公）……一〇五
巻六二　慶長　一三（一六〇八）年　正月――八月（義久公・義弘公・家久公）……一四〇
巻六三　慶長　一三（一六〇八）年　九月――同一四（一六〇九）年六月（義久公・義弘公・家久公）……一八四
巻六四　慶長　一四（一六〇九）年　七月――一二月（義久公・義弘公・家久公）……二二五
巻六五　慶長　一五（一六一〇）年　正月――一二月（義久公・義弘公・家久公）……二六四
巻六六　慶長　一六（一六一一）年　正月――一二月（義久公・家久公）……三〇六
巻六七　慶長　一七（一六一二）年　正月――一二月（義久公・家久公）……三五七
巻六八　慶長　一八（一六一三）年　正月――一二月（義久公・家久公）……三八九
巻六九　慶長　一八（一六一三）年　日記並高帳……四四七
巻七〇　慶長　一九（一六一四）年　正月――一二月（義久公・家久公）……五二〇
巻七一　元和　元（一六一五）年　正月――一二月（義久公・家久公）……五六九

巻七二　元和　二　（一六一六）年　正月――同三（一六一七）年八月（義弘公・家久公）……六一八
巻七三　元和　三　（一六一七）年　九月――同四（一六一八）年一二月（義弘公・家久公）……六五七
巻七四　元和　五　（一六一九）年　正月――一二月（家久公）……六八五
巻七五　元和　六　（一六二〇）年　正月――一二月（家久公）……七二三
巻七六　元和　七　（一六二一）年　正月――同九（一六二三）年一二月（家久公）……七六三
巻七七　寛永　元　（一六二四）年　正月――同二（一六二五）年一二月（家久公・光久公）……八〇三
文書目録……八三三

（表紙）

義久公
義弘公　慶長十年
家久公

後編　舊記雜録　巻五十九

（原寸縦二四・三センチ　横一六・七センチ）

1　「家久公御譜中」

慶長十年正月、忠恒以使者（使者姓名不傳、使秀頼卿者町田久幸也、是使亦久幸務乎、）獻幣物（御太刀一腰・御馬代黄金二枚、）於　家康公、奉賀年首、本多上野介正純達　高聽事、合時宜之旨、以奉書、報如左、

2　「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様爲年頭之御祝儀、御太刀一腰・御馬代黄金貳枚被成御進上候、致披露候處、御仕合能御座候間、御心安可被思食候、則御馬代上り申候通、御折紙ニ御奏者番衆裏判被致候を相添、進之候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」正月三日　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守殿

3　「御文庫四拾九番箱二巻中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

新春之慶賀珎重々々、任好便一筆申候、抑年頭御祈禱護摩今朝結願候間、巻數・守進入候、當春者可爲御上之由、其聞候間、尤目出候、積儀期面上存計候、將軍者來十日比江戸を可爲御發足由申候、大納言殿者二月十日比可被立由候、即將軍可有宣下旨候、他事令省略候、事々、不宣、

「御譜朱カキ」「慶長十年」正月八日　（花押）「照高院如雪也」

嶋津修理入道殿

「右ノ上包有之」嶋津修理入道殿　如雪

4　『神社由緒記』

白山御神領

薩州出水郡知識庄村之内

一浮免

川はた
上田一段三畦十八歩　　貳石四舛

同所九畦廿四歩ノ内
上田六畦十四分　　九斗七舛

合田方三斛一舛

已上

慶長十年

牧
助九郎

染川
甚左衛門尉

5 『在樺山氏』

新春之吉兆多幸〻〻、抑我等上國之儀承候間、三月之時分者、必可致上洛覚悟候、然者於其方、惟新身上之儀ニ付、取沙汰なとハ無之候哉、万一左様之儀、六かしき様にも候ハ、、拙子上京之儀、如何有へきかと存候、其許之様子被聞合、委承度候、乍不申此等之旨可有隠密候、猶期後喜之時候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」正月十日　　龍伯（花押）

桃山權左衛門尉殿

「此御書權左衛門久高譜中ニ在リ」

6 「樺山權左衛門久高譜中」

「正文在樺山源三郎久清」

尚〻かたつき所望之由、平左衛門尉方まて被示越通承届候、今度も上せ遣度候へ共、山口殿ゟ　公方様可有　御一覧儀も候する間、其以前ニハ惣而いつかたニも出ましき由候之間、不及是非候、併貴所へハ下向之刻、談合可申候、將又其許へいつれも相詰候人衆へ、普請ニ別而辛労之段、相心得賴申候、以上、

新春之慶賀珎重〻〻、前ニも書狀を以如申、長〻之在京大儀之至、不及是非候、乍不及申、無退屈被相調、奥州ため可然様所希候、仍到山口殿書狀を以申候間、誰にても貴所見計を以、可然人ニ我等書狀・太刀被相添、可致持參事賴入候、猶巨細伊勢平左衛門尉可申候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十年歟」正月十日　　惟新（花押）

桃山權左衛門尉殿

7 「義久公御譜中」

「正文」

爲音信、唐墨二挺・唐折敷廿枚到來、喜悦候、謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」正月十一日　◯「墨印」（家康）

龍伯

8

「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

禁裏江参上之刻、早々申入候、追而可申入候、以上、

新春之慶賀幸甚々々、猶以不可有休期候、旧冬預御札、殊ニ段子五巻拝受、御悃意之段恐悦之至候、當年者可被成御上洛之由候、得賢意切々蹴鞠張行可仕候、仍定家之筆痕此類所持候間、一軸致進献候、將亦元日愚詠懸御目候、後音ニ御歌拝見、可爲本懐候、猶御使者可被申入候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」孟春十一日　雅庸

陸奥守様

人々御中

9

「御文庫三番箱宝鑑中」「義弘公御譜中ニ在リ」

さてハ又東山辺を、戀路にうかれ出者候由、御耳ニ入候趣承候、さやうなる者不承及候、われらハ去々年、禁裏より古今可有御傳受之由被仰出、御不審共御尋事多候て、折々出京申候、としより筋いたミ、わかき兒なとにさすられ候事、何より藥にて候と、醫者とも申候ニより、ちこわか衆一兩人めしよせ、さすらせ候事候を、人口の事にて候へハ、何かと申候欤、不能分別候、乍去われらてい、若衆ともに手をもひかれ候ハねハ、立居も不成躰にて候、新造としより候へハ、其身もともに行歩不自由故、合點にてわか衆たつね候へ共、氣にあひたるか無之候、貴所ハとしのよられたる女中衆に御せかまれ候よし、さて〳〵思外なる事にて候、度々天下ニかくれなき武篇めされ候仁躰にて、御せかまれ候事、武篇のなをりにて候、何様追々重而可申候、猶御きゝ候事ハ可承候、一咲〳〵、

追而令申候、馬・鷹之儀御尋候、一二ハ馬令所持候へとも、よきハ無之候、鷹去々年之夏之比まて、かたのことくなるか候つれとも、難去人令懇望遣、只今ハ所絶候、東國衆ニ水のやと申候者、折々拙者へ鷹めつらしきをくれ候つれ共、去年四月之比令死去候て、はたと鷹にことをかき候、只今をかしき鷹の、なにとしてもいき物をとらぬ鷹人あつけ申候、何様にもなふり候てくれ候へと申候、去年とやまへより越候、種々仕候て、今ハ五位からす・鴨なとやう〳〵とり申候、旧冬より山をも色々つかひ候てとらせ申候、いまた一つゝ取飼申候躰にて候、其

外鶴二三令所持候へとも、おもハしからす候、一かとうつら取申候を、これ又人所望候てより、もち不申候、尋候へとも、逸物ハ無之候、貴老ハ鷹も馬も、無御所持やうニ、御書中ニハ候、事外之僞にて候、可然馬・鷹數多御もち候て、朝暮野山へ御出之由無隱候、さて〳〵御うら山しく候、一度下國申、馬・鷹の御伽を申度候、是非共〳〵わかきものゝ事にて候へハ、ゆく〳〵御かけをたのミ入、御國のかたはしニ居、心安往生を十万年之已後仕度候、御秘藏候とらけの犬、于今所持申候、野山へ細〻引申候、はなきゝにてよくかミ申候、としふるく候故候欤、子を生不申候、たひ〳〵男犬とちきりをこめたる躰にて候へ共、于今誕生之躰候ハす候、いかにもよき犬候ハて、つかれの鳥細〻失申候、よくつかれをかむ犬候ハ、、達者なる犬一疋御のほせ候て可給候、五六年以前ニ、陸奥守殿より給候くろき犬、如形かミ申候つる、此比煩候て死申候、何様追〻可申承候、われ〳〵事、犬のとしのよりたる躰にて、病者ニ成候而居候、別而御憐愍所仰候、偏賴申候、已上、

「朱カキ」
「慶長十年歟」正月廿四日

惟新老　　山「龍山也」

10

「御文庫二番箱義弘公五巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

改年之御慶、猶更不可有休期候、仍爲御祝儀、御太刀一腰・御馬一疋贈被下候、目出度奉存候、將又かたつき之儀、先度申入候處被聞召届之由、滿足奉存候、今度　右大將様　御上洛之儀候間、かたつき可被成御上せ候、御前之様子承合、御披露可申候、御尋之砌ゟ申入候者、遲可有御座候条、拙者之使ニ可被成御上せ候、先書ニも如申入、私ニも申請度存候、去年被成御越候かたつき、古織へとられ申候、今壱も今度難者方へとられ申候、我等かたへ可被下由候而、方〻ゟ所望被申候事、過御察申候、存之外之述懐請申候間、思召被分、かたつき御上せ賴入存候、委細者先書ニ申入候条、有增申入候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」
二月十三日　　山口駿河守直友(花押)

羽兵入様　參御報

11 「家久公御譜中」

本多正純・山口直友奉　台命、去年以來亟贈書、催龍伯今春之上都、因龍伯雖決參洛之志、疾病惱老軀因循、而不能發駕、以故忠恒代之、仲春初出麗城赴洛、家老伊勢平左衞門尉貞成・鎌田出雲守政近貞成・政近外從臣之姓名無所考從駕、三月至于大坂、到著日今無所考、福島正則贈忠恒、遙疎闊之情、今茲二月二十日之書中、告　將軍家二月十九日　御上洛、　右大將秀忠公同月十八日發江府赴闕焉、

12 「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニアリ」

去月八日之御狀到來、於伏見致拜見候、如御書中、改年之御悅目出度存候、去年内々以使者御見廻可申入と存候処、久々ニ罷下候へハ、彼是取亂子細候而、乍存罷過候、次ニ　將軍様昨日十九日ニ御上洛被成候、　右大將様今月十八日ニ江戸を御立被成旨ニ候、併天氣次第と相聞え申候、將又龍伯被成御上洛之旨、尤目出度存候、就其貴殿御上洛被相延之由、尤ニ存候、上方相應御用無御隔心可承候、隨而兵庫頭殿茶入御やかせ被成之由承候、可然を拾計申請度候、はやき便宜ニ御上せ候て可被下候、何も追而可得貴意候間、御報早々申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」
二月廿日　　羽左衞門大夫
羽柴陸奥守様　　正則（花押）
御報

13 「家久公御譜中」

忠恒遣町田勝兵衞尉久幸進幣御太刀一腰・御馬代銀子十枚・段子十巻、於　右府秀頼卿、而祝歲首、片桐市正且元執奏、則怡悅不少、許謁於久幸、乃以黒印之書報謝、且元亦雖贈與太刀一腰・段子五巻卻之、久幸盡理而乞受、且元難黙止纔留段子一巻、餘皆不受用見且元書、

14 「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

爲年頭御祝儀、早々町田勝兵衞方御差上せ候、仍　右府公へ御太刀一腰・御馬代銀子拾枚并段子十巻被進之候、則披露申候處ニ、別而被成御祝着、以　御墨印被仰候へ共、猶我等より相心得、御礼可申進之旨候、隨而私へも御太刀・段子五巻被下候へ共、何も不申請候条、不能其儀候、併勝兵達而御理候間、一巻留置申候、毎々御懇切共難申謝存候、委曲口上ニ申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」二月廿一日　　片桐市正
且元（花押）

羽柴陸奥守様
御報

15

「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以御祝儀、不相替被進之儀、別而被成御祝着候、以上、

貴札忝存候、如仰改年之御慶珎重申納候、仍而年始爲御祝儀、秀頼様へ御使者被進之候、市正申談披露仕候之處ニ、一段被成御祝着、則町田少兵衛殿へ被成御對面、御墨印被爲參候、於様子者、可御心安候、將又私へ爲御祝儀、御太刀一腰・御馬一疋并繻子三端、被懸御意候、誠御懇情之儀、別而忝存知候、此表相替儀無御座候之間、御心易可被思召候、此地御用之儀御座候ハヽ、可被仰越候、萬〻期後音之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」二月廿一日　　片桐主膳正
貞隆（花押）

羽奥州様
貴報

16

「御文庫二番箱義久公二巻中」「義久公御譜中寫有之トアリ」

改年之御慶雖事旧候、珎重ニ奉存候、仍　公方様來月十日以前、御上着之由候、御心安可被思召候、然者去年比志紀へ様子申入候、當年之儀者、貴公様被成御上洛、可然と存申入候、如何之御分別被成候哉、少〻申上儀、憚千万ニ御座候へ共、寄存通不申段も被懸御目候ニ、還而相似隔心ニ候条申上候、　公方様・貴殿様御事不淺儀ニ候条、御分別を以御上洛第一ニ奉存候、猶後音之時可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」二月廿二日　　山口勘兵衛尉

龍伯様
參人〻御中

17

「樺山權左衛門久高譜中」

慶長十年乙巳二月廿四日、　將軍家父子家康卿秀忠卿、上洛、已著御于伏見城、雖然　太守家久主未有參覲、故久高恐太守之不早、而疾首蹙頞止咲、漸過數日上著、然而無遲參之尤、忽謁　家康卿　秀忠卿、其禮慇懃之至不可勝言、其後　秀忠卿還御、於茲諸侯悉有歸國之命、而　家久公亦爲歸國之首途、解纜於攝州難波浦著日州之岸、今度者久高爲供奉、以自國府至帖佐、從　太守終供奉、而後到于堅利見老父紹劔、二ヶ年之間安否快楽窮苦、而後及愚

身洛之事業勞苦已下之細話、其後爲參候麑島畢、

18 「御文庫拾七番箱十六巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一文數廿二
一文數卅二
一巻物六ツ

慶十年
二月廿七日

右之分、鹿兒嶋へ慶ノ十年二月廿七日ニ、町勝兵衛殿御持參にて候、其留日記◯「イン」

19 『樺山紹劍自記』

一慶長十年乙巳二月廿四日、將軍御上洛、嶋津様御上着遅延候而、何共笑止也、從國元ハ若將軍御上洛ニ付而、京都者雜説様〻也、ヶ様之処ニ御遠慮も有ける也、雖然右大將殿御上京、昔頼朝之京入之例を引候而也、大坂ニ者御ひろい様御用心也、然共　若將軍大津ゟ山科をへて伏見江御着候、見物無比類、猶以　陸奥守殿御上洛遅延候之間、久高笑止千万ニ存候處ニ、御上着候、如此候而、　大御所御目見可然相濟候而、四月廿五日御參内之御供也、昔大名之内ニ稀成嶋津殿也、如此之日記別紙ニ有、若將軍御歸國候へハ、諸士等暇給候而、如本國歸下候、　奥州様於京都御仕合能事計候、連〻御嗜無御油断故、諸藝人ニ勝候事共也、如此候而、國郡江御着候、御見參候而、次之朝しきしやうの御寄合候而、帖佐江　武庫江御見參候而、鹿兒島江御歸院也、久高ハ國分・帖佐江御供申候而、從夫堅利拵へ來候、從去年辛労申候而、歸國見參喜入也、是ゟ夜船ニ而鹿兒島へ參候、萬〻目出度事不及申候、抑愚老此地へ堪忍仕候事、

20 『雜抄』

以上

此度之就御配當ニ、貴所先祖從以來之御侘申可被成候へ共、此節ノ御配當ニハ、いつれの御侘等も御法度之由被仰出候間、不罷成候、さてハ追而時分を以被成申候へ、其刻ハ涯分取次申へく、隨而先年水俣江肥後勢參候砌、貴所事於黒渡船等御馳走候て、長嶋の往通事闕ニ無之様ニ御才覚、于今無忘却候、ヶ様成も、後日ハ可致披露候、

恐〻謹言、

「慶十」　三月五日　　本田六右衛門尉
　　正親判

大井右京亮殿
人〻御中

21

「古御文書三拾六巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

尊書致拜見候、仍今度山駿へ之御内存、御一ッ書之通、委細存其旨、則於此方山駿致相談、懇ニ達　上聞候条、於様子者御心安可被思召候、併今一往得御諚候而、重而様子可申入候、委者山駿ゟ可被申入候、猶御使者申渡候間、具口上可被申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」三月十一日　　本多上野介
　　正純（花押）

嶋津陸奥守様
嶋津惟新様
貴報

22

「家久公御譜中」

同年三月十八日、忠恒登伏見　營、拜　家康公、此時獻品不可考知、賜寶刀大小、治工不傳、述職事了下　營、既而翌十九日　秀忠公亦奉爲謁、進獻幣物無所考、

23

「正文在島津内膳久兵」

今度爲関東之質人、其方妹上國候、誠〻感悦之至、難述禮詞儀候、爲此等之忠賞、於阿多之内知行令宛行候、全可有領地候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」三月十九日　　忠恒（花押）

藤次郎殿

「家久公御譜中ニ在リ」

24

「北郷佐渡久加譜中」

慶長十年乙巳三月二十一日、嚴親三久奉招請　太守家久公平佐亭、獻盛膳、此時久加二歳、而始奉拜謁於　家久公、執奏鎌田出雲政近也、（ママ）

「此年家久公伏見營ニ登ル云前ニアレハ、年間ノ誤アルカ、後考スヘシ」

25

「御文庫四拾八番箱中」

尚〻先度犬追物之聞書令進覧候、其うちにあしき所とも御座候間、なをさせ候て可進之候、然〻便宜ニ

可被持せ事尤候、
氣合之様子無御心元候とて、態預飛札令喜悦候、昨日者
以外相煩候、今日者心易躰候、おこりなとの様に御座候
へとも、さすかそれニても無之候、將又其許出船之儀、
順風候者御急候て可然候、次者昨日狩被仰付たる由候、
可爲御慰と存計候、猶期後喜候、恐々謹言、

三月廿三日　　龍伯（花押）

陸奥守殿
御返報

「此御書、慶長九年ト張紙アリ、同年六月御上坂ニテ、陸奥守ニ任セラレシトミエレハ、九年ハ誤ナルヘシ、惟新公御書ニモ、九年八月迄ハ少將殿トアリ、十年ノ三月雅庸ノ御書并五月惟新公ノ御書ニハ陸奥守トアリ、勘考シテ十年ノ場ニ載置也」

「私考」「慶長九年六月陸奥守ニ任セラル、此三月ハ翌十年也」

26

「家久公御譜中」

同月二十六日、忠恒議山口直友、乞教誨於本多正純曰、
明日　秀忠公將進位、因忠恒雖欲朝　營中、不帶其襞束、
雖著長袴、亦刷禮貌不失恭敬心、則有何不可乎哉、其情
炳焉書中、

27

「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々御長はかまにても被成御出仕、御尤かと存候、
以上、

御札令拜見候、仍明日　上様被爲進　御位候付而、嶋津
陸奥守殿御出仕可被成之由、存其旨候、然ハ御襞束御持
參不被成之故、御長はかまにて、御出仕可被成之由、蒙
仰候、御襞束無御座候ハ、御長はかまにても御出仕被成、
御尤かと存候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」三月廿六日　　正純（花押）

本上野介
正純
山口駿河守様
御報

28

「御文庫三番箱中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

今日　廿七、於藝州之内高崎と申所ニ、三原諸右衛門尉ニ
あひ申候間、捧一書候、先々海上無事ニ此辺迄參候条、
可安御心候、今度者寄特ニ打續順風御座候而、存之外早
々罷上事候、　將軍様御上洛茂弥必定之由候間、江戸茂
やかて可隙明申候条、滿足仕候、雖不及申候、鹿兒嶋節

〻被成御見舞、諸事被仰付候而、可被下事奉懇候、就中唐船之儀ニ付、能〻可被入御念候、去年秋月殿家中へ着岸之唐船曖之儀ニ付、於江戸及御沙汰、外聞不可然候つる由候之間、氣遣千萬ニ御座候、上洛前諸浦唐船奉行之儀、以書立申付置候、就其唐人申分共在之時、通事之口にてハ相違迄ニ御座候間、唐人之書物を取候而、何時茂老中衆直ニ大龍寺ニ以相談相濟候様ニと申置候、是又爲御存知候、委細之段者、諸右衞門尉口上ニ可申上候、猶奉期後音候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」「慶長十年歟」三月廿七日　陸奥守　家久

進上　惟新様

（本文書ハ編年ヲ誤ランカ）

29 「家久公御譜中」

忠恒師飛鳥井雅庸習蹴鞠之藝、亟得冠纓色袴桐鳳凰之紋等免許之簡牘、

30 「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

蹴鞠爲門弟、萠黄葛袴之事御懇望候條〻、雖有子細之儀、兄弟之契約申上、別而御執心之間免之候、御着用尤規模候、於淺思者、可被背神冥者也、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」三月廿七日　雅庸

嶋津陸奥守殿

31 御悃札拜誦、欣悦之至候、抑昨日者令參扣、得賢意難忘存候、尊隙之時分、蹴鞠張行可仕候間、於被寄高駕者可爲本懐候、猶期拜顔可得御意候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」三月廿八日　雅庸

陸奥守様　人〻御中

「家久公御譜中ニ在リ」

32 『在官庫』

（本文書ハ三〇号文書ト同文ニノキ省略ス）

33 「御文庫廿二番箱九巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

以先書如申上候、當春者必可致上洛企候処、又煩出合散〻爲躰候故、令延引候、種〻加養生候へ共、依無其驗、先陸奥守上京候、唯愚老疎略ニ可罷成事、深重雖迷惑候不及力候、心遣候段不可過御高察候、隨而先ニ明題抄之

儀、得尊意候処、こま〳〵かなを被付被下候、日來之本望大慶至極候、誠御六ヶ敷儀と申、其恐不少存候、右之題之内一首題すくなく候、なをも有へきやうに存候通申上候つる、然者此比有鄙ゟ明題部類抄ほり出候、其おくに十首題已下之内一首題おほく候、今度書付差上候、重疊乍御六借被遂、御合點不審紙付候分、讀やうかなを被付可被下候、奉頼候、并無季題御座候、ヶ様成題之儀、就中無其心得候、飛鳥井殿年頭之御会ニ者、必寄道祝と被書やうに承及候、是者季無御座候、惣別季もなき題ハ、何たる時被書儀候哉、是又得御意度候、近比雖憚多事候、被注付被下候者可忝候、旁宜預御取合候、恐〻、

「御譜ノ朱カキ」
「慶長十年歟」三月

倉光主水佑殿

34

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

乍近所未遂向顔事、不慮至候、將又雖輕義候、羅衣二襟補今日之祝義候、猶追而可申越候、かしこ、

「朱カキ」
「慶長十年四月」　朔日　信尹（近衛）

鹿兒嶋少將殿

35

「本田氏蔵」

慶長九年分之出物分

同八月三日
銭七十匁　若殿様御名いわいに付て、出物五石ニ付二匁四分ッ、、
『此年六月、忠恒公任陸奥守』

同廿二日
同百三十八匁　若殿様御煩ニ付、御祈念之出物五石ニ付四匁七分ッ、、

十二月十五日
同廿九匁　かうらいニてほろひ候唐人之七年きニ付、大せかきの出物五石ニ付一匁ッ、、

慶長十年正月廿一日
同百八匁　若殿様今年初て御越ニ付、出物四石ニ付三匁ッ、、

同二月二日
同六百五十六匁　伏見御屋形作ニ付、出物一石ニ付四匁四分ッ、、

同月
同二貫二百四十一匁　若殿様御上洛ニ付、出物一石ニ付十五匁ッ、、
『十年四月ニハ上ノモ忠恒公上京』

三月廿一日
米七斗二升五合　右同出米、一石ニ付五合ッ、、

合三貫二百四十八匁
此外
米七斗二升五合

右二年分
合銭五貫百九十二匁　高百四十五石ニ付、さん用ハ壱石ニ付三十五文八分ッ、、

合米壱石四斗五升ハ　壱石ニ付一升ツヽ也、
慶長十年三月迄之出物之究也、◯「印」
卯月二日

36
「御文庫二番箱義弘公三巻中」

尚〻琉球之儀、無御由断被成御注進候様ニ、奥州様御相談御尤存候、猶追而可得貴意候、以上、
急度令啓上候、仍奥州様御上洛之儀付て、先度以書狀申入候つる、然處琉球御動之儀ニ御座候間、たゝ今ハ御上洛御無用之由、御諚之旨、本上州ゟ被申越候条、其御心得可被成候、先御上洛相延、於我等珎重存候、不及申候へ共、琉球之儀御行専一存候、左様ニ候へハ、彼表之様子急度可被成御注進候、御由断被成間敷候、尚追而可得貴意候、恐惶謹言、

卯月朔日　山駿河守　直友判
惟新様　人〻御中

「私考」「十年巳三月忠恒公御上京、八月御歸国也」

37
「義弘公御譜中」「正文在東郷肥前」

猶〻其許にて、方〻の茶湯ニ被相候ハんと、從是浦山敷存計候、乍不申入念當世のもやう見及、下向あるへく候、河野伊右衛門尉へも辛労之段、右之通念比ニ申度候、
今度陸奥守殿致御供、別而辛労之儀察存候、然者肩衝之蓋二ツ引せ可被下之由、　龍伯様御意候条、かたつき弐ツ指上せ候、ふた之事、貴所調達憑存候、爲其用一書候、同袋之事、平左衛門尉へ談合候而、是又調儀憑入候、恐〻謹言、
「朱カキ」「慶長十年歟」卯月三日　惟新（花押）
東郷藤兵衛尉殿

38
「御文庫廿二番箱九巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

度〻上洛之儀被仰下候、愚老も今一度之上洛就念望、當春既其催候処、去年已來之煩、就中此節散〻躰候故、是迄月〻種〻雖致養生候、不得其験、弥病氣老衰増行躰候、於當分者迚茂後日上京難成覚候、千万残多次第候、名こや御在陳以降、別而　將軍様御懇意之儀、聊不致忘却候、

向後至陸奥守、右一筋可被加尊慮事念願候、勿論奉對
上様、忰家不可存別儀候、彼是以一度進上洛、積儀共雖
申上度候、任當病乍存打過候、御厚恩之所相似忘失歎敷
存候、雖此姿候、若世上之物沙汰作病ニ被取成候而者、
迷惑深重之儀候、　八幡大菩薩・愛岩大權現・天滿天神
茂御照覧、此等之旨少も僞不申候、以此趣愚拙無疎意之
通、寄〻御取合所仰候、恐〻、
「朱カキ」
「慶長十年」卯月　　龍伯　「御諱ニアリ」
山口駿河守殿
「義久公之御案文也」

39
「家久公御譜中」
同年四月七日、　家康辭征夷將軍、而讓　右大將秀忠公、
同月十五日、　秀忠公任征夷大將軍、聽駕牛車出入　禁
中、

40
「又吉常久譜中」
慶長十年乙巳、　太守少將忠恒主有參覲之企、而發鹿兒
嶋赴於京師、常久亦有供奉之命、故三月廿四日、爲首途
於日置私宅到于京泊、則已聞初更鐘聲於旅宿、故不出戸
外、江上漁火對眠、翌早候　太守之旅館、伸旅行之祝詞
矣、〇同月廿七日、天氣快晴、良辰順風、是以卯時解纜
於京泊、晡時著肥前樺島岸、海路無事、而漸過長門・周
防到于安藝焉、〇四月七日、到于豫州津和繫船於島岸、
則　太守封自書、使萩原法師秀玄贈之於常久、珍戴百拜、
而後開緘拜閲、則前日所備　上覧之子昂眞翰返賜之云〻、
且有戲言曰、令此法師強酒甚酔、故薦薄酒菜肴無量、且
及亂矣、呵〻大笑、

41
猶〻彼かたもまち入候、
船中見廻不申候、うと〳〵しくこそ候へ、然者子昂之筆
返進申候、一たん見ことさ申計なく候、將又この入道是
非共酒を御すゝめ候て可給候、ふしくさに入度候まゝ、
使として進之候、かしこ、
七日　　（花押）「忠恒公」
又吉殿　　より

42
四月十二日、海路無障著攝州大坂之岸、同十四日、平且

隨　太守乘川舟、泝流水揚素波、經十里之水程到于城州伏見、而夕陽未過西山、卽候　太守旅館、告上著之慶賀、而後入旅宿、則招予於樺山權左衞門尉久高之旅宿、備盛膳給旨酒焉、

43

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

敬白　天罰起請文前書之事、

一奉對　將軍樣、連〻不奉存疎意候、弥以可守忠勤旨候事、

一於背　上意輩者、雖爲緣者親類、一切不可申談候事、

一被　仰渡御法度堅相守、自然違却之儀於御座候者、重而可致言上候事、

一若企逆心輩、到我〻於致計策者、其趣則可遂披露候事、

一於我〻儀、御不審之子細可有御座時者、速御糺明所仰候事、

右之條〻僞於申上者、

「年月無之、御譜中慶長十年四月中ニ有之」

44

「御文庫二番箱家久公十二巻中」「家久公御譜中ニ在之」

返〻只今者御音信、忝奉存候、爲御礼如此候、唯今者御仕合能珎重ニ奉存候、先〻御事多中、御使者殊見事之唐巻物二被懸御意候、御懇情之至難申盡候、參候而申入度候へ共、可爲御草臥候条、無其儀候、將又此芍藥五色懸御目候、此内しゆてんとうしと申ハ無之候、秋時分よく御座候ハん間、道正迄進候樣ニ、老父上洛仕候者可申候、只今花懸御目度義ニ候へ共、此はなハ少遲御座候而、やう〳〵今火を□種まて可進候、猶道正へ申候条、不能一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」卯月十七日　　西洞院少納言時直（花押）

嶋津陸樣
人〻御中

45

慶長十年乙巳

四月二十日、神田藤兵衞本田源右衞門親商家臣にて、主人親商の跡を慕ふて殉死、

46

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

爲見廻、早〻被差上使者、令祝着候、　大御所樣以御諚、當年者関東下向相延候、萬辱被　仰出、外聞可然候間、

可心安候、仍爲音信、銀子三十兩到來、懇切之段喜悦候、
委相含使者候、恐々謹言、
「朱カキ」「慶長十年」四月廿一日　　忠恒（花押）
北郷次郎殿

47
「義久公御譜中」
「正文有之」
遠路使者、殊伽羅十兩・銀子百枚、喜悦候也、
「朱カキ」「慶長十年」卯月廿六日　◯「墨印」
嶋津修理入道とのへ

48
「家久公御譜中」
同月二十六日、　大樹駕牛車入　朝廷、時忠恒亦列供奉、

49
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニあり」
猶々唐犬之儀、三四ッ御座候由承候間、自然何方へ
も不被遣候ハヽ、私ニ壱ッ被懸御意候ハヽ、可忝候、
蒐角期貴面之時候間、不具候、以上、
從是可申上与存、書狀相認申候處、御折紙拜見仕候、將
亦薩广燒之かたつき之儀、道与迄申入候処、被懸御意忝
存候、見事さ無申計御座候、將亦去十八日ニ　大御所様
へ御礼、又翌日十九日ニ御方御所様へ、御礼被仰迄、無
残所御仕合候段、於拙子大慶不過之奉存候、殊御參内之
御供被成候由、尚以珎重ニ令存候、随而ちいさき唐犬之
女犬、　秀頼様ニ御座候、併男犬無御座候、貴老様ニ御
座候由ニ候間、片主膳又ハ拙子ニ申遣候へと、被仰付候
条申上候、於御所持者、御進上被成御尤存候、主膳ゟも
可申上候へ共、我等方ゟ可申上之由候、右之通候、此地
御用等御座候ハヽ、可被仰下候、尚期面謁之時候条、不
能詳候、恐惶謹言、
「朱カキ」「慶長十年」卯月廿七日　　伊藤左馬頭
羽陸奥守様　參貴報　　則□（花押）

50
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
蹴鞠爲門弟、鳳凰之上并桐之文之事、條々雖有子細之儀、
別而御執心之間免之候、御着用尤規模珎重候也、恐々謹
言、
「朱カキ」「慶長十年」四月廿八日　　雅庸
嶋津陸奥守殿

51

「家久公御譜中」

同月二十八日、忠恒供奉　秀忠公、而朝　禁中、奉拜
今上皇帝及親王家、

52

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

尊書忝拜見仕候、今日　公方様御參内之被成御供、
當今様　親王様へ御礼被仰上候由、尤以珎重奉存候、就
其御太刀二振、一度ニ御持參可然之由、傳奏之御衆被仰
候哉、一圓不存候御事候、寔傳奏之御衆も可爲御無案内
与存候、但於　禁中之御仕合ニ在之儀を[本マヽ]ハ不存儀候、先
〻御急用ニ付、直如伏見被成御通候由、何様參上仕可申
上之旨、可預御取合候、恐〻謹言、

友枕齋　如貴（花押）

「朱カキ」「慶長十年」卯月廿八日

伊勢兵部少輔（真昌）殿

53

「二番箱十三巻中」

以上

追而申上候、仍而今度御在京之御大名衆へ、　上意之被
仰出、御一ッ書写進上仕候、可被成御拜見候、猶珎敷御
沙汰御座候者、可申上候、恐惶謹言、

山駿河守　直友（花押）

「朱カキ」「慶長十年」五月二日

奥州様
參人ゝ御中

「家久公御譜中正文在文庫トアリ」

54

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶〻無申迄候へ共、御下向之道筋、早〻可被仰下事
肝要候、
任幸便用一翰候、仍從平左衛門尉所、去月廿日之書狀、
今月二日到來候、然者　將軍様并右大將様へ御目見之儀、
早〻相済、殊於當座御腰物・脇指相添被爲拜領、無残所
御仕合、自他之外聞実儀、万〻目出度存候、今度者上着
可及遅〻と心遣存候処、別而貴所御肝煎ニて、船中被差
急候故、時宜可然相調、我等滿足不大方候、定而　右大
將様御事可被成御下向之条、とても貴所なと関東への御
供ハ有ましきと存候、左様ニ候ハヽ、無程可有下向とま
ち申計候、將又鹿兒嶋を始、御分國中無何事候、　竜伯
様御煩も餘悪も無御座候、祐乗坊下向之由候へ共、未着

岸候、於下着ハ、御養生可被成と珎重ニ存候、細〻申度儀雖多之、急便之間申残候、余者追〻可申通候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」五月四日　　惟新（花押）

陸奥守殿
まいる

55

「又吉常久譜中」

五月四日、號端午之祝禮、　太守賜單衣二領、其使者別府舍人佑也、

同月廿四日、常久及町田勝兵衛尉使於福島左衛門大夫殿赴領國、而大坂傳法之有船中、故乘船沿流、晡時到于其所、進贈物達旨趣、同廿六日、上伏見反命矣、

同月廿八日曉天、以伊勢兵部少輔貞昌爲指南、見大老本多上野守殿、于時進太刀一腰・馬代・段子三端也、

六月朔日、　太守使伊勢兵部少輔貞昌傳命曰、常久直駐此地、宜宅地之爲警衛、然則拜謁　大樹者不過旬日乎、

56

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以所労故、乍自由印判を以令申候、以上、

先刻者御書、殊御太刀一腰・御馬一疋并段子拾巻・鉄炮拾挺御持參、忝存候、折節氣色悪平卧ニ付而、不申聞早〻御歸、令迷惑候、万〻期面談之時候条、不能巨細候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」五月八日　　越宰相
（家久）　　秀康（墨印）

嶋津陸奥□
人〻御中

57

「家久公御譜中」

同年五月十四日詰朝、古田織部正重勝招忠恒點茶、鹵地樹石茶亭結構幽意、至供給之珍味及名畫・古器之類、皆以堪賞翫、故遂一記如左、

58

「正文在文庫」

五月十四日之朝、古織部殿數寄覚

一床ニ豊干之繪

一棚ニひッきり　はね　こしき釜

一振舞前ニ手ふくへ　火直ル

振舞

一ぬりあしうち　すゝき汁（雲わた入）　料理なます

せと皿

かうの物色ニ重箱まなかつほ　あゆのすし
ちうはこ　うなき
ちうはこ
子こもり
しほ引重箱
うき也酒　くわし
おきつ鯛あめちまき
ひわ　あんす　雪餅
中立ノ間ニ
一釣舟　あちさへ　てりこう
一茶入ハ　せい高
一ちやハんハ　せとやき
一水さし　いかやき
一水こほし　めんつ　以上
「朱カキ」「慶長十年」

59
「全御譜中」
「正文在文庫」
爲端午祝儀、帷子・單物拾到來、悦覚候、猶本多佐渡守可申候、謹言、
「朱カキ」「慶長十年」五月十四日　（秀忠）（花押）

60
「家久公御譜中」
同月十八日、山口直友贈書於忠恒、曰有明日　秀忠公可賜點茶於忠恒之　鈞命、本多正純以簡傳　台旨、直友與力和久甚兵衛尉齎之來、且拜賜巣鷄之兒鷹、則登　營奉謝　台意忝、

61
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中正文在文庫トアリ」
以上
從　上様、明日　御茶可被進由被　仰出、本上州ゟ書狀御座候間、甚兵衛進之候、將又從　上様、巣鷄兒鷹被進候、則持せ進之候、猶口上ニ申含候、恐惶謹言、
「朱カキ」「慶長十年」五月十八日　直友（花押）

62
「家久公御譜中」
奥州様　参人こ御中　山駿河守　直友

同月十九日、忠恒應　徵登伏見之　營、則忝於御茶亭賜珍膳、而后御手自賜黠茶、其茶碗・碾茶壺其外名釜・名器・名畫等、非世人玩弄之物類、僉以可悦目、逮興闌拜謝退　營中、后又登　城奉謝賜茶之事、

63

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「義弘公御譜中ニアリ」

猶〻椛山權左衞門尉之事、市成へ被越候由、よそなから承候、何そ笑止ニ存候、兼又屋久嶋ヨリはとを二ツめしよせ候、一ツハ目ヲわつらい候てそんじ申候、一ツハこのころ一段よく鳴候、必ひる三度、よる三四度ほとうたひ候、おもしろく候条、しかとよるもそばニめし置候てうたハせ候、あひら敷こそ存候へ、きのふハ雨つよく降候間、こをとり出し候て雨ニうたせ候へは、羽をのべうち外ヲうたせ候て、おもしろかり候有様、一段〻〻あひら敷こそ候つれ、是非〻〻一ツめしよせ候てかハせ候ハてハとこそ存候へ、

御書面具ニ令披見候、然者德右衞門尉可被指越由承候、祝着ニ存候、就者鷹一そう之儀、卯の日ハけこにて候間、辰之日能候する由、種子嶋六郎兵衞尉ニ而申候、將又宮内原くつらかけ之儀、如仰之留させ申候、隨而ハ石漕舟之事、當時理安氣遣申不被指出候、抱節へ種〻申候へ共、事延ニ候間、伊集院半右衞門尉・同名市右衞門尉へ、是非共可被肝煎由吳見候て、可然之通申候、何共心遣まてニ候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長十年歟」

五月廿一日　　修入
　　龍伯（花押）
維新老
御返報

64

「義久公御譜中」
「朱カキ」
「慶長十年欤、五月ヨリ七月迄草魁」

雨こひの歌

「御文書方ニ有之」

山めくる雲のさそハ、雨をちて
　大御田小田のさなへうるほせ

65

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

就好便令啓候、

一去月五日之御狀同廿三日下着、具令披見、本望之至候、

一先以御前之御仕合、弥能御座候由、珎重之儀候、早竟

御神慮天道之寄特と感申計候、
一其元客來可繁候ハん間、夜白御辛労之儀、自是察存候、
一鹿兒嶋・國府いつれも御無事候、可御心易候、
一公方様於御下向者、貴所事も定而御暇ニて可有下向と、待居申計候、
一人質上洛之儀、爰元雖無油断候、難調ニ付而當分迄延引候、乍去來十一日ニ打立候而、京泊より可有出船之由、鹿兒嶋より相聞得候、旁爲御存知候、尚追々可申通候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」六月一日　　惟新(花押)

陸奥守殿
参

66

「御文庫四拾八番箱中 義久公巻」

猶々我等氣合之儀者、祐乗法印養生候て、少輕成候やうにおほへ候、然共膝之痛草臥候事ハ、一段増候と存候、土用等さめ候ハヽ、次第〳〵に能候するかと存計候、
依幸便用一翰候、然者人質京上遅引候て、長々被成逗留御辛勞之至候、先札にて如申候、去十一日平松を打立之儀必定候處、致違變咲止存候、就其今月十四日ニ以使者、是非共早々被打立候て可然候、此砌侘言なとゝ候てハ、可悪之由申越候、然處惟新事も十三日ニ自身被差越、色々吳見共被仰達たる由候、依之今日必可被出立儀定候、さてハ來月廿日過、月末にこそ可爲上着之間、貴所下國之事者、漸八月ニ可罷成と存候、なにとも待遠成儀、無申計候、若人質無上着候而も、下向共候ハヽ、可爲幸候、右之旨定此度かこしまより細々可被申上候へ共、存知之通令申候、將又此方へ江庵と申旅人多年堪忍候つるか、去年之秋高野山へ千日籠候、立願候とて當國を立出候處、於大坂慮外之儀出合走候由、此比傳承候、此段委承度候間、誰そ被仰付、然々御聞せ候て可給候、猶期後音之時候、恐々謹言、

「慶長十年」六月十九日　　龍伯(花押)

「宛ノ所切ルヽ」

67

「又吉常久譜中」

(本文書ハ六六号文書ト同文ニ付省略ス)

「朱カキ」「慶長十年」六月十九日　　龍伯(花押)

「朱カキ」常久

68 同月廿九日、以和久甚兵衞尉殿爲指南、未時登伏見城候
營中、申時謁于　大樹、則獻太刀一腰・馬代五百疋・天(ヒロ)
我戒(ウト)二疋、其進退之際、拜於莞爾　高顔、無少過之有我
所以施眉目也、退出則直候　太守旅館告報於件事、而後
入予久宿、尊卑老若來格以受喜悦之言、欲記之而不遑也、

69 「御文庫二番箱義弘五巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

今度陸奥守殿永〻被成御在洛候處ニ、　御前之御仕合誠
殘所無御座候、関東御下向之儀も御無用之旨被　仰出、
此度可有御歸國之旨　御諚付、早速御下向御滿足令察存
候、將亦御上被成候刀、本上州申談披露申候、一段御機
嫌ニ御座候、併可有御斟酌樣ニ御座候つれ共、本上州取
成を以相納申候、其御仕合よく御座候間、御心易可被思
召候、御前之樣子万事伊兵少輔申談候条、可被申上候、
此方御用等候者可被仰越候、猶追而可得貴意候、恐惶謹
言、

「朱カキ」
「慶長十年」　六月廿五日　　山口駿河守
　　直友(花押)

羽兵入樣
人〻御中

70 「御文庫二番箱義弘公五巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

尚〻片市・片主息災ニ御座候、不断貴殿樣御噂被申
出候、只今ハ晝夜無隙仕合ニ御座候、自然御用等候
者疎意被存間敷候、以上、

其以後久不得貴意、乍恐御床敷奉存候、然者奥州樣被成
御入洛、江戸へ可被成御下向之御用意候処、　大御所樣
より被仰留、御下向無御座候段、近比目出度存候、其上
種〻御懇之　上意之由承、珎重存候、上下御滿足奉察候、
如此之事も、先年貴入樣天下無隱御手柄、被成候故と存
置候、就其秀頼樣へ御礼被仰上、御前御仕合能御座候而、
珎重存候、御成人之趣少將樣可有御雜談候間、不及申入
候、就中今度大鷹巣鶴少將樣御拜領被成候、取分鶴珎敷
御鷹之由候、其刻不有合伏見之故拜見不仕候、一入無念
存候、定而貴殿樣御慰と目出度存候、并御鷹數被成御所
持節々、御鷹野之由承及、御堅固之由目出度存候、拙者
式何かと隙無御座候へ共、于今鷹持絶不申候、殊更　大
御所樣より毎年巣兒鶴拜領仕、外聞実儀忝次第ニ御座候、
雲雀御進上之鶴をも拜領仕年も御座候条、拙者數寄故と
忝御事、心底可被成御察候、猶追而可得御意候、恐惶謹
言、

「朱カキ」
「慶長十年歟」
六月廿九日　　小林民部少輔
　　家孝（花押）
惟新様
　人〻御中

71
「御文庫二拾二番箱九巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」
急度申入候、陸奥守在伏見中、別而被添御心候由、欣悦不少候、抑種〻忝被加　上意候通承、恐悦無極候、陸奥守今月十九日輙下着仕候、然者至愚老蒙　仰旨、陸奥守直承候由候而、具申聞候、扨〻忝儀中〻難盡紙上候、以御内書被仰下事者、度〻御座候キ、如此之　御諚誠驚存計候、加之鶴拜領仕候、重疊忝段不得申候、此等之趣、必以使者可申上候、其間可爲遲〻之条、先用飛札候、以御次可然様御取合賴存候、委曲者期後音候、恐惶、
「朱カキ」
「慶長十年」七月
　　山口駿州
猶以我等煩之事、雖及迷惑候、色〻加養生此比少快然候、乍去腰一切不立候、一席之内も得他力候ハてハ起臥難成候、旁可有御推察候、依之愚札ニ用印判候、聊尓之躰御覧しゆるさるへく候、以上、

72
『児玉筑後譜中』
慶長十年乙巳七月、　公發伏見還、是年三月、公朝伏見、蓋實相從、蓋此行舟中實相聞　貫明公之方病困、乃深惶憂遙禱正八幡及霧島曰、伏祈、神能瘳　公疾病平復反常、獻馬毛、八月幡、七日齋廟獻刀霧島、皆爲報賽、唯願、神其祐　公壽福、國中幸甚、

73
『児玉家蔵』
　　龍伯様御氣相ニ付御立願之事、
一大隅正八幡江月毛之駒上可申候事、
　　并一七日參籠可申候事、
一霧嶋江刀上可申候事、
右之条〻、船中ニて御立願申上候者也、
『疑慶長十年』七月吉日　　兒玉四郎兵衛尉
　　実相（花押）

74
「義弘公御譜中」
「正文」
遙久不能書信候之處、珎章本望至候、殊爲年始之御祝義、太刀一腰・馬一疋、目出度令祝着候、就中帷二送給候、

重疊御懇志之事、千万〻〻喜悦之至候、從前〻無御疎意事共、聊以無忘却候、弥不相易可被副御心義、可爲喜悦候、將又奥州御仕合能御歸國、珎重存候、次乍輕塵、扇十本進之候、猶委曲雖可申候、御下國俄承候間、急筆之躰候、愚意伊勢平左衞門尉可有演説候、追〻期後便候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月九日　（前久）（花押）

維新齋

床下

75

「家久公御譜中」

同年七月上旬、　將軍家命忠恒曰、明年欲築武都　金城、爲垣石運漕、造三百艘之大船以可獻之、忠恒領　台旨而退去、傳事於本邦、乃設其備、

同月十日、本多正純・山口直友胥議、爲石漕船三百艘之造費、授黄金百五十枚於忠恒、使三原諸右衞門尉重種・相良勘解由・有川仲右衞門尉等請取之、

76

「御文庫拾七番箱十六巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

態令申候、昨日石船之如御談合、黄金三百艘分、數百五拾枚御渡候間、三原諸右衞門尉・相良勘解由次官・有川仲右衞門尉罷出、請取被申候、兼又上州様御礼事、明日直懸（「本マヽ」）にも被成候而可然存候、御由断有ましく候、和久甚兵殿駿州爲御使愚宿へ祗、今迄御座候、彼口柄數〻承候条申入候、御腰之物も口能共候て、爰元迄被持せ候、巨細者伊平左殿早〻被歸候而、可被承事肝要候、猶期面候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月十一日　鎌田出雲守　政近（花押）

桃山權左衞門尉殿　參人〻御中

77

「家久公御譜中」

「正文在島津左衞門久道」

此中ちと其邊へまいり度候つれとも、ひまなく候て無其儀候はんに、夜入候時分可參候、いろ〳〵下向前とりみたし候間、そと之ほと可參候、然者御用之事候、使にて申へく候へとも、いかゝと存候間、以面談申候へく候、又大坂迄ハとかく御出候へく候、其うちに猶〻可申入候、かしこ、

「朱カキ」「慶長十年七月」十七日

より

「在口裏」

追　又吉殿　進候　　忠恒

78

「又六常久譜中」

飛鳥井左中將雅庸賜蹴鞠之免狀、因茲七月五日、與顯娃長左衞門尉俱發於伏見入於京師、候雅庸之堂、獻白銀二十兩、所以謝禮也、其從者亦與鵜目述禮詞者也、

七月十七日、　太守封自輪賜常久曰、晩來寄高駕於卑宿、可有對談、其書記左、

79

（本文書ハ七七号文書ト同文ニツキ省略ス）

80

今日戌時　太守渡御卑宿、非兼日之催、而備美膳獻旨酒、候于君席者樺山權左衞門尉・伊勢兵部少輔・町田勝兵衞尉也、

太守忠恒主得歸國免、七月十八日、辭伏見到大坂、常久亦有供奉命、故乘舟沿流先于　太守到于大坂者也、

同月廿日之晡時、　太守解纜下于傳法、常久乘川舟以隨之、則川流之際、而有命曰、勿隨來、速歸舟於大坂宜到伏見、故歸于大坂、則實戌時也、翌日酉時上著于伏見也、

81

「家久公御譜中」

「正文在田中善兵衞」

去年以來被相届在京長旅之上、今度又爲御物方之代官、可被殘置之由候處、不及吳儀領掌被成御感、向後可有御恩賞由被　仰出訖、以此旨弥不可有疎略候也、仍狀如件、

慶長十年
七月十七日　　鎌田出雲守「ママ」近政（花押）
　　桃山權左衞門尉久高（花押）

田中伊豆守殿

82

「家久公御譜中」

七月、於伏見　營忠恒拜謁　家康公賜告之時、拜領駿馬一匹、既而同月十九日、辭伏見而赴領國、家老樺山權左衞門尉久高・伊勢平左衞門尉貞成供奉也、鎌田出雲守政近者依君命、代樺山久高而留後伏見、

83

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

今度者緩々与可被成御逗留と存候處、俄ニ被成御下國、

一入御殘多奉存候、蹴鞠一巻頓而仕進上可申候、此邊若御用等之義候者、於被仰付者忝可存候、猶重而可申達候、恐惶不宣、

「朱カキ」「慶長十年」七月十九日　雅胤「名ナシ」

嶋津陸奥守様

84

「二番箱十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

昨日者和甚兵衛進上申候、秀頼様御礼被仰上候哉、定而御仕合可然御座候ハんと存候、御出船之様子承度存候、尤參候而申上度候へ共、御當番ニ候之間、以書狀申入候、目出度御歸國之御吉左右奉待存候、猶奉期後音之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月廿一日　山口駿河守直友(花押)

陸奥守様　參人〻御中

85

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度申候、本上野殿ゟ少将殿へ書狀候間、持せ進し候、慥ニ御届候て、返狀とられ候て可被越候、はや御出船ニ候者、貴所之方に被置候て、いかにもたしかのひんきに可被届候、由断あるましく候、雲州へ成共可被相渡候、これハ吳國への法度之書狀と相聞候、慥ニ〳〵可被相渡候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月廿一日　するか直友(花押)

甚兵衛殿

86

「御文庫四拾八番箱義弘公三十二通中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚〻此狀認申候内ニ、否笠刑部少罷下、様子承候、先以御下向之由、何より以珎重ニ存候、此中相積儀共可申承候、

就幸便企一書候、

一貴所事、此比者御下向在之由相聞得候間、朝暮相待申ニ付而、無音ニ打過申候、

一人質之船も、此比ハ定而可有上着と存事候、然者去十二日晝夜大風吹申候、同十七日ゟ十九日迄、大風以之外吹申候、其時分人質之舟、何方へ船懸候ハんと心遣ニ存候、

一來年者江戸之御普請御當之由候、其上貴所事も江戸へ御礼之由候、市來八左衞門尉罷下具承候、扨々大儀之事、可申様無之候、雖然爰元之躰者、左様之談合噂ニも曽不承付候、彼是ニ銀子過分之入目と聞得候処、如此事延ニ候てハ如何可相調と、内々心遣千万ニ候、兎角貴所御下向遅く候ハヽ、迚調間敷躰と見及申候、彼是以いそき御下向肝要ニ存候、

一先日以早打申上せ候、呂宋船并ちやくしう船之事、去十二日之大風ニ破艘仕候、誠何も不殘廢申候、彼船着岸も奇特成儀と悦申候処、不思儀之仕合、殘多儀共候、ちやくしう船今壱艘者ほはしらを切、種々才覚申候て漸相殘候、彼荷物之書立、老中より山口殿へ指上せ被申候、鎌田雲州へも別紙ニ而可申候へ共、貴所御心得候而可給候、

一爰許國分・鹿兒嶋・帖佐を始、皆々無何事候、可御心易候、余者期下着之節候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月廿二日　　惟新(花押)

陸奥守殿
参

87

「家久公御譜中」

琉人所乘之船、從福州歸中山國之洋中、遭逆風漂著肥之前州平戸之領内、於是城主松浦刑部卿法印告漂著之事於駿府及江府、繇焉本多正純窺　台意、降奉書於松浦法印及小笠原一庵、抑琉國者爲薩州附庸、以故松浦・小笠原以正純兩書投贈、使忠恒解其意、委備正純兩書、

88

「御文庫廿三番箱家久公拾六巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

一書申入候、仍今度琉球舟平戸へ流寄候処、松浦法印ゟ様子御注進候、寄船之儀ニ候間、其荷物等貴老御請取候而、此方へ御上せ被成へく候、中ニも藥種多注文ニ見え申候、不殘御上せ可有候、其外之物共御見分候而、御上せ可有候、上りて不入物をは先其元ニ可被指置候、爲其如此候、猶期來音之時候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月廿八日　　本上野介
正純在判

「宛ナシ」

「末紙ニ左ノ如シ」「十四日」「御譜中ニアリ」

到來慶長十年八月□

小笠原一庵

「御文庫廿三番箱家久公十六巻中写アリ」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御狀通存其意候、

一今度琉球船ほくちうへ渡り、琉球へ歸國仕候とて逆風ニ合、其元へ流寄候処、早々御注進、則致披露候事、

一琉舟之儀をハ彼唐人ニ御書被成、再琉球へ渡着申候間之船中にての扶持方、等安へ被仰御渡可被成候事、

一去年も奥州へ流寄候琉球之者共、此方ゟ被爲送遣候へ共、終其以後御礼をも不申上候、其通をも琉球へ可被仰渡事、

一彼船之荷物之儀ハ、小笠原一庵へ御渡可被成候、委細之儀、一庵と可然様御相談可被成事、

一何も具披露申候処、一段之御仕合共御座候間、於様子者可御心安候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」七月廿八日　正純在判

到來慶長十年八月十四日

松浦法印

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以先度於伏見者、罷下刻取亂申候故、御暇乞不申、于今御殘多存候、以上、

かねて可申を、八介方へ爲御音信、御馬・太刀・沈香十斤被遣、名々の御心付忝存候、

去廿日之貴札忝拜見仕候、殊塩焙參百斤并きやら五兩被懸御意忝存候、頃よき沈払底仕候処ニ、別而滿足仕候、

一此度御下者努不存候而、とも邊まても罷出不懸御目儀、御殘多存候、

一今度於　御前御仕合、其上名馬御拜領之由、御外聞無殘所、我等迄珎重ニ存候、

一龍伯御事弥御本腹之由承、貴殿御滿足察申候、我等も同前之義共ニ候、

一江戸御普請ニ付て、貴殿御てまへより御石舟參百そう御作候て、可有御進上之由、舟數にて御座候間、可爲御造作と存事ニ候、不及申候へとも、急度被仰付、來年者三月中ニ御上せ候様ニ、御分別尤ニ存候、

一頓ニ可申入を、於伏見得御意候舟材木、大かた調申候由申上せ候、御用を以、舟を作可申と滿足仕候、

一右之舟材木儀ニ、兵庫頭殿かたく被仰付、比志嶋紀伊守殿・嶋津圖書頭殿、此御兩人殊外御精入申之由候、

一上方珎敷義御座候者、不寄何時可申入候、當國筋相應之御用、無御隔心可承候、委細者伊勢兵部殿口上ニ申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」　八月一日　　羽左衛門太夫
　　正則（花押）

羽柴陸奥守様　御報

91

「又吉常久譜中」

八月七日、鎌田出雲守政近使一价知質人嶋津豊後守朝久小女也、乘船著大坂岸之有告報、即以价使伸海路無事上著大慶之返詞矣、爰起不意變事矣、有手飼青鷺之居壁上爲睡眠、于時求俊鷹之飼者、通宅外之小路而見之、則取之去、數輩追後奔走、西牟田覺右衛門・税所久右衛門疾近其人、匪啻打擲附小疵、而後問其故、則曰、我是　大樹求俊鷹之飼者稱與右衛門尉、云爾、少焉、鷹師三百餘人進來爲群於宅外曰、所打擲與右衛門之當人速可附與、由是使松岡市右衛門尉・市成佐助言事之當否者數返、雖然未應諾、而悉引退矣、翌日教松岡市右衛門尉・伊地知傳右衛門尉通一決於與右衛門尉殿、而尚將不可、其後曰、飼鳥狼藉無可比類者、雖然　大樹之鷹師不可不敬、是以令兩輩追放、而後諾矣、故兩輩屈于寺地者也、

同月九日、質人上著于伏見、即達祝言於妙春、翌日入于旅館伸于禮詞以樽肴也、

同月廿一日、勝目助左衛門尉爲　龍伯尊君之使節上著、賜　高書、又所贈貴翰於山口駿河守殿、助左衛門尉帶之、使市成左助爲指南也、同廿四日、助左衛門尉歸國矣、是以封答書畀之矣、

九月十六日云々、

92

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以于今伏見ニ御逗留、御造作御苦労申計無御座候、

就中來年ハ御下向可被成由、尤其節積御事共、貴面ニ可奉得御意候、以上、

貴札忝拜見仕候、仍當將軍様春中御上洛ニ付而、貴公様も御上著被成、御仕合能儀尤之御事ニ御座候、最前鎌田出雲守殿へ申合候筋目、無相違御双方弥被仰談候儀、拙者一人之様ニ目出度大慶奉存候、然者近日御證人衆、當地へ下シ被爲參候ニ付而、御宿以下之ためニ、先達而御使者被爲下候、大久保相模守・土肥大炊頭申談候、將又上野介ニ別而御懇之段、忝奉存候、弥似合敷御用等、無

御心置可被仰付候、隨而御太刀一腰・御馬代金子壱枚被懸御意候、毎度御心入之段、難申謝候、委曲爰元之様躰、御使者可被仰上候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」八月八日　　本多佐渡守正信（花押）

羽柴陸奥守様　貴報

93

「「山御文書三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

御所様（近衛信尹）　関白職御給之由、此比傳承候、於真儀者、御家職与申、千秋萬歳目出奉存候、実所不承届、雖楚忽之儀候、先々以愚書御祝言申上候、仍御太刀一腰・御馬一疋并綾子二巻致進上候、此等之旨、可然之様可預御披露候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」八月　　龍伯

進藤大藏入道殿

94

「家久公御譜中」

先是就漂著琉船之事、松浦法印投細書於島津忠長・比志島國貞、情意如左、

95

「仝御譜中」

忠恒著船及入麗城之日不傳、今者、到鹿児島應須八月中旬、

96

「御文庫廿三番箱家久公十六巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

態令啓上候、仍而□（間々カ）如申入候、琉球船之儀ニ付御注進申上候處ニ、御返書并御下知之通被仰下候条、則爲御披見持せ進入仕候、早々御覧被成、御分別可然存候、

大御書様茂九月中旬ニハ江戸御下向之由ニ候間、其内荷物等早速可有進上之由ニ御座候之間、其御心得被成、荷物等御上せ候者、從此方急可差上候、一庵も是ニ御待ニ候条、其御心得可然様ニ御取合奉賴存候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」八月十五日　　松浦法印宗在判

比志嶋紀伊守殿

嶋津圖書入道殿　人々御中

97

「御文庫二番箱義弘公三巻中」「義弘公御譜中正文在巻本トアリ」

以上

今度本助丞方被成御着上候、即東我等壱人相添着下申候、「本マヽ、已來カ」

本佐州・同上野介披露被申、御仕合殘所無御座由、兩人

より御申上せ候間、御滿足令察存候、於我等大慶存候、
就中琉球人先月渡海可仕様、先度和久甚兵罷上申候ヰ、
早渡海仕候哉、　上様江御礼申上候様、御才學(覺)專一存候、
若又于今渡海不仕候者、御人數可被相渡由、彼方へ何ヶ
度も被仰届、其上にても於不仕渡海者、被得御意御尤存
候、併琉球へ無御油断御使者被渡、御究可然存候、此等
之趣自拙者能〻可申入由、本上州ゟ被申越候間如此候、
奥州様へ具ニ御相談可被成儀專一存候、猶本助丞方可被
申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年歟」　八月十九日　　山駿河守　直友(花押)

惟新様
御報

98

『在官庫』

(本文書ハ九七号文書ト同文ニノキ省略ス)

「此一書前ニ正文写置、參照スヘシ」

99

「御文庫廿二番箱九巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

追而乍輕少、砂糖一壺進覧之候、聊御音信之驗計候、
任御所望犬差上候処、相届候通御報礼御殿勤之儀候、殊
合藥一嚢送給候、御芳意之段祝着不少候、然者小壺之事
承候、先川野猪右衛門尉差上候、其ニ持せ進入之候、定
相届候覧、是も當時焼出候かたきニ候間、可入御所多事
難計存候、次旧冬使者差上候刻、焼物一嚢并白藤下預候、
御懇志不得申候、白藤之事當國珎しく候、秘藏不斜候、
されとも當春者不含花無心元存候処、此初秋之比花かつ
〳〵咲出、一しほ見事ニ候つる、乍去其時分以之外相煩、
しか〳〵詠候ハぬ事殘多存候、愚老病之儀、今度者雖迷
惑極候、色〻加養生此比少快氣候、然共行歩一切不相叶、
一席之内も用他力、漸立居仕躰候、弥老屈之儀可有御推
量候、委曲者彼者申候間不詳候、恐〻、

「朱カキ」
「慶長十年」八月

駈庵老

「義久公御案文也」

100

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

就今度舞進之儀、差越使者、并太刀一腰・馬代黄金拾兩
到來、悦思召候、猶本多佐渡守(秀忠)可申候也、

九月三日　(花押)

101

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

薩广少將殿

以上

大御所様へ爲重陽御祝儀、御服五之内綾一・染一・しゆちん一、御進上被成候、致披露候處ニ、御仕合共ニ御座候間、御心安可被思召候、　御内書之儀、追而相調可進候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十年」九月五日　　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守殿

102

「御文庫ハ二番箱九巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

其已後御無音罷過候、背本意候、然者當　御所様関白職御給之由、千秋万歳目出候、先々右之御祝儀、以愚書申上候、次愚老爲養生祐乘法印被致下國、種々被加療治候故、凡快氣之躰候、乍去膝之痛不相調弥無断候、是者老屈又脚氣にて候欤、於當分者永不腰立たるへく候、殘多次第候、依之馬鷹なとの事も中々存絶候、旁不可過御高察候、仍南蠻頭衣一并雖見苦候革五枚、此内黒皮二枚令進上之候、可然様ニ可預御取成候、恐々、

「朱カキ」「慶長十年」九月

倉光主水佑殿

「義久公御案文也、昔年ノ写左ニアリ、參考スヘシ」

103

『案文在雜抄』

（本文書ハ一〇二号文書ト同文ニノキ省略ス）

104

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲重陽佳節、小袖五到來、悦覚候、尚本多佐渡守可申候、謹言、

「朱カキ」「慶長十年」九月十三日　（秀忠）（花押）

薩广少將殿

105

「二番箱十三巻中」

尚以山口駿河守殿迄委申入候条、不能一二候、以上、

爲重陽之御祝儀、呉服五ツ進上被成候、趣披露仕候処、遠路被入御念段、喜悦被　思召、　御内書被進候、則御目録ニうら判仕進覧候、然者私へ御小袖三之内、かのこ・

綾・唐嶋送被下候、御芳情之至難申謝候、委曲御使者可爲言上候間、奉省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」九月十三日　本多佐渡守正信（花押）

羽柴陸奥守様
貴報

「家久公御譜中正文在文庫トアリ」

「御文庫二番箱義弘公五巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

猶〻御注文之内少庵ノ名ハ無御座候、定而有閑へ被遣候内ニ可有御座候間、有閑ゟ被遣候様ニ可申達候、扨も〳〵遠路隔山海、方〻へ御思慮之儀共、中〻紙上ニ難申上候、各よりも拙者方ゟ能〻相心得可申上旨候、八月廿六日之御書、忝令拜見候、

一焼物共如御目録拜領仕候、又候哉、一段見事ニ出來、中ニも蘭鉢別而見事さ、驚目申候、殊更御てつから爲被入御念由、御使者御物語候、一入忝奉存候、遠路重道具毎度之御芳慮之段、短筆ニ難申謝候、

一如御注文、太飛州・覚甫・歸齋・宗圓へ相届、即ハ及御報候、有閑公ハ大坂ニ御座候間、御使下かけニ御持參候様ニと申談候、即拙者ゟも書狀相添申候、定而書狀ニて御礼可被仰入候、津田小平次殿守拍ハ折節江戸へ下向にて留守にて御座候間、歸宅次第慥ニ相届可申候、山口殿宗可へハ、御使直ニ御届之由候、

一御壺宗圓ゟ念を入申、從敬学院取寄、即御使へ相渡申候、置所一段涼しく可然所にて御座候条、御茶勝可申と奉察候、

一去夏者　少將様被成御上洛之處、折節江戸へ罷越、御馳走不申上候事、遺恨ニ奉存候、併無所殘御仕合ニて、早速御歸國、珎重御滿足奉察候、

一竜伯様大事ニ被成御煩候処ニ、被得御快氣之由、是又目出度珎重奉存候、

一釜菜籠可被成御馳走之旨忝存候、手持御座候者、被成御上候而可被下候、

一來年者到甑嶋黒船可參之由承候、左様ニ御座候者、定而珎敷物共可有御座候条、不斗爲見物可罷下候、太飛驛殿とハ切〻御噂申暮迄ニ候、

一古織部殿すき屋ノ入口窓なとの様子、少替申由候、いまた普請半ニて御座候故見不申候、重而可申上候、

一雖些少之至候、しやうし紙二束進上之候、委曲御使者口上ニ申上候間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年歟」　九月十五日　亨徳院
拝答　惟新様　人々御中　正純（花押）

107
「家久公御譜中」
山口直友依要用事、使和久甚兵衛尉齎今年九月十五日之書至薩州、其書載　家康公今日出伏見赴關東、且不可石漕船造作遲滞等之事、

108
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
尚々御歸國候以後、爰許弥々相替儀無御座、　上様御機嫌能關東御下向之儀御座候、御心易可被思召候、委細ハ和甚兵口上可得御意候、以上、
御歸國候以後不得御意候、仍　上様今月十五日ニ關東御下向之儀候、御機嫌能御息災之御事候間、可御心易候、我等儀伏見御留守居在之事候、御用之儀御座候者、可被仰越候、就中石船之儀、彼是得御意度儀共御座候間、和甚兵衛差下申候、不及申候へ共、無御由断石船出來申様可被仰付儀、肝要存候、并吳國へ之御朱印三ッ相調進上申候、雖然口上ニ申含儀候間、能々被聞召届、吳國へ之舟御遣御尤存候、猶和甚兵衛口上可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」　九月十五日　山口駿河守
奥州様　参人々御中　直友（花押）

109
「又吉常久譜中」
九月十六日、右松安右衛門尉爲　惟新君之使節上著、賜玉札曰、令伊集院肥前守代常久云々、翌日封答書與安右衛門尉、
十月廿八日、眞蓮房・伊地知利兵衛尉爲使節上著、　太守忠恒主賜去月十六日之貴翰曰、長旅之勞苦至至矣、又可使伊集院肥前入道代常久也、

110
長々在京辛勞至候、然者爲番替伊集院肥前入道差上候、始町田勝兵衛尉各相替下向尤候、猶眞連坊可申候、恐々謹言、
九月十六日　忠恒（花押）
又吉殿

111
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲重陽之御祝儀、　將軍様江呉服五進上被成候趣、披露仕候處、被爲入御念候段、喜被思召、　御内書被遣候条、可被爲得其意候、則御目録ニ、乍恐拙者致裏判進覧仕候、隨而私へ御小袖三之内、染鹿子・白綾・亀屋嶋送被下候、毎度御懇情之至、書中ニ難申上候、委曲爰元之様躰、御使者可被仰達候条、奉省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」
九月十七日　　本多佐渡守
　　正信（花押）

羽柴陸奥守様
　　参人ゟ御中

112

「家久公御譜中」

大久保相模守忠隣・本多佐渡守正信投九月二十五日連署之奉書於忠恒、遙　台命曰、領國所有船如載五百石、雖爲商船進獻之、而至淡州岩屋、可授九鬼長門守、且爲之久永源兵衞尉・向井將監亦在彼地云云、

113

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶〻御領分之内、五百石入ゟ上の船者、有次第可有御上候、縱あきない船ニて御座候共、不殘御上可被成候、以上、

爲　上意申入候、仍五百石積ゟ上之船、可有御進上之旨被　仰出候条、淡路之岩屋迄被相届、於彼地九鬼長門守ニ可有御渡候、爲其久永源兵衞尉・向井將監を被遣候条、其御心得可被成候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」
九月廿五日　　大久保相模守
　　忠隣（花押）
　　本多佐渡守
　　正信（花押）

嶋津陸奥守殿

114

『在官庫』

（本文書ハ三九七号文書ト同文ニツキ省略ス）

115

「義久公御譜中」
「御自筆」
「正文在清水岡寺」

龍伯

片岡をかこひて寺に住人ハ
うき世中やしら菊の花

116

「右和韻正文在清水岡寺」

太守御遊之次、留玉車於岳寺、和歌一首詠之、
見(愛カ)▒境地与菊花愚、時日相過後得拜覧、豈可黙耶、因用
御歌韵尾花字、爲卑詩一絶、以代于岳之庵主云、
松堂拜和　岳限山鎖小茅家　何計今留太守車　菊圃籬荒
景雖野　和歌芳恵美於花
慶長十年乙巳九月廿七日御光駕也、

117
「家久公御譜中」
板倉伊賀守勝重・米津清右衛門尉亦贈連署書、亟催促大
船進獻之事、

118
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
巳上
先書ニ申入候大船之儀付而、江戸年寄衆ゟ重而以書狀被
申越候間、進申候、縱商舟候共、其御領分被成御改、是
亦同前ニ可被成御上候、恐惶謹言、
「朱カキ」「慶長十年」九月晦日　板倉伊賀守勝重(花押)
米津清右衛門尉親▒(花押)
嶋津陸奥守様　人々御中

119
「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
巳上
御下國之以後無音、御床敷存候処、御札忝存候、此地
御滯留中者、切々可得御意をも処、何角被取紛御殘多
存候、
一去九月十五日ニ、　大御所様此地被成御立候、此比江
戸御着座之由候、
一爰許相替儀無御座候、珎敷御事候者、此地御宿迄可申
入候、爰許相應之御用等可被仰付、不可有疎意候、來
春御上洛之節、萬々可得御意候、恐惶謹言、
「朱カキ」「慶長十年」十月十一日　古田織部重然(花押)
奥州様御報

120
「御文庫二番箱義弘公五巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」
「朱カキ」「慶長十年歟」霜月朔日古織江御成之覚
一床ニぶかんの繪、賛ハ一山、
一棚ニはね引切、但棚ハ二重下ノ方ニ、
一同上ニハせい高、段子ノ袋ニ入テ盆ニのせ、
一てふくへにて火なおる、釜ハこしき釜

振舞

一杉ノ足打ニ、汁ハ霸後ニいものくき入テ、さいかいやき

同八寸ノへきニけり〳〵やきて、わキニからの物、

當世ノもよき皿ニ生こノふりこ、

くわしくりのこノもち・なしやきふ、ぬりふち高ニ

手水ノ間ニ

一墨跡まきて、舟ニ梅白玉、

水さしハ　いかやき

水こほし　めんつ

茶わん　せと

手水ノ間ニ、水さしニせい高置合テ盆ニのせ、

一座敷ハ四帖半大メ丸額がくとふつべと將軍様へ上ル、

以上

惟新様まいる　山駿

121

「家久公御譜中」

忠恒賜告還國之謝禮、或漂著平戸琉船之事、或撿領内而無應　台命大船、云拾云恰、差使節而不可有不述謝事、於是遣三原諸右衞門尉重種・喜入吉兵衞尉久洪、至駿府及淡州岩屋等之所、各述其事、大概見本多正信・久永源兵衞尉・向井將監・山口直友之回報、

122

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以白鳥壱ツ進覧、段〻御事に候、以上、

被爲入御念、別紙之尊書具ニ拜見仕候、如被仰下候、於上方ニ兩　御所様御前、御仕合殘所無御座御歸國被成候儀、乍恐拙者一人之様ニ大慶奉存候、隨而しゆちん廿端送被下候、寄思召御心付之段、書中ニ難申謝候、委者爰元之様躰、三原諸右衞門殿・喜入吉兵衞殿可被仰達候条、不具候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十一月二日　本多佐渡守正信（花押）

嶋津陸奥守様御報

123

「又吉常久譜中」

十一月四日、川田大膳正、同月廿日、伊集院肥前入道元巢上著、各代常久爲　公宅警衞也云〻、

十一月廿六日、辭伏見到大坂、十二月五日、去大坂至福島、翌朝下于傳法欲解纜、而逆風揚波浪、所以徒留滯也、

十二月八日、解纜於傳法、著於播州室津口鹽屋、尒來無限歸思雖滿西海、風波遮于前路、彼此留滯經數日矣、是以廿九日、繫船於筑前州唐泊、所以將越年也、慶長十一年丙午、迎東皇於船中、揚霞盃祝萬歳、而更無休期也、被隔逆風、而留滯于此者有日矣、雖然順海水之干滿、漸初八未時著于薩州帆湊、入于私宅矣、

124

「義弘公御譜中」

「正文在入佐勝左衞門」

尚〻久不得貴意、且夕存出候、返〻慥成便宜御座候砌、御犬上せ被下候ハ、忝可存候、乍恐此書狀、陸奥守様へ御届被成候て被下候ハ、可忝候、呉〻井上五郎兵衞事被仰遣候て被下候者、於拙者忝可奉存候、以上、

其以後遙久不得御意、御床敷不断存出計候、弥御息災御座候由珎重存候、拙者式も未堅固在之儀御座候、何様ニも候而、今一度得貴意度存念迄御座候、然者隆景家來井上又右衞門尉方より如此被申越候、彼身上ハ老足之儀候、彼息五郎兵衞尉、福嶋大夫殿へ奉公望ニ存候間、貴入様ゟ被仰遣、相調候様ニ奉賴之旨、拙者相心得可申上通候条如此候、か様ニ申入之段、近比御心底如何存候へ共、彼人隆景堅固之刻より別而申談候故ヲ以、和利無被申候付得貴意候、自然貴入様より被仰にくゝ御座候者、陸奥守様より被仰越、相調候之様奉賴存候、

一秀賴様弥御息災御座候間、御心易可被思召候、

一大御所様・將軍様是又何茂御息災之通、追〻御吉左右相聞候条、御機遣被成間敷候、

一珎數御鷹御所持被成候哉、切〻御遊山奉察候、拙者事も于今鷹共所持仕候、乍去可然犬無御座候故、物數仕候事不相成躰ニ御座候、畏可然御犬御座候ハ、、拜領仕度念願御座候、爰許相替儀無御座、片市兄弟無事ニ御座候、市正者九月十三日駿河・江戸被罷下、去月廿日歸參候、今度之仕合所殘無之様子、可被成御推量候、猶追而可奉得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年歟」

十一月五日　　小林民部少輔
　　家孝（花押）

羽兵入様
人〻中

125

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而羚羊一丸進獻候、書中之驗迄候、以上、

態啓上候、先度者被思召寄、遠路御懇志、一入過分至極候、此比上方御到來共候哉、御珎敷儀候ハ、、可被仰聞候、西國衆明年、江戸御普請爲催、先人數被召上御用意之由候、別条無相替儀候、爲御存知候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」霜月十一日　　相良左兵衛佑頼房（花押）

羽柴陸奥守様　参人〻御中

126

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠直」

其以來不通候、仍石漕舟何程出來候哉、彼是爲見廻用使書候、猶相含口狀候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十一月十一日　　忠恒（花押）

北郷次郎殿

127

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」

猶〻一臺か事ハ、さためて遲〻たるへく候、然共涯分〳〵いそき候へとこそ申候へ、彼是參候てこそ可申候、

明日ハ早朝可參之由承候、致其分別候、然共老躰之行可爲遲〻候、然者伊平左所へ宿之儀被仰付候欤、定而さし着ニ振舞可有之候、さやうニ候ハ、、未は申之刻ニうつり可申候、先宿のふるまいヲ御とゝめ候へかしと存候、此一儀可申ため一筆如此候、恐〻謹言、

「朱かき」「慶長十年歟」神無月十九日　　龍伯（花押）

惟新　参

「義弘公御譜中、正文在官内喜兵衛、御自筆ト朱カキアリ」

128

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御使札并爲御音信、段子三端被懸御意候、過分ニ奉存候、然者御手前ニも、御領分商舟ニも、拾六瑞帆（ママ）ゟ上之舟無御座候間、相心得存候、乍去五百石ヨリ上ニ積可申船ニて御座候者、淡路まて御廻可被成候、五百石入まてハ上り不申候間、當地へ御廻御無用にて候、拙者共ハ近日御請狀調候へハ罷下候間、五百石ゟ上之舟、御手前ニも商舟ニも無御座由、御手形ニ被遊可被下候、尚御使者へ口上ニ申渡候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十一月廿日　　向井將監尉
忠勝（花押）

羽柴陸奥守様
御報

129

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊札殊段子三端被下候、忝奉存候、遠路之所、御使早〻被下候、然者御領分ニ五百石積ゟ上之船無御座候由、其通駿府・江戸様へ言上可申候、御報ニ如申入候、十六瑞（マヽ）帆之舟ニ茂、五百石つミより大成と思食候ハヽ、淡路まて御届可被成候、五百石積ニ而も上り不申候間、其御心得可被成候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十一月廿日　　久永源兵衛
重勝（花押）

羽柴陸奥守様
貴報

130

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚〻五百石積ゟ上之船無御座候ハヽ、御一札被遊、
両人名所にて可被下候、以上、

爲御請狀遠路渡海と申、早〻御使御越被成候、然者御領分内ニ、五百石積ゟ上之舟無御座候由被仰越候、十六端帆・十四端帆、是ハ五百石積ゟ内之船ニ可有候ハんかと存候、乍去十六端帆之船之義、五百石積ゟ上之舟ニ而御座候ハヽ、淡路國由良湊と申所御届、九鬼長門守・小濱久太御渡可被成候、五百石積ゟ内之船ニ而御座候ハヽ、御廻候事御無用ニ候、五百石積まてハ上り不申候、猶御使者申渡候間、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十一月廿日　　向井將監
忠勝（花押）
久永源兵衛
重勝（花押）

羽柴陸奥守様
□

131

「家久公御譜中」
「正文在文庫」

爲音信、蜜柑両度到來、喜覚候、委曲本多佐渡守可申候、
謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十一月晦日　　（秀忠）（花押）

薩广少將殿

132

「御文庫二番箱家久公十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而申候、任到來南部酒兩樽進上候、猶追而可得貴意候、以上、

今度平戸へ琉球寄船之儀付て、兩人被成御差上候、御書中ロ上之趣承届、則關東へ御内存之通、本上州迄以使者を申入候、定而被請　御諚、返事可有之候条、從是追而可申上候、就中石船之儀被入御情、漸出來申候由、尤珎重奉存候、弥〻無御由断可被仰付儀、専一存候、將又見事之經筒之花入贈被下、忝次第難申謝存候、猶御兩人申談候間、不能細筆候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」　極月五日　　山口駿河守　直友（花押）

奥州様　參人〻御中

133

「古御文書以下三拾三通一巻十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

御使札拜見申候、仍御國之蜜柑五百入之籠四被下候、誠以忝存致賞翫候、今度椛山權左衛門・平田太郎左衛門儀、そつしなから、早〻得御意申候處ニ、則被召出誠以忝存候、將又大舟可被成御進上旨御觸ニ付而、御家中御改被成、十六七たん程之舟二艘被成御進上之由、拙者式手前之儀、拾八たん程之舟御座候て、是を致進上候、猶追而可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」　十二月六日　　寺澤志广守　廣忠（花押）

羽陸奥守様　御報

134

『飯野白鳥權現棟札』

奉造立白鳥六所大權現宝殿一宇云〻、

當山六所權現者、先尋其本地、六觀音尊容云〻、

又垂跡景行第一王子日本武尊碎東夷云〻、

大壇主藤原忠恒朝臣并義久・義弘云〻、

慶長十乙巳年雪月十一日

當座主　權大僧都法印光儼

木屋奉行　鎌田勘兵衛藤原政秀

日記付　弓削小拾郎

同　野田六郎三郎

塗師　荒武對馬守

惣大工　美代宗右衛門正清

鍛治　松田四郎兵衛尉

135

「義久公御譜中」

「此本在御文書」「本マヽ、方ノ字ナン」

慶長十年十二月、拙齋より千句興行の時所望に、

龍伯

神かきは冬も青葉の榊かな

136

「正文在国分金剛寺」

「朱印」

今度國分江就被移　御殿、爲祈願所吉祥院知行之内廿石、新知八十石、合百石被充行訖、所中之諸役可爲御免許、京儀國役之事者可被相勤者也、仍狀如件、

慶長十年季冬十四日

山田越前入道
理安（花押）

伊集院下野入道
抱節（花押）

金剛寺

「上包ニ有之」
金剛寺

137

「義久公御譜中」

「正文在龍昌寺」

「朱印」

今度國分江就被移　御殿、爲新地建立本知廿石、并當知八十石、合百石被充行畢、所中之諸役可爲　御免許、京儀國役之時者可被相勤者也、仍狀如件、

慶長十年極月十四日

山田越前入道
理安（花押）

伊集院下野入道
抱節（花押）

龍昌寺

（上包カ）
龍昌寺

138

「御文庫廿二番箱九巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

爲歳暮之御祝儀、御使札并小袖一重被懸御意候、遠方之儀候処、毎年無御失念儀共辱次第候、殊子共母之所迄銘〻被付御心儀、誠幾久敷目出存候、將又來春江戸御普請被仰付候付、從御手前石舟普請衆、當月中被差上、御自身之事者、正月中旬比可有御上候由、御大儀中〻難盡書面、我等事者、未とかく御觸無之候、如何可有御座欤と存候、猶委ハ御使へ申候間不詳候、

猶〻ゑひら二腰・手縄二筋、無然〻候へ共、任御所望進申候、

「朱カキ」
「慶長十年」十二月十六日

寺志州老　御返報

「義久公御案文也」

御留守之間置目之事

一御留守中、おくへ歴〻御礼雖申上候、　御前へ罷出儀者一切停止之事、

一納殿衆たりといふ共、夜に入候て、おくへ堪忍仕候儀、不可然候、併遮而御用之時□たそ同心いたし罷出、御用等可承候、一人者用捨可仕之事、

一出家衆と候ても、おくへ出仕無用たるへ□事、但栄存房・瑞仙・瑞陽事者、無余儀御用之時者、納殿衆を奏者ニいたし罷出不苦候、其外之衆者、遮而於無御用者、出仕停止事、

一於奥或客來と号し、或どししゐを仕候而、酒を□こし候事不可然候、各も大事之御奉公指當儀候条、涯分たしなミ可爲肝要候事、

一一向宗に罷成間敷候、もし此宗躰をすゝめ申候ものあらは、則可申上事、

一小臺所よりおくにハ、たとひ親を持子を持候といふ共、無遠慮男衆可罷通儀、不可然候事、

一奥ひろ間之番并御すゑの口、其外所〻の番衆、無緩勤番可申候、自然越度於有之者、其科のかれましき事、

一女房衆におひて、いかやうの縁者親類他事なき間にても、私ニ對面可仕儀可爲停止、無余儀用所之時者、納殿衆へ申入候ハ、、即納殿衆前より得　御内儀、以其上可致見參事、

一惣別　龍伯様御判形を以、御置目被定置上者、雖不及申候、臺所・納殿衆よく〳〵御置目之旨を相守、御奉公可仕事、付若ほしいまゝによこさま成儀を申者於有之者、喜入攝津守・本田六右衞門尉へ申聞せ、以相談可相調事、

一おく御藏入納方・はらひかたの儀、爲役人よく〳〵入念遂算用へき事、

一納殿衆・臺所役人諸事遣方之儀、折〻こまかにさん用いたすへき事、

右条〻、堅令停止早、若違背之輩あらは、互言上い

たすへし、越度之者ハ重科にをこなひ、又申上候輩者可加褒美者也、

「カキ入也」「慶長十年」十二月十八日

「此正文、御文庫拾七番箱拾六巻軸物中ニ有之、季通紀合ス、年間ナシ」

140

「義久公御譜中」

一我罹病痾、雖陋邦之嘗藥餌者有日於茲、未得其驗、是以達　家康公之聞、即令祐乘房遠下向薩摩州加療養而得驗氣、故遣价使所以達謝禮也、于時賜　台書、「十二月廿五日也」記左、

141

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

好便之条令啓上候、先度御使御兩人へ委細申入候、被仰越通、關東へ得御意申候間、本上州ゟ急度返事可有御座候間、其節則御左右可申上候、將亦石舟之儀、無御由断被仰付候旨、尤奉存候、就中來春御上洛、是又無御由断奉待存候、大御所様來春早〻被成御上洛之由申來候間、無御由断御上洛専一存候、猶追而可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」極月廿日　山口駿河守直友（花押）

嶋陸奥守様　参人〻御中

142

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲歳暮佳儀、小袖五重到來、喜覚候、委曲本多佐渡守可申候、謹言、

十二月廿一日　（秀忠）（花押）

薩广少將殿

143

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲歳暮之御祝儀与、呉服拾進上被成候、趣披露仕候處、遠路被入御念之旨被　思召、御仕合能御座候而、　御内書被進候、次私へ呉服五ツ之内、綾・染物・薄板・かめや・唐嶋被懸御意候、毎度御芳情之至、書中難申上候、猶山口駿河守方ゟ可被申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十二月廿一日　本多佐渡守正信（花押）

羽柴陸奥守様　貴報

144

「正文在巻本」「義久公御譜中ニ在リ」

以祐乗坊療治、病氣平癒之由、珎重候、隨而砂糖五百斤到來、喜悦候也、

『慶長十年』十二月廿五日　◯「御墨印」

嶋津修理入道とのへ

145

「家久公御譜中」

忠恒以使者獻時服、而奉祝歳暮之佳儀於　將軍家及　家康公、僉以有　御内書及奉書、

146

「正文在古御文書軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様爲歳暮御祝儀、呉服拾之内、御綾三・御染物三・御白壱・御しゝら壱ッ被成御進上候、致披露候處、御仕合能御座候間、御心安可思召候、　御内書之儀、重而相調可進之候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十年」十二月廿六日　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守殿

147

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲歳暮之祝儀、小袖十之内綾三到來、悦思召候也、

「朱カキ」「慶長十年」十二月廿八日　◯「墨印」

薩摩少將殿

148

不寄存候処、御芳翰殊下緒一具并唐墨、御心畏入存候、勝吉殿所持之物と承、形見ニ別而満足不斜候、さても〳〵勝吉殿之事、種〻ニ入御精養生候へとも、『十二月十一日二十三病死ノコト』時刻仕候哉、不及是非、次第、千万殘多事共、難伸筆端候、就夫御愁傷案中ニ存候、其後も節〻見廻可申候得共、無寸暇候之条、先〻歳暮祝言申納候、萬端明春早〻可申承候、恐惶謹言、

『當慶長十年乙巳』十二月廿八日　『源右衛門親商子小源五也』源右衛門親存（花押）

本田助允殿　御報

149

「古御文書在御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲歳暮之御祝儀、　公方様江、嶋津陸奥守殿ゟ以使者被仰上、并呉服進上被成候趣、酒井雅樂殿披露之處、一段之

御仕合にて、　御内書被進候、次拙者へ御小袖五被懸御意候、御心付之至書中ニ叵申盡候、此等之趣、貴所様ゟ可然様ニ被仰遣可被下候、委者爰元之様躰、陸奥守殿御使者可被仰達候条、不具候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十年」十二月廿九日　　本多佐渡守正信（花押）

山口駿河守様　御報

150

「義久公御譜中」

「正文」

爲音信、砂糖千斤、遠路到來、喜悦候也、

「朱カキ」
「慶長十年」十二月廿九日　◯「墨印」

龍伯

151

「御文庫拾七番箱十六巻中」

敬白　起請文之事

刀のめきゝ被成御稽古ニ付而、　御前へ致祗候、御書物共仕候、毛頭他言仕間敷候、若於偽申上者、

▽梵天帝釋四大天皇、惣而日本國中大小神祇、殊者▨▨八幡大菩薩　春日大明神　諏上下大明神　天滿大自在天神可罷御罰者也、仍起請如件、△

「本ノマヽ」
慶長十年晦日　　伊勢兵部少輔貞昌（花押）

別府舍人佑殿

152

慶長十年國府衆中

。町田縫殿助後名駿河守　子縫殿助　其子右京。同名八衛門。長濱十郎兵衛尉。長崎織部佑　子次右衛門　其子左七衛門。加世田善左衛門尉　孫刑部左衛門。鎌田外記亮　子外記　其子次郎五郎。平田久兵衛尉　御成敗。飯牟禮紀伊介　養子善五郎。長谷場主膳正　鹿兒嶋江。大迫平左衛門尉　子蘇右衛門。本田與三兵衛尉。相良勘解由次官　子權兵衛　其子土佐。下村主水佑。阿多勝右衛門尉。瀬戸口三左衛門尉。佐土原兵右衛門尉　子狩野之助　子源兵衛。木脇若狭入道。有馬清丞　子清左衛門　其子弥八。平田肥前入道。永吉三河入道。宮内主殿助　養子喜右衛門　子喜兵衛。東郷藤兵衛尉　子肥前　其子藤兵衛。平田新二郎　養子利右衛門。山崎少兵衛尉　谷山へ移衆。市來太郎右衛門尉　子五兵衛。辻伊与入道　養子伊左衛門。坂元彦右衛門尉　子休左衛門　其子覚介

。後藤宗次郎。同名石見守　子吉左衛門　其子五右衛門
。野村城之介　子伴五左衛門　其子伴四郎。通蓮齋。青
屋宗右衛門尉　子市來宗兵衛　其子權右衛門。等意　子
井尻覚兵衛。郷田源左衛門尉　子源介。野村少外記　子
伊賀　其子外記　二男左門。川村玄番允　子与三兵衛。
宮内宗十郎　養子兵部左衛門。岩切縫殿助　子縫殿。大
寺弓次。同名源五。村岡豊前守　子城之介。三原次郎左
衛門尉　子大炊助。牧野瀬弥介　養子六左衛門。町田新
左衛入道。津曲善左衛門尉　子七兵衛　其子新寿院。宮
内助兵衛尉　子与八左衛門。吉田丹波入道　子九郎右衛
門　其子九郎兵衛。案原因幡跡。貴嶋和泉守。野村藏人
佑　加治木へ移ル衆。山田弥七後土佐。般若坊。黒田少
兵衛尉　子才之丞　其子新右衛門欽。中嶋四郎右衛門尉
子右近　二男掃部左衛門。坂元平右衛門尉　子与左衛門
。相良彦二郎今名主税助。大山六右衛門尉　孫伊与欽。
稲津伊豆守　子因幡。川口半右衛門尉。田中藏介。同名
喜兵衛尉。都外平二兵衛尉。石川弥右衛門尉。渕脇弓右
衛門尉　子久左衛門。外山五郎右衛門尉　養子喜兵衛
其子次郎左衛門。岩切仲右衛門尉。平田喜左衛門尉。山
内權左衛門尉　子與右衛門　二男山介。河野主馬允。栄
間(ギン)。臼井丹波守　孫長崎千右衛門　其子三郎右衛門。郡
山伊与介。山中四郎兵衛尉。種子田勘兵衛尉　子新左衛
門。上原右衛門佑。伊集院下野入道。兒玉五右衛門尉
養子主水。岩城源兵衛尉。木原七郎三郎。村田源左衛門
尉　子郷左衛門　二男平内左衛門。肥後宗兵衛尉。南雲
宮内少輔　子三郎　其子壱岐。市成弥兵衛尉　養子喜右
衛門　其子弥三郎。勝目八右衛門尉　子與左衛門。田代
二右衛門尉　養子源兵衛。肥後壱岐守　子主水　其子勝
右衛門。有川六弥左衛門尉。村岡藤藏。児玉次左衛門尉
。草道七兵衛尉。大迫喜右衛門尉　子万左衛門。門松五
郎次郎。二階堂与七郎。蒲生宮内少輔　養子新十郎。東
郷堅介　子五郎兵衛　其子堅介。同名助八。小野新右衛
門尉。三宅七兵衛　子七兵衛。崎田平兵衛尉。山下助左
衛門尉。弓削藤右衛門尉　子藏人。川上治部左衛門尉。
沢權右衛門尉　子新右衛門。吉井甚三郎。吉田六郎右衛
門尉後名伴雪。古河勘右衛門尉。竹田弥七郎。米田弐之
丞。高野善左衛門尉　子勘左衛門。松田万右衛門尉　養
子堅介。宮里備後守。市來出雲守。前田七郎右衛門尉。
伊地知勝左衛門尉　子周防　其子治十郎　其子弥吉郎。
芋生佐渡入道　養子与次郎。久目村才七　子七右衛門。

市來善兵衛尉。竹内平三郎。日野大膳亮。小野少三郎
子甚右衛門　吉岡仲四郎後名宮内太輔。折田六左衛門尉
子權五左衛門。宮原彦兵衛尉　子平八　其養子次郎兵衛
。谷山相左衛門尉　子兵左衛門　其子与一右衛門　二男
佐左衛門　与一右衛門子与市。肥後隱岐　子縫殿　其
養子主計。大野弥三郎後名匠堅　子正三郎。慶節老。長
濱備後守。竪山讃岐入道　養子郷兵衛　其子伴左衛門。
市成藤助　子杢右衛門　其子弥右衛門。中將。浦川杢左
衛門尉　子藏丞　其子杢左衛門。川野才之丞　子六郎左
衛門。川上右京亮　子佐左衛門　其子右京。川村新左衛
門尉　子八左衛門。和田乘介　子十介。山内十兵衛尉。
和田三五郎　吉松江移ル衆。二木五右衛門尉　子才左衛
門　其子權左衛門。本乘坊　子本林坊　其子覚入坊。川
村帯刀長　子伴左衛門。同名半藏。小城大炊左衛門尉
吉松江移衆。平野六郎左衛門尉　子國分丹後。鎌田左京
亮　子左京。長野吉左衛門尉。伊集院市右衛門尉　大口
へ移衆。福崎小左衛門尉。津留吉右衛門跡。福崎新兵衛
尉　子新兵衛　大口衆。染川源之丞　子源之丞。圖師九
右衛門尉　子喜兵衛。新納孫右衛門尉。市來勘三郎。大
善坊　子忠存坊　其子喜右衛門。存力坊　加治木江移ル
衆。伊ヶ藏勘解由　横川へ移衆。阿多甚左衛門尉。阿多
源左衛門尉　養子才左衛門。本田与左衛門入道　子大炊
太夫　其子佐左衛門　大炊太夫舎弟与左衛門。山口相左
衛門尉。家村源左衛門尉　子采女　其子清兵衛　源左衛
門二男源右衛門　其子次左衛門。山下右近將監　他出被
申候。武元五郎右衛門尉　子善之丞。本覚坊　子存堯坊
其子本学坊。大泉坊。齋藤佐渡守　子与三左衛門　其養
子伊左衛門。爲阿弥。野間孫兵衛尉　子九左衛門。德田
市左衛門尉　子少右衛門。順賀。永利傳左衛門尉。窪田
清右衛門尉　子善左衛門　二男性音坊。岩城与左衛門尉
養子平右衛門。東郷加賀守。安樂大炊助　子伴兵衛　其
子伴三郎。山田越前入道　其子民部少輔　二男土佐　三
男主計。伊集院刑部左衛門尉　養子平兵衛。吉井郷右衛
門　かこしま。吉永源兵衛尉。喜子道壽　其子服部權兵
衛。喜入大炊助　子久右衛門　二男丹波　三男久次郎
久右衛門子吉兵衛　其子十郎。慶阿弥。長田後藤兵衛尉
子主税。福屋長介後名五郎兵衛。薗田助右衛門尉　子勘
左衛門　其養子治左衛門。妹尾傳兵衛尉。竹村孫左衛門
尉後名鎌田土佐　養子鎌田新左衛門。内田源二郎。川越
右近將後名三右衛門。壱岐野弥四郎跡。大房跡。大光坊

跡。宇多七左衞門尉　子二右衞門　。米良弥八　。松本彦左衞門尉。宮原右兵衞尉。土持次郎九郎後名權之助。加治屋六丞。東郷内膳正　吉松江移衆。上原源右衞門尉。有馬長左衞門尉。鎌田清兵衞尉　子平右衞門。有馬善吉。平田平右衞門尉。時任采女正。野村吉五後名織部。川上又左衞門尉。川野郷兵衞尉　子道紀　其子長右衞門道紀舎弟郷左衞門。高崎甚左衞門尉。永吉伴兵衞尉。宇都八兵衞尉　養子弥七左衞門。山田弥兵衞尉。愛甲五郎左衞門尉　養子五郎左衞門。野村玄蕃允。北原治部左衞門尉　子雅樂助。久木田五兵衞尉　子孝左衞門。福崎彈右衞門尉。中原六左衞門尉。有馬讃岐守　子吉兵衞　二男治兵衞。染川善六。指宿壱岐守　子主税　其養子助左衞門　主税舎弟隼人。同名主税助、右ニ記。久留弥左衞門尉　子弥左衞門　其子長左衞門。河崎長兵衞尉。八ヶ代弥吉　養子傳左衞門。猿渡新助。川村銀兵衞尉　御成敗被成。湯地左近將監。松山覚兵衞尉。有馬軍弥左衞門尉。向井勘解由左衞門尉　子吉左衞門。岩切与兵衞尉子平兵衞　舎弟彦左衞門。末田主馬允後名鎌田播广　養子傳左衞門。四元長門守。米良右京亮。鮫嶋大藏助。伊地知筑後入道　子佑十郎　串良へ移衆。遠矢金十郎。緒方小右衞門尉。勝目助左衞門尉。新納四郎右衞門尉後名三河。有馬三左衞門尉。伊地知新兵衞尉。帖佐新七郎。岩城宮内左衞門尉。蒲地帯刀長　子帯刀。川俣志摩丞子宗左衞門　養子宗左衞門。野村喜介後名但馬　子但馬。白濱甚右衞門尉　子覚左衞門。東郷安房入道　子十左衞門　其子十左衞門。岡本主計助。中郷主水佑　子宗仙。吉加江安房入道。大膳亮　財部江移衆。前原隱岐守養子六郎兵衞。新納小兵衞尉　加治木江移衆。田実彦右衞門尉　子九左衞門。杢田善左衞門尉　子九兵衞　其子十左衞門　九兵衞舎弟清兵衞。東丹後守。村岡木之介。平田平藏後名狩野介。川野猪右衞門尉。関六左衞門尉。鎌田玄蕃允　養子源左衞門。井尻平兵衞尉　子伊東市右衞門　二男造右衞門。税所越前入道　養子次郎右衞門其子右衞門兵衞。伊集院九郎兵衞尉　大口へ移ル衆。柳彦左衞門尉　子彦左衞門。野村吉郎後名慶悦　養子右馬介。平田七左衞門尉　御成敗被成候。北郷掃部助　鹿兒嶋へ移衆。吉田治部左衞門尉　養子次郎兵衞　其子長四郎。肥後勘兵衞尉　子壽右衞門。伊集院半右衞門尉。窪賀六。阿多幸兵衞尉「本のまゝ」　鹿児嶋へ移ル衆。塚田相右衞門尉鹿児嶋へ移衆。税所弥右衞門尉　子小兵衞　二男利左衞

門。山路小左衛門尉。久木田大膳正。有馬藤兵衛尉。緒方源兵衛尉。前田大炊助。伊瀬知半八後名。酒勾久左衛門　子吉左衛門。三清後家。荒田助市　子外山次郎左衛門。宮下小右衛門尉。川俣杢之丞　鹿児嶋へ移衆。山内市兵衛尉　子源助。堀切孫市。推原与右衛門尉。山口彦七。中山次郎助。上野勝介　子九右衛門　其子宗五郎。愛甲四郎兵衛尉　谷山へ移衆　子平次郎。川嶋新五左衛門尉　子新左衛門。河崎九右衛門尉。谷山孫六　曽於郡江移ル衆　後名宗兵衛。大平賀兵衛尉　吉松江移衆。齊藤銀五郎　子兵左衛門。山内吉兵衛尉。前田志广助。同名仲右衛門尉。江田金太郎。徳持銀之丞　子市兵衛。竹山善九郎。荒田助右衛門尉　子助四郎。四本六介後名伊豆　子十左衛門。福永平左衛門尉。山之口助五郎。柏木三郎五郎　吉松江移衆。津曲藤左衛門尉　鹿児嶋へ移衆　養子長右衛門。三坂仲兵衛尉　鹿児嶋へ移衆御小者衆。木場伊左衛門尉跡。長田七郎左衛門尉　孫七郎左衛門。武元帯刀長。山下小右衛門尉　子利兵衛。仲七。竹下市介。加治木孫右衛門尉。春口善兵衛尉。松永源四郎。伊尻次郎右衛門尉。折田利右衛門尉。林千次郎　子甚左衛門。伊駒新兵衛　大口へ移衆。伊地知次郎介。小川内藏介　養子三郎兵衛。宮里杢丞　子小兵衛。松井源左衛門尉。松本土佐介。千田左吉兵衛　子万兵衛。大門(川カ)吉兵衛尉　養子彦右衛門。野村半五郎　子吉嚴坊。二河六兵衛尉。隈本弥市。長田次郎太郎　鹿児嶋江移ル衆大工。岩切堅物允　子堅右衛門　二男與兵衛　鹿児嶋へ。田中与三右衛門尉　鹿児嶋へ移衆。薗牟田大覚御小者衆。大迫四郎兵衛尉　子早右衛門。犬童与七郎御小者衆。有馬主膳正　養子平田左衛門。平田弥十郎。曽木主馬允。調所大炊左衛門尉　子内記　鹿児嶋。新納式部少輔　子式部。鎌田弥三郎。薗田左平次　子平兵衛。有馬喜左衛門尉　養子存行坊。平田加賀入道。本田甚次　子新右衛門　鹿児嶋衆。井尻紀伊入道。熊谷次郎右衛門尉。大浦民部左衛門尉　子久内大工鹿児嶋へ。小倉孫左衛門尉。伊瀬知勘解由　子和泉　其子源藏。長瀬權介。春山越中守　養子正右衛門。本田伊豆守。松下善藏　子紹甫。河野左近。楠本伴之丞　子五兵衛　其子五郎左衛門。中村喜兵衛尉後名與左衛門。本田半左衛門尉　曽於郡へ移衆。吉永源左衛門尉跡。津曲徳丸。迫田長左衛門尉。皿良善介　子權左衛門　二男善左衛門。同名藤兵衛尉。滿尾源右衛門尉。高野善兵衛尉。木佐貫宗左衛門尉　養子吉

左衞門。鎌田市右衞門尉。奥原案之丞　子案之丞。岩崎孫介。和田主税助。上山太郎。高野源五跡。内浦四右衞門尉。四本長門守。宮内玄蕃左衞門尉　子六兵衞。新橋傳右衞門尉　養子傳右衞門。猿渡五郎右衞門尉。山崎治部少輔　子治兵衞　其養子平四郎。松山長左衞門尉。伊集院助七。武宮宗右衞門尉。安藤新三郎。日高藏右衞門尉。伊集院彦六　養子堀切九兵衞。野間口肥前守　清水衆。蒲地四郎左衞門　子孫四郎　鹿児府。大山相右衞門尉。末原對馬。木村喜右衞門尉　曽於郡へ移衆。限元治部之丞。伊集院加左衞門尉　子九右衞門。重信市之丞　子堅介　鹿児嶋。田中助市。河良伊賀守。藤井九郎右衞門尉。税所宗左衞門尉。上野新左衞門尉　養子岩右衞門。伊地知新二郎。丸田三右衞門尉　子与右衞門　鹿児嶋へ。武元小左衞門尉。下村四右衞門尉。二木七左衞門尉。河畑喜左衞門尉。堀内隠岐。唐仁原善三郎。黒江傳之丞　御成敗被成候。児玉權介。内山武之丞。岡村治右衞門尉。富松弥六。折田右衞門兵衞尉。篠少右衞門尉　子太郎兵衞　其子喜之介。大田大善允。児嶋玄番助。比良田式部左衞門尉。坂本軍助。海野織部左衞門尉。福崎弓介。石塚七左衞門尉　子城之助。井尻八兵衞。久木本山之丞　子源左衞門。西田茂助。大迫清兵衞尉。宮原助左衞門尉。高崎兵部少輔。梅北淡路守　養子藤兵衞。山崎助作。黒木市右衞門尉。藤田乗介　衆中ふれ　高城へ移衆。川口三右衞門尉。有馬甚兵衞尉。泊源太左衞門尉。新原十右衞門尉。肝付作右衞門尉　子大右衞門　鹿児嶋。別府源二郎。上村主税助　子平右衞門　鹿児嶋。日野六右衞門　子兵左衞門。伊地知五郎兵衞尉。西郷八郎左衞門尉　鹿児嶋衆。児嶋三左衞門尉　敷根衆。川越助市後名有馬六左衞門　子三左衞門。迫田与兵衞尉。中万勘介。渡邊九郎兵衞尉。溝口市藏。有馬次郎四郎。佐藤筑後守。唐仁原弥三。飯牟禮彈左衞門尉。安樂相兵衞尉　敷根衆。田中市左衞門尉。前田七兵衞尉。川添喜介。滿富勝介。小川平吉。長谷場主水佑。猿渡七兵衞尉。関次介。野村弥四郎　出水衆。町田助右衞門尉　子甲斐。安樂拾郎右衞門尉。若松淡路入道。肝付孫三郎。木下四郎左衞門尉。蓮香掃部左衞門尉　御中間衆。有間九七。江田善右衞門尉。永吉伴兵衞尉　鹿児嶋へ。伊地知九介。楠本傳兵衞尉。黒川新九郎。小原茂右衞門尉。山田弥左衞門尉。松崎杢右衞門尉　子助七。伊集院下野入道。山口掃部左衞門尉　子仲兵衞　二男松下千左衞門。岩下傳右

衛門尉。一覚坊。有馬主計助　子源六左衛門　二男大壽院。白石八藏。日高吉右衛門入道。鎌田助二郎。藤野休右衛門尉　御道具衆。岩田四郎兵衛尉。同楠本齊兵衛尉養子八右衛門。四本五郎右衛門尉。藺牟田新左衛門尉。河野杢兵衛尉。西田新四郎。薗田七之丞。木村十兵衛。御中間衆児木源藤。中嶋藤右衛門尉。松浦三右衛門尉。宇都八兵衛尉。竹下作右衛門尉　御道具衆池田甚太郎。同轟木金左衛門尉。同坂本助右衛門尉。同古藤次左衛門尉。同山崎乗介。同坂本七右衛門尉。同谷口弥中兵衛尉。同河野平次郎。長田新三郎。同中嶋左市。同長田七郎。同小野彦之丞。同池田善四郎。同安樂拾介。同竪山四右衛門尉。同瀬戸山孫四郎。同松脇源介。同野添藤兵衛尉。津曲源介。福嶋市兵衛尉。下田源三郎。山本源左衛門尉。大山賀次右衛門尉。藤崎弥藏。御道具衆木場弥五兵衛尉。同渕脇甚吉。同小牧弓右衛門尉。同岩重七介。同窪田千七兵衛。同冨田二右衛門尉。楠本齋藤兵衛尉。福永与左衛門尉。田中与市。前原助作。山本五郎右衛門尉。宗壽。竹下大炊介。春山監物　子監物。石塚宗左衛門尉。深水九藏。池亀式部入道。田中仲兵衛尉。長谷場主水佑。藤井助次郎。吉田丹波入道。中野仲兵衛尉。吉田若狭入道。楠本傳兵衛尉。御道具衆佐伯小右衛門尉。同上山助次郎。同村岡源之丞。同田中作介。有馬主計助。本覚坊。濱田太左衛門尉。井尻紀伊入道。池田三吉

（合点ハ朱ナリ）

153

「得能氏記録」

慶長十年乙巳

二月十九日、　家康公去月九日江戸城御首途、洛ニ赴キ玉ヒシカ、暫駿府ニ御滯座アリテ、今日伏見城ニ着御ナリ、

三月二十一日、　秀忠公去月二十四日江戸ノ城御首途有テ、今日伏見ノ城ニ着玉フ、同二十九日御參　内、

四月十日、　家康公去ル八日伏見ヨリ御入洛有テ、今日御參　内ナリ、同十五日伏見城ニ還御、

同十二日、秀頼公右大臣ニ任シ玉フ、元内大臣

秀忠公任征夷大將軍、付御普代諸大名叙任事、

同十六日、　秀忠公征夷大將軍・氏長者・淳和牌学兩院別當ニ補シ、内大臣ニ任シ、正二位ニ叙シ、牛車隨身兵杖ヲ聽サレ玉フ、

同日、三河守秀康權中納言ニ任シ、下野守忠吉左近衛

中將ニ任シ、從三位ニ叙ス、元侍從、四位下、從上総介忠輝左近衛權少將ニ任シ、從四位下ニ叙ス、元從五位下、池田新藏利隆侍從ニ任シ、榊原小十郎康勝從五位下ニ叙シ、遠江守ニ任ス、松平三郎四郎定勝從五位下ニ叙シ、越中守ニ任ス、大久保右京亮教隆從五位下ニ叙シ、同主膳正幸位從五位下ニ叙シ、高力左近大夫忠房從五位下ニ叙シ、青山雅樂助幸成從五位下ニ叙シ、永井傳八郎尚政從五位下ニ叙シ、信濃守ニ任ス、高木善次郎正次從五位下ニ叙シ、主水正ニ任ス、秋田東太郎實季從五位下ニ叙シ、城介ニ任ス、松平善四郎正朝從五位下ニ叙シ、壱岐守ニ任ス、板倉周防守重宗從五位下ニ叙シ、同内膳正重昌從五位下ニ叙ス、

同二十六日、　秀忠公將軍宣下ノ拜賀トシテ、御車ニ駕セラレ御參　内ナリ、

五月朔日、諸大名各伏見城ニ群參シ、　秀忠公ニ謁シ、將軍宣下ヲ祝シ奉ル、

同十一日、　秀忠公御名代トシテ、上総介忠輝于時十四歳、大坂ニ到ル、

六月四日、　秀忠公去月十五日伏見城ヲ發シ玉ヒ、今日江戸ニ還御、

七月五日、　家康公伏見本城ル修セシメ給ハンタメ、西ノ丸ニ渡御、

十月二十八日、　家康公去月十五日伏見ヲ發シ、江戸ニ赴キ玉フ、佐和山・清洲・岡崎・田中等ノ所々ニ、三四日宛御滯座有テ、今日江戸ニ還御ナリ、

（本文ハ底本ニ欠ク、鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ）

（表紙）

義久公
義弘公　慶長十一年
家久公

後編　舊記雜錄　巻六十

154

「國老用人記」

一慶長十一年自帖佐平松江御移、二年御在城御家老、
新納旅庵（長住）
伊勢平左衛門（貞成）
上井次郎左衛門（里兼）

一御使衆
新納杢右衛門入道一甫

155

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

如恒例、蜜柑到來、遠路之處被入念之段、別而悦覚候、
委曲本多佐渡守（正信）可申候、謹言、
「朱カキ」「慶長十一年」正月二日（秀忠）（花押）
薩摩少將（家久）殿

156

「正文在文庫」

蜜柑二箱遠路到來、喜悦候也、
「朱カキ」「慶長十一年」正月四日　○（家康）「墨印」
嶋津陸奥守（家久）とのへ

157

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆池上貳吉」

猶〻近比御無心ニ候へ共、山居之たのしミとして、
茶をたて申候而、日を送申外無御座候条、三重たい
め一座分のたゝミのおもて被懸御意度候、但可御事
多間、勿論題目ニハ可爲御無用候、誠なれ〳〵敷儀
共、還而其恐多存候へ共、任無御等閑如此候、ヶ様
之事共御他言被成ましく候、將又いつそや呂宋犬御

望のよし被仰越候、此比子をうミ申候間、赤ぶち一疋・黒ぶち一疋ひかせ申候、御氣ニ入候ハヽ可爲本望候、

新春之御慶幸甚〻〻、猶以不可有盡期候、扨も旧冬以來、書狀を以成共、御見廻可申處、隱遁之躰故、世上憚を存不能心底候、日ニ増無正躰令老屈、猶以おくがをくに引籠可申覚悟候条、倍無音ニ可罷過間、心底之無沙汰と被思召間敷候、乍去何にても、似合之御用をは可被仰聞候、陸奥守折〻罷上事候間、弥御覧はなされす、可被懸御目事、奉賴候、仍御太刀一腰・馬一疋補御祝言申計候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十年歟」「十一年ノ場ニアリ十年ハ誤カ」　羽柴兵庫入道
正月九日　惟新（花押）
（福島正則）
廣嶋少將様
まいる人〻御中

158

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

爲陽春之祝詞、如旧例佳札并五明二本到來、珎重候、慶賀逐日不可有休期候、恐〻謹言、

正月十一日　忠恒（花押）

北郷次郎（忠能）殿

159

「家久公御譜中」

慶長十一年正月中旬、所造成之石漕船皆開帆、而赴淡州油良・岩屋等之湊、

160

「義弘公御譜中」

與蠻君書

日本國薩摩州刺使藤原義弘、謹復書于呂宋國王郎敞洛黎膀君迎足下、

周易曰、日中爲市致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、聖人之言百世豈可廢哉、我聞呂宋之爲地國富民豊、而南商北賈往還如織、不亦繁華地哉、我日本與貴國遙雖隔大洋、仰光華於千里之外、是亦山厨羅明敖院巴禮之所能知也、前年憑伏巴禮、求貴國商船載貨來、而富我國家、非翅欲富國家、若其遷貨之有無、國家人民各得其所、聯遠之交、亦豈有離貳哉、夫玉之爲美也、韞匱而藏之、則不爲天下之用、海貨蠻珍無不皆然、不以其所有易其所無、則其用不均、而其貨亦終是腐而已、伏乞足下圖之、去歲所發之一隻船、大洋波穩而著我一島、繫纜者

有日矣、非不思患而豫防之、逆風俄起折樹木揚砂石、吁時乎命乎、船忽破矣、我不忍見之、新造一船、順風揚帆令商客歸焉、惟願足下憐我愚誠、來歲薫風自南之節、使一船載貨來貿易、所須各得如意、若然則我國山川草木亦蒙其光彩、況國家人民乎、伏冀炤亮不一、

慶長十一年丙午正月　　藤原義弘

161

答蠻君書

日本國薩摩州刺使藤原義弘、謹復書于呂宋國巴禮王揭須微釋褒郎輝來綿倪黎明膀蜜挨氏、政此仰慕忽辱雲翰、展玩再回、宛然如拜貴面於千里之外、甚幸甚幸、茲者山厨羅明敖院巴禮、止息於陋邦者有年於此矣、我觀其爲人也、智慧過人、風標拔俗、是故我敬信焉、一諾之信終始、豈有渝乎、恐是陋邦僻地難久處約、念茲在茲耳、吾子朝國王之日、其亦以是語之、去歲一船大洋不揚風波著我陋邦、不幸而狂風怒濤搖動坤軸、船亦爲之飄蕩、我不忍視之、新造一船、以爲船客歸國之計矣、伏願自今以往歲歲、使一船載貨來而貿易、是亦兩地聯遠之交、豈復有絶期乎、又蒙送來緞子一端・鳥陀羅氈一卷、拜而受之、愧無酬厚意、今也臨紙惘然、伏乞照亮是祈、

慶長十一年丙午正月　　藤原義弘

162

「御文庫四拾八番箱中」　「義弘公御譜中ニ在リ　家久公御譜中ニモ在リ」

尚以龍伯様御越候ハん由、御意候哉、尤目出候、自是急度申上候而可承候、以上、

貴札忝令拜見候、寔一昨日者不計令參上候處、乍例御懇切御會尺、于今過分ニ奉存候、仍石舟出船之事、此中無由断申付候、はや少々出申儀に候、自然延引候てハ、御家大事たるへき段、御意被成候、尤至極に候、弥以稠可申付候、隨而者出雲病中ニも死去以後にも、衆中笑止ニ存たる躰無之候つる儀、曲事迄に候間、其紀明させ申候、殊山口殿ゟ被仰下候返事、可入念申由承候、能々令内談可申上せ候、可得尊意候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」
「慶長十一年」　正月廿四日　　陸奥守
（義弘）　　忠恒（花押）
惟新様
參貴報

163

「御文庫四拾八番箱　義久公巻中」「義久公御譜中」

猶々拙者上洛之儀承候、何共老衰いたし、先耳一圓ニ不聞候、歯候ハねは辨舌不明、かれ是人前ニ罷出

候する事、迷惑まてにて候、このころハ連歌なとも
やめたる躰ニ候、何様永日中諸吉申加へく候、
其以來任世上之成躰申隔乍存打過候事、非本意候、仍御
在所程近罷成、此比御下向由其聞候、幸之儀ニ候、向後
可被添御心事所希候、就其少將所より到越中守殿へ、以
使者申談候、彼使ハ幼少より我等召仕たるものにて候間、
是よりも申入義とも、巨細含口上ニ候、さては貴老御意
分自然候ハヽ、無御腹藏仰聞られ候やうニたのミ存候、
爲其態染愚筆得御意候、恐〻謹言、
「朱カキ」「慶長十一年」正月廿七日　　嶋修理入道　龍伯（花押）

幽齋老
人〻御中

「此御書、御案文ノ御直書也」

164

「家久公御譜中」

忠恒以使節、獻幣物（御太刀一腰・御馬代黄金二十兩・段子十卷）於　秀忠公、奉賀
新年嘉祥、　公怡悦之趣、見二月六日之　御内書、

165

「御文庫廿二番箱九卷中」「義久公御譜中　案文有之トアリ」

任幸便申入候、
一去年夏之時分、以川野猪右衛門祐乘法印まて一ヶ条申
談子細候處、其様子被聞召付、別而被遂御入魂、首尾
細〻被仰越候、祝着至極候、以左様成故覚る事共候、
弥御心當賴存候事、
一伊集院肥前入道伏見當方之屋敷在番之節、自　関白様
被召出、貴老へ折〻懸御目候哉、其刻彼肥入道を以か
ふき被差下、愚老へみせられへき由被仰下候、誠御懇
情之儀不得申候、然共此四五年者煩出合、さ様成慰な
と中〻存絶躰候、御志之程一入感悦候、扨〻今一度懸
御目度念望候へ共、迚も其意難計候、殘多存候事、
一連〻馬御數寄ニ而候つる頃、爲何馬被成御所持候哉、
被聞食及候ハん、當國牧立餘多候、是を懸御目候ハん
と折〻申事候、猶委曲者追而可申入之間、先令省略候、
恐惶、
「朱カキ」「慶長十一年」二月

信門跡

「義久公御案文也」

166

「御文庫廿二番箱十巻中」

改年之御慶不易珎重〻〻、仍去年瑞仙前より我等氣合之様子、こま〳〵申上せ候哉、就其藥多〻調合候而被差下候、誠御芳心之儀畏入候、其藥ニ一二を被付記候、先一を雖受用候、とかく覚る無子細候ヰ、それより二を用候へハ、此中より氣合かろく覚候、第一虫も至而無差出事、膝之痛も前よりよく候、されとも行歩ハ一切不叶候、此跡ハ坐不成候つれとも、當時者座躰少心安候、此二之病者得驗候、奇特之儀候、雖然しハふき一圓ニ難止候、就中夜る〳〵しハふき仕、あまりうちしきり候折〻ハ、到吐逆迷惑難堪躰候、右之藥にてハ何之病よりもしハふきはやく可得驗と存候へとも、無其儀不審候、爰元ハ年内よりも年明以之外さむく候、此故候哉、暖氣ニ成候ハヽ、快氣候する欤と存候、先〻氣合此中より者かろき様ニ覚候、祝着不過之候、次爲御番東國へ御下之由其聞候、しかと其分候哉、遠路と申御苦労難盡筆候、此度陸奥守所より使者差上候間、幸ニ存令傳書候、將又何〻進覧之候、聊表祝儀計候、恐〻、　段子二端「本ノマヽ」

二月十三日　　祐乗法印

167

「義久公御案文也」

「御文庫四拾九番箱三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

態令啓入候、

一度〻如申候、御當家之事、貴所迄及廿代雖御家候、漸末ニ罷成欤と存候、其謂ハ今年ニ限大事之儀まてつとひ候間、夜を日ニつき肝を被煎候共、生得國からニて何事もはかゆかす候、題目石漕船も大方出來たるも在之由候へ共、いまた不出船之由候、京泊ニハ帖佐方之船少〻まハりたるよし候、先今度之百五十艘之儀も、貴所被聞召たるニ相替、急ニハ出船可難成様ニ、我等ハ承得候、左様ニ候而縱江戸へ着船候共、時分後ニ候而御用ニ不立なとゝ候而、無御請取候ハヽ、御代物ハ被給置、不届仕立なとゝ世上之可爲風聞候之欤、さも候ハヽ、終者何と可成行候哉、諸事御油断有ましく候、一御乗船も未廻着、貴所出船さへ無之様ニ候間、兼日可有參上通、御約束被申上ニ付、可被仰合儀共在之旨、被成　上意由候へ共、御待退屈被成、御上洛候者是もすり違可申候、縱年内國元を打立候とも、遠國と云海上ハ不任心之条躰ニより、中途ニ延引可被成儀も可有

之候、左様ニ候而時宜不可然時ハ、誰か曲事、誰か後なとゝ候へ共、家のたすかりニハ不罷成、被失面目事候条、よく〳〵御油断有ましく候、

一有説ニ承付候、去年上洛之時、於御城御能之刻、　御前ニて貴所御能ニ心をうつし、居なから仕舞なとをまねられ候もやうを側より見させられ候、大名衆殊外之能數寄ニて候物哉、立而不被舞迄ニて候つるよし、以後ニ物沙汰共候通承付候、多分それ〳〵ニ心をうつし候へハ、何事ニよらす左様ニ在之物ニて候へハ、日來能ニすかれ候まゝ、治定油断ニて御取亂も可被成と存候、是又爲御嗜候、

一毎年上下之御辛労在之事ニ候条、諸事之儀を奉行ニ被任置、貴所事ハ遊覧のミニさせられへき由申候つれ共、今ハ誰そ精ニ被入人も無之候条、入麁入細何篇直ニ可被仰付事専一候、

一御所様ハ御酒御きらいのよし候間、御酒過候ハぬやうニ御嗜肝要候、就中　御前之御酒可有斟酌事専一候、

并公家方へ細〻御寄合候ハぬやうニ御分別尤候、

一於御城各出仕之躰を見申候ニ、惣別田舎侍之上法をまねられ候事、見苦敷事にて候、只田舎人ハ田舎人一篇ニ候而能候由見得申候、旁爲御分別候、

一諸大名付合之時ハ、上下之人よりおくらくこわものと見なされ候而、御爲可然候ハんと存候、亭主ふりニも客ふりニも御取亂たる爲躰ハ、物淺見得申候、一人悪由申候ハゝ、皆それニ成事候間、相構〻〻不可有失念候、

一江戸之御隙明候而上洛候ハゝ、何欤と候而、京・伏見ニ徒ニ一日も無御滞留、追付下向可在之候、

一人ニより役を望知行を望ニ存、心なき眞実たてをいたす者も、世上有ならいニて候、殊我手前之爲よきやうニと、捽心中　御前をつくろう事も御座候条、眞実之人迄ニてハ在之間敷候、於拙者ハ右之兩道ハ絶はて申候、只貴所御爲可然様ニと存事迄ニ候条、老躰極不期明日躰ニ候へ共、貴所事能上ニても能様ニと存候而、くり事なから平生存念之通申事候、念比ニ御披見肝要候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」二月十一日　　惟新「七十二歳ノ御時也」

陸奥守殿「三十一歳ノ御時ニ當レリ」

参

陸奥守殿へ進候狀ノ案文にて候、細〻披見有へく候、

比志嶋紀伊守殿
伊勢兵部少輔殿

168

「家久公御譜中」

同年二月上旬、忠恒發薩府、將如江都、透城西官道、同月十五日至京泊、供奉家老、比志島紀伊守國貞・伊勢兵部少輔貞昌并山田民部有榮、此外従臣姓名不傳、義弘使本田源右衛門尉親商・伊勢平左衛門尉貞成及旗下之士、至上船之湊津護送、如輕士時時賜暇、而報平安於義弘、親商・貞成者見忠恒之開帆而將賜暇、開船之日無所考、思二月十六七八日間乎、

169

「正文在和田孫右衛門」

其後者不得尊意候、仍相廻候舟共、昨日皆々京泊へ着津候間、則今日如彼津罷越候、急度致出船無程上着候て、從上方様子可申上候、舟本迄供衆被仰付忝奉存候、京泊者所からせはく候故、上洛衆へ宿さへつまりたる由候、別ニ用段も無御座候間、被仰付候供衆先々歸申候、本田源右衛門尉・伊勢平左衛門尉可參刻、委可申含候間、被聞召届御納得所仰候、誠惶敬白、

「朱カキ」「慶長十一年」二月十五日　陸奥守　忠恒（花押）

170

「義弘公御譜中」

「正文在入佐勝左衛門」

以上

態啓使札候、拙者事茂近日上洛仕候之条、此地弥可預御心付事奉賴候、仍從羽越中殿、使者又者正源院重々被差進之候、定彼衆毎事可被相達候、將又從上邊到來御座候茂、内府様今月十五六之比、御上京之由申候、旁珎候事共候者、追々可申上候、彼是口上ニ相含候、隨而先日者河東方、是迄被相越候間、船已下申付無緩候ッ、猶々彼者可申上候、可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」二月廿六日　秋長門守　種長（花押）

維新様進献
人々御中

「此御書ハ、惟新公ヘノ御狀歟ト考ラル、旧時ノ写ト參考スヘシ」

「朱カキ」「宛書無」

171

「義久公御譜中」

「正文御南戸方ヨリ出」

詠花有喜色和歌

法印龍伯

止久遅幾花濃佐可里耳奈禮〳〵天聲無津眞志貴百千登利

賀那

詠花有喜色和歌

惟新

あつさゆミはるたちしより久堅のひかりのとけき花のいろかな

春日同詠花有喜色和歌

左衞門尉久高

春雨のそほふる空は長閑にて花もうちゑむ色や見ゆらむ

詠花有喜色和歌

沙弥慰敢

とひくやと春はひとまつ山さとの華にさかりの色そ見えける

春日同詠花有喜色和歌

大膳亮忠俊

なかめぬるこゝろをしるやとはかりにつほミし花もかつ開なり

春日同詠有花喜色和歌

大炊助久正

よろつ代のおひさきこもるはなの色はことしよりまつ咲そめにけり

春日同詠花有喜色和歌

左衞門尉貞成

契りきやときしこそあれさくらはなさき出るけふの色を見むとは

詠花有喜色和歌

沙弥玄与

ちとせへむ春そしらるゝ玉しきの庭のわか木のはなのいろ香に

詠花有喜色和歌

沙弥抱節

うくひすのこえのあやをる花なれは色も匂ひも似たるやはある

春日同詠花有喜色和歌

兵衞尉宗親

さきみてるはなのこすえはとよ年をしらせてつもる雪かとそ見る

春日同詠花有喜色和歌

左衞門尉忠通

風もいまえたをならさぬ時とてやさかりひさしき花と見ゆらむ

詠花有喜色和歌　　沙弥宗察

なかめつゝなをもあかなくおもふかな花にあさ日のかけにほふ山

詠花有喜色倭歌　　沙弥宗玄

うくひすの聲をもはなにきゝそへてゆたかにみゆるにわの明ほの

詠花有喜色倭歌　　沙弥與進

いまそしる四方のあらしのおさまりておもふことなく花を見むとは

慶長十一年三月四和歌會

172

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

先日預御飛札候、則御報申入候キ、仍先度被成御上せ候遠州へ之御使者歸國候、此方相替儀無御座候間、御心安可被思召候、將亦　大御所様御上洛、いまたいつ時分共御沙汰無御座候、慥之儀承候者、自是可申入　左御座候へハ、貴様御上洛も少々被成御延引候ても、苦間敷儀と存候、併隣國之大名衆上洛之様子、無御由断被聞召合、御尤奉存候、就中先度被成御進上候蜜柑、於關東本上州披露被申、則御墨印上着候間、本上州書狀相添、御使者へ相渡申候、猶御使者へ申入候条、可被仰上候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」三月十一日　　山口駿河守直友（花押）

奥州様　参人之御中

173

「家久公御譜中」

同年三月二十七日、忠恒迄藝州内高崎乗船、時逢三原諸右衛門重種之使上國歸、於是附書一緘於重種、而呈上家君義弘、情炳書、

174

「正文在文庫」

（本文書ハ二八号文書ト同文ニノキ省略ス）

175

「家久公御譜中」

本多正純贈三月二十七日之書於忠恒曰、領國内唐船儻著岸、從長谷川左兵衞尉有可通達旨、先知其事宜得意、

176

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以自然舟之儀ニ付而、出入之儀御座候共、諸人如在御座有間敷候間、其御心得被成、御分領中へ何様ニ可被仰付候、以上、

一書令啓上候、仍今度其元御領分之内、唐船着岸付而者、長谷川左兵衞断可被申候間、其御心得可被成候、爲其申入候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」三月廿七日　　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守殿

177

「家久公御譜中」

忠恒爲述職欲至駿武、山口直友曰、　將軍家御父子上都在近日、宜在伏見遂拜禮、因忠恒同其意、以書通趣於本多正信、則正信亦有同其義之返簡、

178

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尊札奉拜見候、如仰之當春之御慶目出度申納候、然者御親子様へ爲御禮、爰元御下向可被成之處ニ、近日御上國ニ候条、於伏見ニ御禮被仰上、其上可被任御意候旨、山駿州被申ニ付而、其表ニ御待被成候儀尤之御事ニ御座候、委曲貴面之節可奉得御意候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」三月廿八日　　本多佐渡守正信（花押）

羽柴陸奥守様　貴報

179

「右馬頭以久譜中忠興一流冊中」

慶長十一年丙午三月、爲參勤上洛、拜謁于　家康公、而直赴于東武、拜謁於　秀忠公、此年經營　江城、時以栗石獻上之、且復登　營賜歸郷之暇、則　御口自下叮嚀之尊言、拜賜於御脇指康光、一腰・御袷十・白銀百葉、

180

「義久公御譜中」

「正文在妙谷寺」

先年依　大閤公令旨、神社仏寺領悉雖被勘落、有志之子細妙谷寺致再興、五百石之領地令寄附早、因茲後年修造

勤行等之儀、無怠慢之様、住持代〻可有沙汰者也、仍狀如件、

慶長十一年卯月吉日　　龍伯（花押）

妙谷寺

「上書」
妙谷寺　　龍伯

181

「義弘公御譜中」
「正文在入来院石見重頼」

なを〳〵此中御内存ともうけ給候ハヽ、此方ニてあひとゝのへ申へきものをと、のこりおほく存はかりに候、

かさねての御ふミ、くハしく見とゝけ申候、しかれハ御世つきの事、弥一郎殿（入来院重高）を御のそミにおほしめし候由、せんとおほせをかれ候や、其由うけ給らす候て、とかく御返事申さす候、まことにこれハ、よきにあひの儀とそんし候事に候、此ころ藤二郎とのいもうとに、ゑんちう申あわせへき由、少将殿よりうけ給候て、あひさたまる分に候、さりなからひら松へは我らいまた申さす候、弥一郎殿へハ少将殿ゟおほせわたさるへき由候つる、又六殿（入来院重時）世つきにハよきにあひの儀と存候間、少将殿舟もとに、いまたしゆつ船なく、御逗りう候ハヽ、まつ御内儀を申上られ候て、しかるへく候、さ候ハヽ、我らへ内儀を申候へハ、少将殿御分へつに参り候ハヽ、よき仕合の儀に候、此ころ藤二郎とのいもうとにゑんちうあひ定候へとも、ひら松へハいまた申さす候あひた、はや〳〵少将とのへ御内儀を得られへきよし、我ら返事申たる由御申あるへく候、さやうに候て、御ないぎしだいくう儀へひろうあるへき儀ハ、かさねての事たるへきと存候、めてたく〳〵、かしこ、

「上書」
「朱カキ」
「慶長十一年」卯月一日　　より
ゆの尾　　惟しん
まいる御返事

182

「御文庫拾七番箱十六巻中」

今度御苻内付ニ被仰付候御物之儀、少もしきよく申間敷事、勿論御奉公方無二心念ヲ入可仕事、

右偽於申上者、

▽奉始上梵天釋四大天王、下堅牢地神、惣日本六十餘州大小▒▒▒▒▒▒神祇（ヨメズ）　冥衆、別者王城鎭守八幡大菩薩　春日　稲荷　祇園　賀茂　木船　木▒▒▒　愛岩山大權現　大天狗　小天狗　中天狗　八天狗、殊者九州総社新田八幡大菩薩　同開門正一位　▒▒▒所權現　大▒▒▒　鹿兒嶋諏方上下大明神　勸請諸神祇　天滿大自在天神、各〻御部類眷屬御罰冥罰深重可罷蒙者也、仍神文如件、△

慶長十一年四月一日　　長田次介□「イヽ」

川口七右衞門（花押）

瀨戸口勸之丞（花押）

御荷内衆中

參

183

「家久公御譜中」

忠恒至大坂之日不傳、考可三月末四月初乎、

琉球國中山王近年懈貢期、不獻文船、以故爲徵之、先有議伐大島之謀、義弘以桂太郎兵衞尉忠昉、通僉議之趣於忠恒事見書、

184

「御文庫四拾八番箱義弘公三十二通巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

在京御辛勞之至申も疎ニ候、仍琉球大嶋渡海之御談合、於鹿兒嶋御座候ニ付、我等事も可參由承候条、　竜伯様致御供罷出候、於様子者桂太郎兵衞尉可申上由申候間、定可遂言上候、然者諸侍出物之儀、日限於相違者、知行を可被召上旨、御書出を以被仰出候、然處今度御上洛并石舟作之出物、五十人ほと未進衆在之事ニ候、誠一腰をうり、知行をうりはなし、御奉公を專ニ存、出物閉目申候人數も同前ニ御座候へハ、御書出も徒ニ罷成、後日之御爲ニ罷成間敷通出合候、右之仕合奥州様被聞召候之哉と尋申候へハ、申上候ハ、忽ニ人をくづし申事候而、致用捨不申上通、出物請取衆被申候、かげ〳〵ニおいてハ如此被申、無御存事ニ人の嘲を請候事、笑止之儀共候、ケ様成様子貴所へ可申人在之間敷候間、内〻爲御心得令啓候、將又不入申事候へ共、今度大嶋渡之御談合三日ニて候ッ、其内　龍伯様一日ハ談儀所へ御振舞、一日ハ南林寺へ御振舞ニて候、談合衆之内慰畋・伊集院宮内少輔・河上式部太夫・村田刑部少輔此四人御供にて候、談儀所へハ我等も參候、慰畋・喜入攝津守・新納武藏入道・抱節此四人も御供にて終日之御振舞にて候、彼四人も如此候故、御談合ニも兩日ハ不被罷出候、其外之人數も八

ツ時分ニ被罷出候而、日不入前ニ御暇被申候ニ付、御談合もはかゆきかね候、笑止成躰ニ候つる、然ハ談議所御振舞も御書出ニ令相違、金銀をちりはめたる躰候、　竜伯様調ニ一〻感を御付被成候、ケ様ニ候へハ何の御書出も徒ニ罷成候、是又爲御存候、猶追〻可申候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十一年也」卯月二日　　惟新（花押）

陸奥守殿
まいる

185

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶申候、昨日者御報可申上を、致出京延引慮外之至存候、喧咤之儀も自是可申上を、右申ことく大坂へ早討迄下申候、無事ニ相調由申來候間、致由断御報ニ罷成候、以上、

昨日愛岩御參詣之由、目出度奉存候、仍於大坂喧咤在之由、舟五郎右ゟ被申越候間、則大坂へ人を差越、様子承候へハ、無事ニ相調由申來候間、令由断不得御意候得キ、就中　大御所様御上着之儀、來七日八日兩三日之間ニ可被成御上着候と申來候、尾州宮へ昨日三日ニ可被成御着と申來候、何も御歸宅之砌、萬端可申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」卯月四日　　山駿河守
直友（花押）

奥州様
参貴報

186

「家久公御譜中」

同年四月四日、忠恒詣愛岩、即日還伏見、
同月七日、　家康公入御伏見　營、

187

「御文庫四拾八番箱中」「家久公巻中」

（本文書ハ旧記雑録後編三、一九二五号文書ト同文ニツキ省略ス）

「此御書、慶長十一年歟と張紙アリ」

「義弘公御譜中ニ正文市後崎長右衛門進上トアリ」

188

「三番箱宝鑑中」

此一枝、近比珎敷花、驚目存候、別而賞翫此事候、猶面之時可申述候、かしこ、

「朱カキ」「慶長十年」四月九日　　（花押）「如雪御判」

陸奥守殿

「家久公御譜中、正文在文庫トアリ」

189

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

先度者得貴意本懐之至候、其後少御尋可申入候へとも、御事両中ニ還而如何与無其儀候、仍御太刀一腰・馬一疋月毛・蠟燭百挺令進入候、音問之驗迄候、何様御逗留中不圖企参扣可申述候間、不能一二候、猶西川左馬相含候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」卯月九日　（花押）

少將殿　□御□所

190

「御文庫四拾八番箱義久公三十二通中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々むすめさいしやうゟも無何事御上着、目出度存候、然共御逗留可参様ニ承候て、御まち久敷存通心得申せニて候、

幸便之条用一書候、其後者御左右不承候處、鎌田右兵衞尉今月十一日ニ令下着、無吳儀被成上着、先々山口殿口柄可然様ニ御座候通承、滿足此事候、併逗留可参様ニ承候而、可爲御窮屈と存事候、

一かこしま・國府・こゝもと何も無事ニ御座候、可御心安候、

一茶わんの儀被仰下候、得其意則かこしまゟ萬介めしよせ、念比ニ申聞せ候、定早々出來可申候、其砌驄而指上可申候、

一肩衝上せ可申由承候、度々焼せ候へ共、何も不出來仕、用ニ可立も無之候、悪を上せ候事ハ無用之由、方々京衆ゟ度々被仰下候間、不出來成を上せ申候ても不入事候条、先々今度ハ上せ不申候、福嶋殿ゟもかたつき御所望之由候哉、せめてヶ様成事成共、御用ニ可有御立儀候處、上せ不申候事殘多存候、此通我等ゟも申上せ候由、次而之時者御心得候而被仰達候、併大方ニ成共焼出候ハヽ、重而差上可申候、

一鹿兒嶋へ兩度相越、路地之躰見申候、路地之松有付候て自餘ニすぐれ、一段と見事ニ御座候、書院も材木等木作置、雨晴候者可立之由候、併材木不自由ニ有之通及承候、就夫はかゆきかね可申欤と存事候、我等も隨分精を入見舞可申候、

一かこしま上之山城普請も三日在之事候、爲御存知候、次貴所帖佐ゟこゝもとへなをし預候家も、いまた出來

不申候、定初秋之比ハ出來可申欤と存事候、
一先日於鹿兒嶋、大嶋渡之御談合候ヰ、就夫後日御爲ニ
罷成間敷儀共御座候、桂太郎兵衛尉罷上候間、念を入
細〻被聞召肝要存候、
一其元之御左右承度候間、我等者共二三人上せ置候を、
先一人御下候而様子可被仰越候、猶期後音候、恐〻謹
言、
「朱カキ」
「慶長十一年」卯月十四日　惟新(花押)
陸奥守殿
まいる

191
「御文庫四拾八番箱中」
猶〻渡唐之時分者、當年九月之比たるへく候、若延
引候ても十月者可爲治定候、爲御心得候、
山口駿州へ以書狀雖可申候、依無題目不能其儀候、自然
申入可然儀ども於在之者、其地にて書札被仰付候て可給
候、爲其判紙進覧之候、仍薩州久志より呂宋渡楫之儀、
望之由申來候、就其如毎年　御朱印申請度候、別にも入
事候者同前ニ御申候て可預候、恐〻謹言、
「慶長十一年」卯月十六日　龍伯(花押)

192
「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」
陸奥守殿
早速無事御上着之由、珎重〻〻、殊自然石之現(現)、驚目存
計候、萬〻期面上外無他候、伊勢左衛門尉(貞成)被召連、友枕(伊勢貞)
知齊大慶此事候、御祈念之儀、不存油断候、穴賢〳〵、
「朱カキ」
「慶長十一年」四月十六日　(如雪)(花押)
羽柴陸奥守(忠恒)殿

193
「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
上京之後無音之至候、然とも從鹿兒嶋早打被差上候刻、
令傳書候、定頃者可相届と存候、其地之仕合東國下向之
儀、旁以委承度令存、此度進飛札候、細〻可預返書事待
入候、將又帖佐・かこしま何方も皆〻無爲候、可御心易
候、於様子者、桂太郎兵衛尉上洛之砌、致傳言候間、可
申達候、恐〻謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」卯月十六日　龍伯(花押)
陸奥守殿

194
「仝巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而令申候、屋久嶋へ唐船着岸之刻、家村源左衛門尉積荷改之爲検者差遣候、從鹿兒嶋者鈴木猪介被相添候、然處荷物之始末念不入、散々ニ罷成候、就其兼日遂糺明候、種子左近太夫も此比當地へ出頭候間、委申渡候、先々右之検者兩人手前者不届、段々無所遁候、因茲家村事者永召籠所領等迄可没収覚悟候、鈴木者其地へ召列候間、御分別次第可被仰出候、然とも彼猪介事半狂なる由承及候、其儀ニ付させられ悪子細共於在之者、御返報ニ可承候、猶期後喜候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」卯月十六日　　龍伯（花押）

陸奥守殿

195

「家久公御譜中」

同月十九日、忠恒登伏見　營、拜謁　家康公、爲述職之禮、

196

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中正文在文庫トアリ」

猶々明後日者御出立之様子、左衛門太夫殿被成御談合、御支度専一存候、猶追而可得貴意候、以上、

如御意昨日者御仕合能御礼被仰上、目出度奉存候、然者明後日之御供可被成候旨、尤珎重奉存候、我等も今日參御見廻可申上候へ共、　殿中へ罷出候間、何も從是得御意可申候、御用之儀御座候者、甚兵衛付置申候間、被仰聞候者此方へ可申越候、將亦拙者やとへ被成御越、明後日之可被成御支度旨、是又尤奉存候、何も御用之儀可被仰付候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」卯月廿日　　山駿河守　直友（花押）

嶋奥州様
參貴報

197

「義弘公御譜中」

「案文在淵邊仲兵衛」

其以來者不申通候、仍先日者正源院・戸田助左衛門尉殿を以、細々被仰越趣承届、右兩人遂熟談候間、定而可被申達候、就夫自是以使者可申入旨、令約諾候間、爲其首尾一人被進之候、大形口上ニ相含候条可申上候、將又陸奥守事急度可罷上由、從本佐州上州被仰下候間、近日可被罷上候間、於上方委細可被得御意候、乍不申御入魂所仰候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年歟」　　羽柴兵庫入道

卯月廿二日　　惟新「欠」

羽柴越中守殿　人々御中

198

「家久公御譜中」

同月二十二日、一説二十八日、　家康公參　内時、忠恒列供奉、公即日還御伏見　營、是日忠恒於山口直友第、刷裝束、

199

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々伺候、御見廻不申入、無音所存之外ニ候、以上、尊書拜誦忝存候、如仰此度御在京中、切々可得御意存候處、折節悪相煩申候付、御見廻不申入、迷惑ニ令存候、乍去少快氣御座候間、近日可致祗候候、仰承候儀畏申候、則所勞少驗御座候者、仕候て可進上申候、猶久甫差申含候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」卯月廿三日　　雅胤

封　嶋奥州様　貴答　　雅胤「在口裏」

飛中將

200

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々御(ママ)而御六ケ敷候つる、先以書狀申入候、何も期拜顔時度候、以上、

御上洛之由珎重ニ存候、尤以參上可得御意候へとも、參内前ニ御座候間、御取亂ニ候つる、何様供御心しつかに致參上候、萬々可得其意候、恐惶敬白、

「朱カキ」「慶長十一年」初夏廿三日　　[illegible](ヨメズ)

嶋津少將様　人々御披露

201

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲年甫之佳慶、太刀一腰・馬一疋并段子五巻到來、悦覚候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」四月廿七日(秀忠)（花押）

薩广少將殿

202

「正文在大口祁答院氏」

惣高百壱石弐升七夕三才

内門二ツ殿役分　二石引

外小屋敷三ッ有
殘而高九拾九石二升七夕三才　定役

慶長十一年
卯月吉日　　新納武藏入道
　　拙齋判

祁答院勘解由次官殿

203

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

從是可申入候處ニ、預御使札欣悅之至候、昨日者令參扣得賢意難忘次第候、殊ニ御懇之段、沈醉無正躰仕合候、尊隙之時分、蹴鞠興行可仕候条、於被寄光駕者可爲本懷候、猶期拜顏可申伸候、委曲御使者江申入候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」四月晦日　　雅庸

羽柴陸奥守殿　回鱗

204

『在官庫』

去月八日之御狀同廿三日下着、具ニ令披見候、先以無早儀在京之由、珎重存候、

一山口殿別而懇ニ被仰付候哉、目出度存候、定而御目見得時宜能相濟候半と、自是申計候、

一關東下之儀、當年ハ可被差置樣ニ聞得候哉、時宜不憚事ニ候条、先以目出度候、

一當國之繪圖并田帳之事、則鹿兒嶋江申渡候、然者彼田帳之事、未出來候由候条、毎日以使者急申候間、漸致首尾罷登候、早竟爲被仰付人衆不入精故ニ候、先大嶋入之御談合候ニ付、　龍伯樣鹿兒嶋へ被成御越、三日御談合ニ而候、此内も朝ハ八時ニ被罷出、晩ニハ日入前ニ罷歸、更ニ不入精事ニ候、右之願ニて延引被成候哉と存候、惣別鹿兒嶋之樣子ハ何事も緩々と物を仕、不入精事くせニ罷成候条、後日御爲ニ不罷成事と、笑止ニ存計候、

一御分國中拾壱万八千斛之かくれ知行有之由候、さりとてハ、過分成儀共ニ候、此度圖田帳罷上候ニ付而も、彼隱知行無糺明事者無心元存候、然ハ大嶋渡船之儀、銀子百貫目程入可申談合ニて候、如此造作入候、危渡海さへ被成御企候處、目之前ニ有之拾壱万八千石之隱知行無沙汰事、案外ニ候、是非共稠被仰付露顯仕候樣ニ、貴所御分別に候ハて不叶儀ニ候、至爰元も我等一入彼かくれ地之事申候へとも、誰そ被打合候事も無之、旁以笑止之事と存計候、

一河田大膳亮去月十八日罷下、被仰下条々慥承届候、

一大嶋之儀、御談合被申置候、雖然渡海之船作なとも未被企、御談合爲被申置迄ニて、其以後兎角之噂一言も無之候、然時ハ來秋之渡海、如何可相調哉と存計候、

一縁中之儀、山口殿御内儀御座候通、比志嶋紀伊守・伊勢兵部少輔前ゟ申下候、誠時宜入事ニ候条、甚以御苦勞無申計候、乍去人質於逗留ハ切ゝ見續、過分六ヶ敷事ニ候、然時ハ如此縁中被詛候へハ、當分雖難調候、後日ハ無餘儀縁者出來儀ニ候条、貴所御爲旁可然欤と存事候、

一鹿兒嶋書院并數寄屋之事、材木之木作過半出來たると見得候、雨晴候ハ、立可申候、我等罷越見廻可申候、風呂之儀ハ、未企無之候、幾度申候而も路地之松見事成躰、無双儀ニ候、然ハ當分其元路地ニ少爲替事有之由承候ハ、、是又後便ニ様子可被仰下候、得其意度候、

一一文字之刀を上方ゟ被召寄候間、我等前ゟ上せ申候へと、御かミ様ゟ被成御頼候由承候、然者彼刀ハ譜代伊作ニ有之、御重物ニ而候由候、然處如此被召嘱候事、不可然儀共に候、既　伯囿様御代ニ彼御重物を鹿兒嶋へ被召移度由、御圖を御申候つれ共、おり不申候条、不及是非伊作へ如前ゝ被召置候、ケ様ニ先例有之御重物を、貴所ミたりニ被召散、剰京都迄遙ゝ海上を可被召寄事ハ御分別之外かと存事候、誠御家貴所迄及廿代、伊作之内を終ニ不出御重物之事候處、貴所輕ゝ敷被召嘱候ハ、、後年不可然候由、可有批判事案中ニ候、彼刀を其元へ可被召寄事ハ、何之御用ニ而候哉、様子ハ不承候へとも、先ゝ我等留置申候、相構後日も刀ニよらす、御重物を何かと被召散事ハ、是非共〳〵可悪儀ニ候、御重物之儀ニ付而ハ、委敷聞候ハて別儀ニ候、文ニ餘なかく候故、闕筆候、

一馬追之事、所ニより貴所下向之砌まて殘置候へと、被仰置候つれとも、時分過候へハ悪敷候間、先ゝ諸所馬追我等前ゟ可申付由、河田大膳亮を以承候、即其通紹益へ申渡候、駒之事、一二程殘置候得と承候へとも、後日御遣物なとの爲候条、我等鹿兒嶋へ罷越、駒共見申候而、依馬形六七ッも召置可申と存候、爲御存知候、

一かたつきの事、當分焼せ置候ハ悪敷御座候、乍去肩衝六ッ上せ申候、誰ニ而も御見せ候而、此内少成共用ニ可立様ニ被申候ハ、、福嶋殿へ可被遣候、其餘ハ相應ニ可有御遣候、

一唐船之事、六月ハ定而早ゝ可致着岸事ニ候、然ハ彼嘱

之様子可得御意候由、於爰元申談候、彌無御失念被聞
召合、早〻可被仰下候、委細之儀者、比紀伊守・伊兵
部少輔ニ我等申候条、不及委細候、
一毛利伊勢守殿ゟ春屋國師之文字送預候、慥相届候間、
直ニ御返事申入事候、自然出合候折節、我等過分ニ存
候通御取合賴存候、
一弥八鹿毛之事、國分五郎右衞門作髪ニ別而入念事候条、
一段之見事ニわかやき申候、恐〻、
「慶長十一年歟」五月朔日　惟新
陸奥守殿

205
『在大口井畦氏』
隅州肝付郡高山竿迦之内
領地目録
一ヶ所　赤池屋敷
高七石者
高拾三石者　財部北俣之内
合二拾石者
右之地爲新知令配分者也、
慶長十一年
五月二日
伊畔五郎介殿
山田越前入道
理安（花押）
伊集院下野入道
抱節（花押）

206
『在大口井畦氏』
財部之内知行地割目録
高廿石之内
中田一斗五升蒔（こうノす）　浦興禅寺ノ内　仲兵衞
同所中田八升五合蒔　同　同人
下田一斗三升蒔　内荒四升蒔　五郎右衞門
合三斗六升五合蒔、但一石ニ付二升八合蒔充
上畠六升五合蒔（野くひ迫）うきめん之内　權右衞門
下畠六升蒔　浮免之内　助六
下畠六升蒔（のくひ原）　浮免之内　傳右衞門
下畠六升蒔　同　うきめん之内　源太
下畠七升蒔　同　うきめん之内　弥六左衞門
下畠二升蒔　同　うきめん之内　助六
合三斗三升五合蒔、但一石ニ付二升六合蒔宛、

高十二石九斗分也、此外七石一斗ハ高山へ遣候、
二口合七斗蒔
慶長十一年　山田越入○「印」
五月二日　伊下野入○「印」
伊畔五郎介殿

207
『仝』
高山之内知行名寄目録
高廿石之内
一ヶ所　赤池屋敷
花立下田一反四畝八分　八斗五升六合　玄清
同所下田二反四せ　一石四斗四升　和泉
しとき田下田一反二畝四分　七斗二升八合　藤左衛門
同所下田一反八分　六斗一升六合　与介
かミ成窪中畠二反四畝　壱石二斗　次郎左衛門
平田上畠一反一畝廿四分八斗二升五合　藤兵衛
同所上畠三畝十分　二斗三升四合　同人
屋敷一反二畝　壱石二斗　赤池
合七石壱斗　此外十二石九斗ハ財部へ遣候、

慶長十一年　山越入○「印」
五月二日　伊下入○「印」
伊畔五郎介殿

208
「家久公御譜中」
同年五月十七日、　將軍家賜兒鷹一連・鷂一連於忠恒、
安藤彦兵衛尉奉　鈞命、以書簡傳達、拜受后登　營拜謝、

209
「古御文書十番箱御軸物中」
從　上様御鷹・兒鷹壱・鷂壱分進候間、爲持進之候、能
〻御請取せ可被成候、今日いつれも爲御禮御登城被成候
間、被仰談御出仕可被成候、恐惶謹言、
五月十七日　（花押）　安藤彦兵衛
〆　嶋津奥陸守様（「マヽ」）　人〻中　b

210
「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」
此度元巣令下着、石漕船殘分早〻可差上之由申來候間、

即申付候、此方無緩令催促候条、近日中可致上着候、此等之旨爲可申、用飛札候、猶委者石船上乗之者へ可申含候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」五月廿一日　　龍伯（花押）

陸奥守殿

211

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御使札忝拜見仕候、仍而唐船三艘着岸仕候付、被仰聞奉得其意候、　御用物於御座候者、從是以使者可申上候、殊爲御音信、黒砂糖五籠被懸御意、忝奉存候、隨而江戸・駿府爲　御目見之御上洛被成候由、罷出可得御意候へ共、却而憚之儀ニ御座候条、疎略之躰候、猶御使者申上候間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」五月廿五日　　長谷川左兵衛藤廣（花押）

羽柴陸奥守様　尊報

212

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

幸便之条令啓候、其地へ御上着候哉、早々承度存計候、尤自是茂以早打、御辛勞之段雖可申候、先々從加治木早打被成上せ候、一時にハ不入由候間、致傳書候、此後者かこしまより早打可被差上由候、其後從此方者上せ可申候、聊非疎意候、其元之様子委細可示預事所希候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」五月廿八日　　龍伯（花押）

陸奥守殿

213

「家久公御譜中」

「正文在入来院主馬重矩」

此方爲見廻、到遠路使書珎重候、　御前之仕合無所殘、殊近日令下國事候間、萬期對顔候、謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」六月朔日　　忠恒（花押）

入來院石見守殿

214

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

先刻者預御使者候、　御前ニ候て御報不申上候、何も明日可得御意候、以上、

御拜領之御鷹參申候之由、御大慶奉察候、然者御禮ニ可被成御出仕旨御尤存候、本上州一兩日者被相煩、出仕不

215

被申候、定而明日邊ハ　御前へ可被罷出候間申談、時分之儀自是可被申入候条、其節御出仕専一存候、猶拜顔之節可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」
六月五日　　山駿河守　直友（花押）

奥州様
参貴報

「御文庫四拾八番箱義弘公三十二通中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶〻右申候舟參候ハヽ、先はや打を以着津までの躰を被申上、其後積荷之様子共、然〻之使者を以可被申上之由、紹益へ細〻申事候、將又我等事も國府へ打詰有之事ニ候、かゝ様御事も　龍伯様御煩、御一大事と見得申候間、被成御越可然候ハんと申越候、左候ハヽ紹益御供可被申由申候、かこしま御番之事ハ、椛山權左衞門尉罷越、御番可被申由申遣候、是又爲御存候、

追而令啓候、

一去〻年秋目ゟ呂宋へ罷渡候小田原平右衞門尉舟、頃片浦へ歸朝仕候、勿論　御朱印船ニて候間、此方ゟハかもいなく候、

一去年罷渡候かびたん舟、無吳儀呂宋へ罷着、當年追付此方へ罷渡之由申候、然處大迫三太夫かびたん之舟ニ積あましの荷を小舟ニつミ、先舟ニ山川へ着津候、彼者口柄もかびたん舟も、呂宋皆同日ニ出船仕候条、近日可參と申候、彼舟參着次第追付注進可申候、

一甑嶋伴天連へ從呂宋爲音信、小黒舟一艘罷渡之由、三太夫申事候、

一唐船奉行之事無油断可被仰付置之由、三十日以前ゟ紹益へ申渡候へ共、未被仰付由承候、笑止之至候、惣別當國之事者、唐船着岸之刻も奉行緩候故、種〻側よりせゝらるゝニあきはて候よし及承候条、左様ニ無之様ニ稠以条書可被仰付之由、紹益へ申渡候、是又爲御存知候、

一去年船頭かびたん、以条書訴詔申候内、船頭上方へ不被召上様ニと、一ヶ条ニ見得申候、彼儀ハ比紀州・伊兵少爲心得候之条、内〻可被仰聞せ置候、

一石漕舟之事、江戸御普請中ニ無參着候へハ、貴所被失面目、國家之表事不可過之候条、毎日使者を以かこ嶋へ申渡候、然共國ならひニて遲〻候之条、心遣千万候、

一かこしま御内前之橋も、明日六日ゟ渡被申候、

一書院も急度可立之由候条、定早〻出來可申候、猶追〻
可申承候、恐〻謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」六月五日　　惟新（花押）
陸奥守殿
まいる

216
「家久公御譜中」
同年六月六日、麑陽城樓門前板橋、既新成爲渡初、
同月六日、自伏見忠恒降自筆之書於在國之家老島津圖書
入道紹益・樺山權左衞門久高、曰來秋必可討大島、不可
敢懈惰云云、

217
『在樺山氏』
猶〻ゆたん無之やうニたのミいり候、
其後ハ無音、仍岩切令上着新説珎重〻〻、然者大嶋入之
儀來秋必〻可有之事簡要候、若〻ゆたん候てハ不可然候、
如渕底當年ハ石漕ふね作、同江戸へ運送、又縁中之儀付
而過分之入め上下之つかれにて候間、當年大嶋之事相調
候ハすハ、後年迄之つかれもなり候ハんまゝ、國家之た
めを被思候ハゝ、折角可被入念事此時候、あまり氣遣候
間、悪筆にて申候、渡海之衆江此旨能〻可申候、拜首、
「朱カキ」
「慶長十一」六月六日　　忠恒（花押）
紹益（島津忠長）
樺權左衞門尉（久高）　忠恒
「家久公御譜中、正文在樺山助四郎久治トアリ」

218
「家久公御譜中」
先是、惟新以書告龍伯病大切、忠恒聞寢食不安、然今龍
伯贈一封之書言、因祐乘法印療養、病將得少快、繇焉姑
緩心、

219
「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」
河上又左衞門尉、爲替彼税所弥右衞門尉罷上候間、以
書狀令申候、
一長〻被成逗留御辛勞之段、無申計候、早〻下國待入候、
一人質之事、今日可被打立日取治定ニて候、爲御存知候、
一我等氣合之事無替儀候、取分膝いたみ、膽せき、しハ
ふきなと無断候、然とも脈躰少なをり候之間、土用過
候者可心易之旨、祐乘法印被仰候、定可得驗と存候、

御心遣入間敷候、
一高橋家中之者へ言傳之狀、慥相届令披覧候、
一平田五次右衞門尉致下着、御音信委承候、然者其方ニて出合之儀申來、驚入候、猶於様子者、弥右衞門尉可申達候、恐々謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」六月十一日　龍伯（花押）
陸奥守殿

220
「家久公御譜中」
同月十七日、忠恒應　徵登伏見　營、則　家康公以　御諱家字賜忠恒、加旃拜領寶刀（治工大泰長光）、一腰・駿馬一匹、於是配合久字號家久、乃如山口直友・本多正純第奉謝恩賚忝、直友・正純贈書壽之、（此時為　御字拜領之御禮、獻上品物、登　營之日共不相傳、）

221
「正文在文庫」

「朱カキ」
「慶長十一年六月十七日」

222
「家久公御譜中」
「正文在高橋七郎右衞門種十」
尚々早々可罷下候由被仰出候間、此節者修理殿可參儀、罷成ましきかと存候、何も重而可申承候、
先刻預御狀候處、他所へ罷出、唯今遂披見候、仍從中修理殿定而被仰趣、心得存候、先書ニ如申候、今明日者隙入申伏見へ罷歸、別ニ　公儀指合申儀無之候ハヽ、以參可申候間、日指をハ難申候、可預御心得候、恐惶謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」六月十四日　忠恒（花押）
「在口裏」
高右近様　御報　羽陸奥守

223
「御文庫二番箱家久公二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
以上
如御意、今朝於　御前御仕合無殘所儀、御滿足奉察存候、抑今日被　進候御字ニ久之字被成御加、家久公と被遊之段、千秋万歳目出度奉存候、猶以明日致參上、萬吉可申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」六月十七日　　山口駿河守
奥州様　　直友（花押）
貴報

224
「家久公御傳中」
一慶長十一年六月十七日、忠恒應　徵登伏見營、則　家康公以御諱家字賜忠恒云々、於是配合久字號家久云々、

225
「御文庫二番箱家久公二巻中」「家久公御譜中ニ在リ」
尚々參候而可申上候、以上、
尊書令拜見候、如御紙面、昨朝者御登城被成候處、一段御仕合共殘所無御座、御滿足被思召通奉察候、然而御名乘之久之字被遊付候、御尤奉存候、弥目出度存御事共候、將亦昨日ハ御尋被成候由、忝次第御座候、乍去御城罷有、不能貴面、御殘多奉存候、何も致參上、万々可得御意条、不能詳候、恐惶謹言、
六月十八日　　本多上野介
嶋津陸奥守様　　正純（花押）
貴報

226
「御文庫四拾八番箱義弘公三十二通中」「家久公御譜中ニ在リ」
御かミ様ゟ使者を被指上ニ付、一書令傳達候、仍貴所事諸大名同前ニ御暇出申候へ共、人質之上洛遲々候故、下向延引候事、誠外聞彼是不可然、笑止ニ存候、乍去人質も明日爰許必打立ニ而候、定而上着程有間敷候、あわれ御祭禮前ニハ下向候へかしと存候、然ハ國元麗嶋を始、いつれも替儀無之候、就中　龍伯様無事ニ御入候、可御心易候、餘者彼源太左衞門尉可申候間、令省略候、恐々謹言、
「朱カキ」
「慶十一年」六月十八日　　惟新（花押）
陸奥守殿
參

227
「家久公御譜中」
龍伯・惟新胥議、命島津圖書入道紹益嫡子河内忠倍、以爲當家質、而如伏見代島津藤次郎久賀妹、則所君命重、且爲國家忠倍領掌之、行季旅莊既成、六月十九日、忠倍發麗府而赴上國、
同月十八日、家久訪理性院、因是十九日、院主以書謝述如左、

228
「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

昨日者此地迄入御、千萬〻〻、恐悦無極候、殊濟〻預芳
貺候、御懇情之至難申謝候、邂逅之儀、無何之風情心外
之至候、早〻御歸洛尤御殘多令存候、先〻爲御禮、以使
者申入候、猶期後慶之節候間、不能詳候、恐惶謹言、
「朱カキ」「慶長十一年」林鐘十九日　　勸助
嶋津陸奥守殿　人〻御中

理性院大僧正
松平大隅守殿　人〻御中　　勸助

229
『在口記』

覚

一帖佐・山田を祁答院より格護ニ候、酉ノ年より丑ノ年
まで廿九年也、
一又帖左・山田同丑ノ年ゟ御かくこ、當年まて五十四年、
又蒲生ハ卯年ゟ今年迄五十二年、御かくこにて候、帖
左・山田從鹿兒嶋直ニ御格護被成候、御地頭も平田殿
代〻の地頭職無其隱候事、

已上
慶長十一年
六月吉日
八十七才　池田出雲守

230
「家久公御譜中」

同月二十二日、家久賜告、此時拜賜品物無所考、
同月二十四日、家久改花押、備照高院如雲(雪)親王高覽、則
有褒美之詞章、

231
「三番箱宝鑑中」

職原抄奥書之事、任古本令書寫候處、御禮令迷惑候、又
被改御判候、別而勝候欤と存候、猶以面可申述候間、不
能巨細候、先度之線香進上候通慥申入、一段可有御秘藏
旨候、相意得可申達由候事〻不宣、
「朱カキ」「慶長十一年」六月廿四日　　(花押)「如雪公御判」
羽柴陸奥守殿

「家久公御譜中ニあり」

232
「家久公御譜中」
「正文在東郷八左衛門」

猶〻　龍伯様御煩やうす國分よりの注進も、御書中之趣同前候、定追〻注進可有之と存候、先年之御煩よりもつよく御入候よし、驚入申候、御養生之儀可被入御精候間、不及申候、醫者無之候間、無心元存候、かこしまよりも被相越候やうにと被成御意候哉、御尤候、何もやかて罷下事候間、可得尊意候、

去五日之　尊書、一昨廿二日到來、具拜見仕候、　龍伯様御煩之由、御老屈与申連〻御草臥之事候間、千萬無御心元奉存候、我等儀も昨日御暇被下候間、二三日中打立可罷下候、次從秋目致出船候渡唐船歸朝候哉、直ニ被下御朱印たる舟之由候間、其段山駿州迄申置候、將又甑嶋へ小黒船、當年可參之由候哉、一段目出度存候、彼舟之あまり荷つミ申たる舟、山川へ參候ハ、、小黒船之事別儀御座あるましきと存候、就其彼船頭申たる儀共被仰上候、則駿州へ申候、　御前可然様ニ可有御取合之由候、先書ニ如申上候、舟着候ハ、何時も早〻あきなひ御させ候て尤之由候、舟之着申たるよし、從他所注進無御座うちに御申候て可然之由候、不可有御油断候、何事を申候ても鹿兒嶋へ申事者、きり〳〵と有之まし〻く候間、無御遠慮被仰候而可被下候、就中唐船奉行之儀、よく〳〵入念候ハてハ心遣候間、大かたに候ハぬやうニ紹益・權左衞門尉へ被仰達、よこめをひら松より御付候やうにと存事候、來月中ニハ我等可罷下候間、其間之儀奉憑候、乍重言いつれの舟にても唐船參候ハ、、急ニ御注進可被仰上候、あきなひハ早〻御させ候て、めつらしき物なと參候ハ、、其段ハ被仰上候へとの御事にて候、誠惶敬白、

「朱カキ」
「慶長十一年」
六月廿四日　　陸奥守　家久（花押）

進上
惟新様
「在口裏」

233

「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」

近日御下國之由、目出度存候、扨者先日者來臨、令祝着候、其已來以愚札成共可申候處、持病指出散〻爲躰故、兎角打過背本意候ヰ、何様自是可申候、次維新へも以愚狀申候、御届憑入存候、次龍伯所勞之様ニ只今承候、千萬〻〻無御心元候、吉事承度候、猶山田民部少輔可申候条、不能巨細候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」六月廿五日　　（花押）「竜山公御判也」

奥州

234 「古御文書以下二十三通一巻拾番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

蹴鞠爲門弟曲足事、此儀者條々雖有子細之儀、別而御執心之間免之候、兄弟之契約申故ニ候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」六月廿八日　雅庸

羽柴陸奥守殿

羽柴陸奥守殿　雅庸

235 蹴鞠爲門弟、四本桜之事免申候、可被植之者也、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」六月廿八日　雅庸

羽柴陸奥守殿

羽柴陸奥守殿　雅庸

「在十番箱御軸物中」

「家久公御譜中、正文在文庫トアリ」

236 「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中　正文在文庫トアリ」

先日以來不得賢意候、仍明日欵朔日ニ、金森法印蹴鞠張行仕度由候、去年被申入候處ニ、御下向之折節にて不被成御出、御殘多由候間、今度者御隙入候とも、御同心可爲欣悦候、今日も鞠興行候、猶以拜顔可申伸候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」六月廿九日

嶋津陸奥守殿　雅庸
人々御中

237 「圖書頭忠長譜中」

慶長十一年丙午、有麑嶋居住之命、故終宅地土木之功、同六月擇良辰、以移徙者也、

238 「河内守忠倍譜中」

慶長十一年丙午之夏、老父紹益移于麑島、忠倍移于東郷也、慶長年間爲薩摩州之質赴京師、而或在洛陽、或在伏見經寒暑、所以歸國者再也、

239 「尚久一流系圖」

河内守忠倍ノ子

女子

圖書頭久通室

慶長十一年丙午誕生、母島津豊後守朝久女也、

寛永十七年庚辰六月廿日逝去、年三十五、法號任性養運、

240

「国分宮内澤氏文書」

隅州桑原郡宮内

内山田村之内

屋敷壱段七畦十八分　但鳥居之内　吉右衛門

分米壱表七斗六升

右屋敷、雖爲少地神前之儀候条、　竜伯公御當病爲平喩

令寄附候畢、

慶長十一年七月二日　山越前入道　理安

伊下野入道　抱節

澤殿

241

『仝』

御朱印有

正宮御田之目録

隅州桑原郡宮内

内山田村之内

上田八段廿五歩分米拾二石九斗三升　澤下

但上代ニハ九段也、

先年天下以御下知、寺社領皆同ニ勘落之刻、五百斛餘

雖被相定、社領社衆成給地ニ、御供田闕所候之条、今

度相改如先例彼地令寄附訖、此返地事、到社方別所ヲ

指遣者也、

右意趣者、　龍伯公御當病御快氣、國家安詮之故也、仍

狀如件、

慶長十一季七月二日　山田越前入道

伊集院下野入道(花押)

澤永温老

242

「家久公御譜中」

慶長十一年七月三日、長崎奉行長谷川左兵衛尉藤廣贈書

於家久曰、南蠻黒船來著崎湊、所欲之事黨承示諭可辨達

云云、

243

「古御文書拾番箱御軸物中」「家久公御譜中ニあり」

已上

尊書忝拜見仕候、仍堺町割之儀、大方相極申、少々得御意候事御座候て、昨日罷上申候、尤祗公仕可申上候へ共、急罷下候ニ付、無其儀候、次ニ黒船長崎へ參着仕候、何にても御用之儀御座候者、可被仰付候、少も〳〵疎意仕間敷候、猶重而可得御意候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」七月三日　藤廣（花押）

「口裏有リ」長谷川左兵衛尉

「口裏ニ有リ」

〆　嶋津陸奥守様　尊報　藤廣

244

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

蹴鞠爲門弟、朽葉色葛袴之事免之候、御着用規模珎重候也、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」七月九日　雅庸

嶋津陸奥守殿

245

「御文庫三番箱中」

嶋津陸奥守殿　雅庸

日向國大慈寺住持職之事、任先例、可被執務之狀如件、

慶長十一年廿二日「本マヽ」　少將家久（花押）

玄祥西堂

「慶長十一年六月十七日、御諱字ヲ賜ハリ、家久ト改メラルヽ、故月日推考スヘシ」

246

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニあり」

猶々御下向ニ付、御迎少々可申付候へ共、比紀州ゟ迎ハ入間敷通被申下候間、任其意かろき者一人差越候、定而可參と存候、以上、

從麑嶋早打罷上ニ付、令傳筆候、仍御國もと一段無事ニ御座候、就中　竜伯様御煩も頃者御かろく御座候条、可心安候、餘者近日中可爲御下向由候間、期其節書面不具候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶十一年也」七月十六日　惟新（花押）

陸奥守殿（まいる）

247

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

以上

貴札忝拜見仕候、如被仰下候、去時分兵庫頭殿ヨリ預御使者候刻、御内意之趣達上聞、及貴報候處、爲御禮以使者被仰上候、　大御所様駿府ニ被成御座候間、御使者致同道可遂披露候處、當地御普請已下、御用被仰付罷在儀候間、上野介かた迄委申遣候、前篇御前之様子、上野介存知之儀候条、御仕合能可有御座与奉存候、度々如申上候、貴公様被仰談上者、兵庫頭様御事御同前ニ、少も御等閑無之儀候条、弥以其御心得肝心ニ奉存候、委曲爰元之様躰、御使者可爲演説候間、奉省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」七月十七日　　本多佐渡守正信（花押）

羽柴陸奥守様　貴報

（本文書ハ旧記雑録後編三、一五二三号文書ト同文ナリ、但ノ朱注ニ慶長六年トアリ）

248

「家久公御譜中」

同月十九日、家久辭伏見、而赴本邦、

249

此度者路次まても不罷出、御殘多次第候、以上、

今度者早速被成御下向候、御殘多存事候、重香箱被懸御意過分存候、將又左兵衞申候義、相心得存候、委可申入候、何様來春御上洛可被成候間、其節御心閑可得貴意候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」七月十九日　　雅庸

嶋津陸奥守様

「家久公御譜中ニ在リ」

「正文在十番箱御軸物中」

250

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

祐乘法印在國候御禮等爲可申入、山駿州迄用飛札候、仍貴所下國之儀令遲延、無心許存候、來春者東國まて御禮儀共可在之由候間、早々可被成下向事尤候、猶期面謁之時候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶十一年」七月廿一日　　龍伯（花押）

陸奥守殿

251

「雜抄」

定

一下総國佐倉より東におゐて、しかみ錢取遣仕へし、但
われ錢・かけ割錢者ゑらひ可申事、
右依相望之、如先規申付訖、若此旨相背之輩におゐて
は、可處嚴科者也、仍如件、
慶長十一年七月廿三日　　對馬守判
（土井利勝）大炊助判
（伊奈忠次）備前守判

252
「家久公御譜中」
家久入麗城之日無傳、按、八月上旬乎、

253
「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」
尚〻沈香五斤被下置候、遠路被爲入御念之段、別而
忝奉存候、以上、
尊書拜見、忝奉存候、誠罷下候以後、以書狀も不申上、
所存之外ニ御座候、如被仰下候、今度初而奉得御意候之
處、別て御懇意共忝次第、書中ニ難申上候、將亦來春御
下向可被成之由承候、遠路御太義共御座候、委細者御使
者へ申入候間、不能一二候、恐惶謹言、
「朱カキ」「慶長十一年」　　土井大炊助
八月四日　　利勝（花押）
羽柴
奥州様　人〻御報

254
『在新納氏』
起請
一今度一向宗就御糺明、互心底不存候、我〻事者彼宗ニ
不罷成候、勿論向後別心有間敷候事、
一雖不新候、御奉公之一筋無別儀可申上事、
一不可致野心不忠事、付自然雖有讒者、能〻御糺明候而
可被下事、
右條〻若於偽申者、
▽謹請散供再拜再拜、夫惟慶長十一年丙午歳、月並者十二
ヶ月、日數者三百五十餘ヶ日、擇吉日良辰而致信心請白
諸衆等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釋四大天王　豹尾　黄
幡等　徳神　釈迦善逝釈提　桓因　奉宿却、　四天　八
天　十二天　二十大天　三十三天　十二神將　七千夜叉
廿八部第　六天魔王聖主天北之三十六會　百億須弥　百
億梵天帝釈　百億鐵圍山　百億閻魔法王　諸天　百億天
衆　百億天人　百億天女　百億童子　百億大力夜叉　百

億悪鬼　百億天上　百億閻浮提中所顕現之大小神祇、上者有頂天、下者到金輪在而佛神、皆悉驚白言、堅牢地神　八海所接龍王龍衆　十王十躰俱生神　太山府君　司命司祿　冥官冥衆　有情無情　辰星　南斗　北斗星　日耀星　破軍星　羅睺星　計都星　巨文星　明星　七夕星　八葉星　本命星　四方四佛　五方五佛　大聖摩利支尊天　大白神　太歳神　八諸神　十二月將　天葬神　地葬神　阿豆智神　天神　地神　海神　木神　火神　金神　水神　風神　諸佛諸菩薩諸善神　東方降三世明王　南方軍荼利夜叉明王　西方大威德夜叉明王　北方金剛夜叉明王　中央大日大聖　不動明王　大黒尊天　毘沙門天王　大弁才天女　宇賀神　十五童子　三寶荒神　多婆羅天王　武答天神　頗梨采女蛇毒氣神王　八王子　八万四千六百五十餘神　金剛界七百餘尊　台藏界五百餘尊　金剛藏王　晃蛇帝王　大聖金剛童子　普天率土愛染明王　妙見菩薩　過去現在未來三世諸佛　一万八千軍神　二万八千軍神　三万八千軍神　四万八千軍神　五万八千軍神　六万八千軍神　七万八千軍神　八万八千軍神　九万八千軍神　十万八千軍神　二千八百師天童子　一万燈明佛　二万燈明佛　三万燈明佛　藥師如來　宝性如來　無量壽佛　微妙身如來　文殊普賢　観音勢至　十六善神　八万四千夜叉神、忝日域崇廟天照皇大神宮　内宮四十末社　外宮八十末社　風宮　諸末社　八幡大菩薩　春日大明神　王城鎮守山王廿一社酉酉　根本尊師　立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵　祇園牛頭天王　松尾大明神　平野大明神　吉田　立田大明神　大原大明神　稲荷大明神　賀茂下上大明神　住吉大明神　三番神　愛岩四所大權現　熊野三所大權現　十二所權現　九十九所權現　廣田大明神　金山權現　吉備宮大明神　對馬天王　羽黒山大權現　葛城大權現　峯々之藏王權現　子守勝手大明神　樹宮大明神　法華廿八品　三藏法師　鞍馬毘沙門天王　吉祥天女　雨寶童子　關東守護神　伊豆箱根兩所權現　三嶋大明神　冨士大權現　白山妙理權現　立山大菩薩　諏訪上下大明神　出雲大社大明神　多賀大明神　御靈八所大明神、殊者氏神、摠者大日本國中六十六ヶ國大社　二千小社　五百九十二所大小神祇等　地藏菩薩　陀羅尼菩薩　龍樹菩薩　虚空藏菩薩　栴檀香菩薩　大病神　八万四千鬼神　大恩神　歳破神　天蘇神　大疫神　太歳神　夜叉氣神　一妙鬼神　六百五十餘神　金山六十万鬼神　刀八毘沙門天王　大天狗　太郎坊眷屬　九億四万三千四百九十餘神　善貳師童

子、八所大明神　善害坊　次郎坊　八万四千眷屬　大天魔三万三千　小天狗三万三千眷屬　智羅天狗　十二八天狗等、城之中山山峯々嶽々所居住之大天狗　小天狗等、各作群集、而正路之旨照鑑給、若偽心於在之、立處受白癩重病、八万四千毛孔、四十二之骨節、日々夜々苦痛無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加盡、佛神三寶雖作祈願不可叶、於後生者、堕八寒八熱阿鼻無間大地獄、到未來永却、不可有浮期者也、仍靈社上巻起請文如件、△

伊地知民部少輔　重政(花押)
西田和泉守　隆貞(花押)
同五兵衛尉　隆次(花押)
鹿嶋七右衛門尉　吉國(花押)
同太郎兵衛尉　國明(花押)
肥後仲右衛門尉　盛良(花押)
同助三郎　盛貞(花押)
白坂駿河入道

湯田新右衛門尉　重昌(花押)
隈本八兵衛　宗昌(花押)
木場城介　宗隆(花押)
村田源尉　經秀(花押)
同弥藤次　經恭(花押)
宇宿善右衛門　久賢(花押)
柿原李助　利泰(花押)
中原孫左衛門

喜安(花押)
寺師隼人佑　宗英(花押)
有村勝右衛門尉　重辰(花押)
本村吉次　実周(花押)
崎田新藏　親豊(花押)
川俣源四郎　篤豊(花押)
北原孫右衛門尉　兼朝(花押)
同八郎右衛門尉　兼歳(花押)
曽木持右衛門尉　重清(花押)
北原弥七左衛門尉　兼清(花押)
白坂平丞　篤儔(花押)
種子島藤七兵衛　時堯(花押)
園田七兵衛　長末(花押)

成雅(花押)
藤田早右衛門尉　綱吉(花押)
桃山作右衛門尉　忠綱(花押)
市來傳左衛門尉　家逸(花押)
今村佐渡守　重泰(花押)
同助右衛門尉　重續
同孫右衛門尉　重次
松山孫兵衛　爲栄(花押)
園田狩野介　頼常(花押)
日高次郎左衛門尉　正良(花押)
岩切新兵衛　信辰(花押)
同軍右衛門尉　信貞(花押)
押川五郎兵衛　近常(花押)

今村與兵衛　重昌（花押）
上村肥前入道　宗遄（花押）
長里善兵衛　隆定（花押）
同藤吉　久次（花押）
慶長十一年丙午八月十一日
新納武藏入道殿　參

「此正文、御文庫十七番箱十六巻中有之、季通紀合、民部少輔重政ハ季通先祖也」

255

「忠元勲功記」

慶長十一年午八月、此比一向宗御禁止之　御沙汰被爲在候付、此月十一日忠元菱刈表江罷居、伊地知民部少輔重政以下四拾八人相集、互ニ爲致紀明、誓詞申付取締爲仕由御座候、

256

「家久公御譜中」

山口駿河守直友投九月三日之書於島津紹益・比志島國貞

長谷川玄蕃允　爲泰（花押）
市來貳介　家次（花押）
大田喜右衛門尉入道　雲雪（花押）
椛山市兵衛尉　忠貞（花押）

・伊勢貞昌・樺山久高、其趣自當家獻上石漕船之棹郎等、於江府與他方者喧嘩闘諍、爲押所乘之士赤崎左近者、其働宜、本多正純・井上志摩守尋問始終之事、左近所言説甚有理、而感心、因正純達其趣於　高聽、則聡明叡達、而免賜自盡於左近、歸本國、此事正純・志摩守爲當家大盡懇意、以使者可報謝之旨亦載之、委見于書、

257

「正文在島津筑後忠置」

今度御國之石船船人衆喧咤令仕付、様々出入有之處、本上州精入申「本マヽ」〳〵、御國衆如存分之爲　上意被仰付候、先書如申、本上州肝を被煎候事、御推量過申候、然者赤崎左近方被申様神妙之由、本上州より以書狀被申入候、左近方可被致切腹儀定候處、無吳儀可有歸國之旨被　仰出、被罷下候、於趣者、本上州書中被申入候間、可然様御披露可被成候、本上州拙者より尚以念を入、右之通可申入由候間、如此候、赤崎左近方今度之仕合、別而上野介方感被申候、其御心得可被成候、□中井志厂守上州入魂被申付、此公事之儀、無殘所披露被申、御爲可然様相濟申候、急度御使者にても書中にても、御禮被仰尤候、外追々可申傳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」九月三日　　山駿河守

嶋圖書入道殿
比紀伊守殿
□兵部少輔殿
□殿「奥切ルヽ」

258
「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様爲重陽之御祝儀、御服五之内綾二・染二被成御進上候、致披露候處ニ、一段之御仕合共御座候条、御心易可思食候、　御内書之儀者、重而相調可進之候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」九月六日　　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守殿

259
「家久公御譜中」
「正文在文庫」

爲重陽之祝儀、小袖五之内綾二到來、喜悦候也、

「朱カキ」
「慶長十一年」九月九日　　（家康）◯「墨印」

薩摩少將とのへ

260
「義弘公御譜中」
「正文在入来院石見重頼」

先日川上掃部助を以申候貴所身躰之儀、其涯返事不承候条、無心元存令啓候、貴所事奇特成縁を以、關ヶ原ゟ被付隨間、爲何仕合もかなと存處ニ、入來院後室ゟも貴所事を養子ニ望間敷よし候つる条幸ニ存、少將殿と以内談申遣候處ニ、存之外返事遅々候事、千萬々々無心元存候、其謂を少將殿内存相調候而被仰儀共を、以來とても如此不被請様子ハ、いかゝ敷存候、一たん申たる上ニ無同心處、又々ヶ様ニ申儀共如何敷候へ共、入來院事古家と申、又六事我等同心にて、相はてられたる儀ニ候へ者、如此氣遣ニ存候、題目貴所事も、右之謂と申無別儀奉公も可有様ニ見得候由、内々少將殿も物語候之間、彼一説之儀もぶげんと申、人數なとも于今在之由候まゝ、陸奥守殿ためにも成ましき人を定置候而も、無其詮と存ての儀ニ候、分別ハたけ〳〵通〳〵ニ有物にて候へ共、於此儀ハ貴所ため可然儀を存計たる儀候条、わきゟ色〳〵様々分別たてにて申人雖在之、あまり珎敷儀ハ可難有候、若々

念比たての人共候而、非道成吳見共候ハ、、其旨ニ同心
も候てハ笑止ニ存如此候、今月新田へ爲參詣打立候之間、
來十二三日之比者返事可承候、恐々謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」九月九日　惟新（花押）
石見守殿

261
「家久公御譜中」
「正文在文庫」
爲重陽佳兆、喜思食候、猶本多佐渡守可申候、謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」九月十七日（秀忠）（花押）
薩摩少將殿

262
「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」
尚以被爲入御念、拙者迄爲御祝儀、御小袖數々被懸
御意候義、書中ニ難申上候、以上、
將軍樣重陽之爲御祝儀与、呉服進上被成候趣、披露仕候
處ニ、遠路被爲入御念候儀、御祝着ニ被思召、　御内書被
進候、次ニ拙者へ御小袖三内染物・綾・熨斗目送被下候、
誠每度御芳情之至、書中ニ難申謝候、委曲爰元之樣躰、
御使者山口駿河守殿より可被仰達候条、奉省略候、恐惶
謹言、
「朱カキ」
「慶長十一年」九月廿日　本多佐渡守正信（花押）
薩广少將樣　人々御中

263
「御文庫四拾八番箱中」
返／＼も被入御念御狀被下候、忝存候、銘々ニ雖可
申上候、頓而自伏見可申入之間不具候、何樣期後日
候、以上、
御使札之旨忝奉存候、
一江戸之仕合之儀、以先札細々申上候、其已後於御城被
成御振舞、種々忝被加上意候、殊御腰物拜領申候、是
者殿下無隱を、たい長光とて、名物と聞得申候、其上東
國無双早馬一疋、栗毛鞍敷、又同毛一疋被相添候而被下候、
誠忝儀難盡紙上候、頓而此日御暇被下候間、追付打立
當地美濃之内落合と申所迄罷上候、是より伊勢へ致參
宮上洛候者、早々仕廻罷下、旁可申上候事、
一從安南國使者船着岸之
「此間切ル、」
弥彼國之儀被添御心可被下候、紹益へ無油断樣ニと可

被仰付事奉賴候、何様遂尊顔可申入候、恐惶敬白、

陸奥守
家久（花押）

九月廿九日

進上　惟新様

「慶長十一年ト張紙有之」

264

「古御文書御軸物十番箱中」

以上

重陽之御服進上被成候、案内者相添、江戸差越申候、御内書、本佐州ゟ書狀被相添候、即進之申候、從　大御所様亦御黒印駿府ゟ可被越候由、本上州ゟ被申越候間、其節進之可申候、先從江戸之御内書迄進上申候、猶追而得御意可申候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」
十月七日

山口駿河守
直友（花押）

□
少將様
參人ゟ御中

265

「家久公御譜中」

山口直友就當家代質事、以有可胥議旨、故使和久甚兵衛尉齎書降于薩州、　家康公去月二十一日出伏見　營、赴關東、途中有御安全之聞、姑可弛情旨載于書面、

266

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御歸國以來、以書狀さへ御見廻不申入、背本意奉存候、爰元相替儀無御座候、　上様去月廿一日當地を被成　御出、關東被成御下向候、路次中御機嫌よく御座候由申來候、御心安可被思召候、將亦内々此方にて得御意申候、御質なと之儀、存寄通得貴意可申と存、和甚兵衛差下申候、於趣者甚兵衛可申上候、此方御用等御座候者可蒙仰候、猶口上ニ申含候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」
十月十日

山口駿河守
直友（花押）

奥州様
參人ゟ御中

267

「御文庫廿二番箱九巻中」「義久公御譜中　案文有之トアリ」

急度令啓候、先日岩下吉右衛門と申商賣人罷上候、其傳ニ一通差上候、定相届候らんと存候、然者先虫之藥之儀申上候處、桑山又四郎殿へ被仰談調預候、則致受用得驗躰候、祝着不少候、乍去此五月已來虫起、于今無怠事迷

惑至極候事、実ニ虫差出候折〻此薬用候へハ、當時者雖得驗候、無殘所可致快氣やうにハ無御座候、されとも當時虫治心安候間、猶以此薬大望候、先預候分皆用盡候、就其又爲所望、態一人差上候、調給候者可爲本悦候、旁御入魂賴存候、恐〻、

「朱カキ」「慶長十一年」十月十六日　　矢ヶ代弥吉早打也

祐乗法印

追而大坂へ居候者、此比罷下候、此薬之様子大方存知候、まつちん加候由申候、まつちんハ毒ニ而候、如何無心元候、是ハ不実ニ存候へとも、口からのまゝ申入候、実不実ハ貴老へ御尋申候者、其隱有ましきと存、如此候、已上、

「義久公御案文也」

268

「御文庫拾六番箱五巻中」　「義久公御譜中　正文有之トアリ」

一書申上候、先日祐法迄虫薬之儀被仰下候、即進之候之處ニ、相當仕候由大慶ニ存候、隨而爲御音信、繻子弐端被懸御意候、忝次第ニ候、自是以書狀成共可申上處ニ、未得御意候故、何角罷過候、上方御用之儀御座候者、可被仰付候、猶期後音之節候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」十一月六日　　桑山又四郎幸晴（花押）

龍伯様　人〻御中

269

「大口篠原氏藏」

切手

正月酒の米、藏入より百石ニ付而米壱斗七斗五升ツヽ可被出候事、

以上

「六本マヽ」慶長十一年十一月七日　　拙齋（花押）

藏代官中まいる

右之米之事者丸田久右衛門尉へ可被渡候、

270

「家久公御譜中」

先是家久在伏見之時、上言琉王近年以背前盟明年伐之、蒙　家康公及　秀忠公可許、竊議其備、既而秋八月、大明商船來著琉球、因薩隅日之商賈爲賣買、願航球國、告其事於山口直友、則報曰、其最可、雖然明春無渡師之妨否、當能慮之、委見直友之書、

271

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶申候、唐之皿贈被下候、此中之に替り一段珎敷御座候間、一入忝奉存候、猶後音之節可得貴意候、以上、

九月二日之御狀、今日十五日令拜見候、　大御所様關東御下向之儀、先書申入候、弥々御息災之由候間、御心易可被思召候、然者御國之加子共喧嘩仕由候、併如被仰越、本佐州肝煎故相濟申候間、御心易可被思召候、就中琉球へ唐船着申由被仰越候、然者御國之商人彼地へ賣買ニ可罷越由蒙仰候、尤存候、併來年之御働之隔にハ罷成間敷候哉、過御分別間布候、先日萬事申含、和甚兵差下申候間、具不申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」「朱カキ押札二十一年不審トアリ」霜月十□日　駿河守　直友（花押）

奥州様　参尊報

272

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々來春ハ早々御上洛奉期候、萬々以面、御物語可申入候、以上、

尊書殊更南蠻ノ手巾ニ送被下候、見事さ驚目申候、如貴禮御下國之刻ハ、以參上御暇乞可申入と存候處ニ、早々之御下御殘多存候、其元何も御鞠御座候ハんと存事ニて候、來春ハ早々御上洛可被成候、以貴面萬々可申述候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」霜十一日　宗勝

嶋津少將様　貴報　難波

273

「又吉常久譜中」

慶長十一年丙午十一月廿七日、有犬追物張行之企、由是前日　太守賜縫物之籠手、依其事又賜自翰之書矣、

274

猶々けふハ稽古にて候ハん間、まち申候、先度之籠手之事、如何可有哉と申候つることに、玄左（ママ）なとも氣に入ましく候哉、さりなからこのたひは、先かの籠手にてもや可有と存候まゝ、音なしに候て被出候てよく候へく候、猶以面談可申候、かしこ、

「忠恒公也」（花押）（ヨメズ）

十一月十五日

又吉殿

275

「家久公御譜中」

命來春駿城之普請、侯伯之交名書記謄寫之、從寺澤正成投贈當家、就明年球國征伐之事、免除普請、依焉家久呈上賀章於惟新齋、

276

「正文在大河平才右衛門」

夜前從寺志州御注進之趣、來春駿府御普請衆へ寫被持候間、爲御披見進上申候、然者當國之儀者、琉球就仕置、御赦免之由候、先以目出度存候、依之御談合可入儀、可有御座候間、追々可得御意候、誠惶敬白、

「朱カキ」
「慶長十一年」十一月十九日　陸奥守　家久（花押）

維新様
参人ゝ御中

277

「本田助之丞藏書」

出水郡御檢地帳請取申事、

一竹本村之帳八札内三札ハ知行竿鯖淵竿帳籠
一知識村之帳十札此外しほ屋之帳壱札出水ニ有之
一鯖渕村之帳
一杉川内之帳壱札
一大川内之帳弐札
一高尾野村之帳六札
一野田村之帳九札
一長崎村帳七札
一西目村之帳六札此外塩屋帳壱札出水ニ有之但長嶋村之しほヤ相籠
一阿久弥村之帳九札
一同すミはる村之帳弐札
一同西目村之帳壱札此外塩屋帳壱札出水ニ有之、

右之分平松ニ而伊地知掃部兵衛方請取候て、阿久祢郡當所ニ而と瀬之浦肝煎所ニ而、野村善右衛門尉殿渡申候、

慶長十一年霜月廿三日

278

「家久公御譜中」

爲犬追物之道也、專行於鎌倉　右幕府、世雖爲勇敢智謀之士、不長弓馬不能焉、當家之曩祖忠久者以爲　右府孽子、故能習長此術、而子子孫孫傳以至于今、是以代代州主當継統之時、稱代始之犬張行犬追物、三日以爲吾島津家之舊例、家久襲封之後、未行是事、今茲仲冬自二十五日至二十七日以三日、爲式日而行之、射手組之記及可覽

悟教令之書記等列左方、

279

「御文庫廿一番箱犬追物一巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

犬追物手組之事 慶長十一年十一月廿五日

殿

本田弥六 二疋

嶋津摂津守 五疋

比志嶋宮内少輔 九疋

嶋津十郎 四疋

嶋津藤次郎 五疋

検見

嶋津上野入道

御代初犬追物日記

嶋津次郎 五疋

嶋津杢右衛門尉 四疋

嶋津勘解由次官 三疋

三原次郎四郎 三疋

相良新右衛門尉 三疋

嶋津助右衛門尉 四疋

喚次

嶋津喜左衛門尉

280

初日

犬追物手組之事 慶長十一年十一月廿五日

殿 廿七疋

本田弥六 二疋

喜入 嶋津摂津守 五疋

比志嶋宮内少輔 九疋

河上 嶋津十郎 四疋

豊州 嶋津藤次郎 五疋

検見

嶋津上野入道

北郷 嶋津次郎 五疋

吉利 嶋津杢右衛門尉 四疋

新納 嶋津勘解由次官 三疋

三原次郎四郎 三疋

相良新右衛門尉 三疋

伊集院 嶋津助右衛門尉 四疋

喚次

嶋津喜左衛門尉

281

「仝巻中」

（本文八二七九号記録ト同文ニノキ省略ス）

282

（本文八二八〇号記録ト同文ニノキ省略ス）

283

（本文八二八四号記録ト同文ニノキ省略ス）

284

二日之一番 犬追物手組之事 慶長十一年十一月廿六日

殿

十三十三十三十三十三十三十三十三　廿五疋

嶋津式部太輔　十一十一十一十一十　三疋

嶋津勝兵衛尉　十二十一十一十一　四疋

村田刑部少輔　十一十一十一十一　三疋

嶋津攝津守　十一十一十一十一　弐疋

検見

嶋津武藏守

嶋津六郎兵衛尉

「別紙ニアリ」
慶長十一年丙午十一月廿六日　筆者　長谷場越前守

家久様御代始犬追物手組之事

喚次

嶋津河内守　十一十一十一十一　弐疋

嶋津十郎左衛門尉　十一十一十一十一　一疋

本田弥六　十二十一十一十二　五疋

諏方甚六　十一十一十一十一　一疋

澁谷石見守　十一十一十一十一　三疋

285

二日之一番
犬追物手組之事　慶長十一年霜月廿六日

殿　廿五疋

嶋津式部太輔　河上　三疋

嶋津勝兵衛尉　町田　弐疋

村田刑部少輔　四疋

嶋津攝津守　喜入　二疋

検見

嶋津武藏守　河上

喚次

嶋津六郎兵衛尉　佐多

嶋津河内守　三疋

嶋津十郎左衛門尉　河上　二疋

本田弥六　上井　五疋

諏方甚六　入来院　二疋

澁谷石見守　弐疋

286

（本文八二八五号記録ト同文ニノキ省略ス）

287

二日之二番
犬追物手組之事　慶長十一年十一月廿六日

殿

十三十二十二十一十二十二　十三疋

嶋津河内守　十一十一十二十二　四疋

嶋津本右衛門尉　十一十一十一十一　四疋

伊勢平左衛門尉　十一十二十一十一　四疋

嶋津式部太輔　十一十一十二十一　五疋

嶋津攝津守　十二十一十二十二　五疋

嶋津左京進　十一十一十二十一　四疋

澁谷三四郎　十一十一十一十一　弐疋

鎌田玄蕃允　十一十一十一十一　弐疋

嶋津勝兵衛尉　十二十一十一十二　五疋

検見

嶋津武藏守

嶋津六郎兵衛尉

「別紙」
慶長十一年丙午十一月廿六日　筆者　長谷場越前守

家久様御代始犬追物手組之事

喚次

288

二月之二番
犬追物手組之事　慶長十一年霜月廿六日

殿　十三疋

嶋津河内守　吉利　五疋

嶋津本右衛門尉　四疋

伊勢平左衛門尉　河上　四疋

嶋津式部太輔　五疋

嶋津攝津守　喜入　五疋

嶋津左京進　白濱　四疋

澁谷三四郎　二疋

鎌田玄番允　町田　二疋

嶋津勝兵衛尉　五疋

検見　（川上）嶋津武藏守　　喚次　（佐多）嶋津六郎兵衛尉

289 （本文ハ二八八号記録ト同文ニノキ省略ス）

290 （本文ハ二八七号記録ト同文ニノキ省略ス）

291 ≣十≣十≣十≣十≣十　三日之一番

犬追物手組之事（慶長十一年十一月廿七日）

十一十二十一十二十　六疋　嶋津又吉
十十一十十十　一疋　嶋津次郎
十二十一十一十二十一　七疋　嶋津攝津守
十一十一十十一十一　四疋　嶋津河内守
十十十十十一　一疋　嶋津十郎
十一十十十十　一疋　嶋津左京亮
十一十二十一十一十一　六疋　三原次郎四郎
十一十十一十十二　四疋　本田弥六
十一十二十十十　三疋　嶋津又太郎
十一十十一十一十　三疋　比志嶋宮内少輔

検見　　喚次

殿　　嶋津雅樂助

「別紙」

慶長十一年丙午十一月廿六日　筆者　長谷場越前守

家久様御代始犬追物手組之叓

292 三日之一番

犬追物手組之事（慶長十一年十一月廿七日）

嶋津又吉　六疋　（北郷）嶋津次郎　一疋
（喜入）嶋津攝津守　七疋　嶋津河内守　四疋
（川上）嶋津十郎　一疋　（河上）嶋津左京亮　一疋
三原次郎四郎　六疋　本田弥六　四疋
（佐多）嶋津又太郎　三疋　比志嶋宮内少輔　六疋

検見　　喚次

殿　　嶋津雅樂助

293 （本文ハ二九二号記録ト同文ニノキ省略ス）

294 （本文ハ二九一号記録ト同文ニツキ省略ス）

295 三日之二番

犬追物手組之事（慶長十一年十一月廿七日）

嶋津河内守　（吉利）嶋津杢右衛門尉
（河上）嶋津式部太輔　（北郷）嶋津掃部助
（新納）嶋津勘解由次官　（別府）二禮舍人佐
平田新三郎　伊勢平左衛門尉
（新納）嶋津近江守　（河上）嶋津十郎

検見　　喚次

殿　　（河上）嶋津雅樂助

296
☰十☰十☰十☰十☰十　三日之二番
犬追物手組之事 慶長十一年十一月廿七日
｜一｜二｜｜二　五疋　｜一｜三｜｜一　五疋
嶋津河内守　嶋津杢右衛門尉
｜一｜二｜｜　三疋　｜｜｜一　一疋
嶋津式部太輔　嶋津掃部助
｜｜｜一｜一疋　｜一｜一｜一｜　三疋
嶋津勘解由次官　二禮舎人佐
｜｜一｜一　二疋　｜一｜三｜二　六疋
平田新三郎　伊勢平左衛門尉
｜一｜一｜｜　二疋　｜一｜一｜｜一　三疋
嶋津近江守　嶋津十郎
検見　喚次
殿　嶋津雅樂助

297
（本文ハ二九六号記録ト同文ニノキ省略ス）

298
三日之弐番
犬追物手組之事 慶長十一年十一月廿七日
嶋津河内守　五疋　吉利 嶋津杢右衛門尉　五疋
河上 嶋津式部太輔　三疋　北郷 嶋津掃部助　一疋
新納 嶋津勘解由次官　一疋　別府 二禮舎人佐　三疋
平田新三郎　二疋　伊勢平左衛門尉　六疋
新納 嶋津近江守　二疋　川上 嶋津十郎　三疋
検見　喚次
殿　川上 嶋津雅樂助

299
犬奉行之事
嶋津上野入道
弟子丸右京進
本田与兵衛尉
慶長十一年十一月廿七日
筆者　伊集院源左衛門尉

家久様御代初犬追物手組之事

300
『伊地知權左衛門家藏』
慶長十一年十一月廿五日ゟ廿七日迄
一御馬鴾毛　市來野
御鞍・鐙梨地、金具金輻輪、執文紅之大総
小服、帯紫
一御馬同　御鞍・鐙御文、同杉之高蒔繪有、紫大総、
一御馬星栗毛　由原野
御検見
御劍　高崎弥六
御腰物　市來小四郎

御沓　伊地知勝八郎
御鞭鞢　『後勘解由左衛門重信』西川勝吉
御弓蟇目　伊集院孫七「弥ノ誤歟」
御行騰　本田隼人佐
同　本田新介
御馬　川上五次右衛門
同　國分五右衛門

一上様御支度川上日向守上申候、於御前ニ相傳、御籠手、行騰之緒にならひ有、但口傳、

「家久公御譜中」
「正文在文庫」

就御犬追物可心懸條々

一馬之立替様無油断可被見合事、
一序破急之心持、油断有間敷事、
一縄際にて能矢射たる所を立替、可被見合事、
一弓鏑平如習持様油断有ましき事、
一弓かまへうちあけ相揃候様ニ、可被入精事、
一縄際にて　御曹子様可被遊犬、遠慮可入事、
一外の犬馬數五騎ツ、たるへき事、
一外ニ逢候衆、縄際爲殘衆、間可被見合事、
一上様外ニ被成　御逢候時遠慮之事、
一外にて人の逢取候犬、奪ましき事、
一検見犬捨よと被仰候時、無延引可打歸事、
一検見あひの馬よと被仰候時、其心得あるへき事、
一検見大鏑平よ、小鏑平よ、たかの羽よ、本白よ、内の矢よ、中之矢よ、外の矢よ、縄近よ、込近よ、赤糸はきよ、青糸はきよ、なとあらは、我矢のしるしをよく見分候と、可答事、
一そろひあかり、みたれあかり之事、
一矢答之調子、検見之調子、相請可答事、
一検見うちさはき之時、早々見合可致下馬事、
一三年の御犬追物之時外ニ逢候間、　御曹子様御馬御立所へ可被入念事、
一鏑平闇出やう油断あるましき事、
一於　御棧敷日記見積之事、
一くわ(金)の物請取渡之事、
一馬之かへし様、無相違やうに可被心懸事、
一外ニ逢候時、仕合遅無之様可被心懸事、
一検見ちかひ之時之事、

以上

「朱カキ」「慶長十一年」霜月廿八日

「朱カキ」「包紙」家久様御代論之犬有之時之御法度書

302

「家久公御譜中」

於今般犬追物之式日、北郷次郎忠能進退之禮以當時中、故佳例能齋、家久深感其志、以感牘賞之、

303

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

今度就犬追物、佐多又太郎・新納近江守互之申分共候而、既及當日兩人共ニ相迦、手組之刻其方之働故、二之角之手組を被退、以分別三之角ニ被立候事、神妙之至、深感入候、勿論於自今以後者、可爲如先例者也、仍如件、

慶長十一年
十一月晦日　　家久（花押）

北郷次郎殿

「上包」「忠能譜中ニアリ」北郷次郎殿　　家久

304

「北郷忠能譜中」

慶長十一年丙午　太守公張行犬追物、佐多又太郎・新納近江守以手組之不合我心有訴、忠能辭讓以和之、故賜御感狀、有正文左記之、

今度就犬追物云々「以下前ニアリ略」

305

「左衞門督歳久譜中」

慶長十一年丙午十一月日、建石塔也、

「前ニ慶長四年三月、一寺ヲ建立シ、心岳寺ト称スル云々アリ」

法印龍伯公、惟新公渡御于心岳寺、此時有高詠曰、

306

「正文在平松心岳寺」

岩木までかけふる寺を來て見れは
ゆきの三山そおもひやらるゝ　龍伯

同
夕浪に月と雪とをまちとらは
いつくはありと磯の山寺　惟新

同
御仏をたのむものゆへ袖にちる
あられの玉を手向にやせん　玄与

同
はらへともこほれぬ庭の雪さえて
松の葉しろき月のした風　久正

「此外扈從士之詠共有十有三首」

307

「家久公御譜中」

忠恒今茲暮雖欲如江府迎新年、　家光公降　懇命曰、當季冬風波時節渡遠海、就長途不可易、姑在國須迎歳、於是使比志島宮内少輔國隆遣于武都、依本多正純・土井大炊助利勝奉謝　命忝、正純達　上聞、則又有　命曰、於忠恒無疎意與　家康公時、其豈異乎、仲季兩春之間、考風波安穩之節氣催旅行、四年中宜參江府、正純・利勝承旨裁奉書附國隆、委見書、

亦此表相應之御用御座候者、可被仰付候、不可存疎略候、委曲者比志嶋宮内少輔殿可被仰上候間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」
十二月六日　　本多上野介正純（花押）
土井大炊助利勝（花押）

嶋津陸奥守様
人々御中

308

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書致啓上候、仍内々當暮爲御越年、此地御下可被成与思召候處、其許緩々与御在國可被成旨被仰出、御珎重思召候由存其旨候、就其爲御礼、以比志嶋宮内少輔被仰上候通、何茂懇申上候処、　大御所様御時ニ不相替、弥御如在不被爲思召之旨被成御意、不大形御懇之儀共御座候、然者其許遠路海陸与申、殊二三月迄ハ風時御座候間、來春も緩々与其地ニ御座候而、四月中ニ江戸迄御下着候之様ニと被仰出、　御前殘所無御座御仕合御座候間、御珎重可思召候、猶此方之儀、何様共御無沙汰不奉存候、將

309

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以御懇之貴札、忝致拜見候、何も來春以面御吉事可申入候、以上、

遠路爲御見廻預御使札、殊鹿之毛皮弐百枚被掛御意、御懇志之至忝存候、年内者余月無御座候間、來春者從是御礼旁可得貴意候、隨而其表弥御息災之由、目出度存候、次ニ上方今程御靜謐ニ御座候、將亦頃江戸ゟ到來御座候間、御兩　御所様弥御息災ニ御機嫌能由申來候、當　將軍様來年御上洛之御沙汰ハ、何共不承候、大御所様御隠居所、駿河之府中ニ、來年二月朔日ゟ御普請被仰付候、當年江戸へ不被參衆中、來年駿河へ御普請ニ被參候、貴

殿御事當年過分ニ御石舟御拵候故、來年之御普請之御書立ニハ無御座候、弥御到來候者、不寄何時、以飛札可申入候、此筋相應之御用無之、隔心可承候、兼而可申入与龍伯・兵庫頭殿弥御息災之由、是又目出度存候、委細者御使者口上を頼入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十一年」　十二月十五日　羽左衛門太夫
「羽柴ナラン」　正則（花押）
□御報

310

「大口士大田良右衛門家藏」

坪付

篠原千束町一反八畦廿分之内

上田九畦拾歩　壱石四升　納右衛門

「外數行略」

合田畠壱町弐段拾九歩　分米

高拾弐石六斗九合六夕壱才

内九石四斗九合六夕一才　永代買

慶長十一年
十二月廿二日　新納武藏入道判

大田市兵衛尉殿

311

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

（本文書ハ二四五号文書ト同文ニソヲ省略ス）

312

『真本蒲池伸藏家藏』

（花押）

其津南蛮船糸之儀付、京大坂之衆召列下向候處、余少分之割付候間相残而、南蛮人手前在之糸之分、皆〻彼衆へ賣候様に談合尤候、直成之儀者、何也商人ニ渡候も可爲同前之儀候条、定而南蛮人分別も別儀者在之ましき事候、爲兩人不可有油断候也、

慶長十一年
十二月廿四日　家久

本田六右衛門尉とのへ

蒲池休右衛門尉とのへ

313

「御文庫三番箱巻二中」

立願文

清水千手觀音可奉讀誦普門品一万巻事、

右意趣者、奉爲國家安全　武運長久　子孫繁榮　息災安

穏諸人快楽故也、仍大願如件、

慶長十一年十二月廿六日　龍伯（花押）

「得能氏記録」

慶長十一年丙午

二月八日、　家康公伊達政宗カ家ニ渡御、政宗ニ御腰物、長光、其子忠宗ニ御腰物大原真守、ヲ賜ヒ、其上政宗ニ常州龍ケ崎ノ地ヲ賜フ、

江戸城經営事、

三月朔日、江戸ノ御城經営ノ事始メナリ、藤堂和泉守高虎縄張ニテ、諸國ノ人夫ヲ以テ築セ玉フ、

四月七日、　家康公去月十五日江戸ノ城御首途有テ、今日伏見城ニ著玉フ、同二十二日、或ハ二十八日、御參　内、即日伏見ヘ還御シ玉フ、

五月十四日、榊原式部太輔康政上州館林城ニ於テ卒去、年五十五ナリ、

家康公賜御諱字於島津忠恒事、

六月十七日、島津陸奥守忠恒ハ參覲ノタメ江府ニ赴ントテ、去ル二月上旬鹿兒嶋ヲ発シ、同三月下旬城州伏見ニ到ル、然ルニ山口直友此地ニ在テ　家康公・秀忠公近日御上洛ナレバ、忠恒モ伏見ニ在テ　兩公ヲ待奉テ可然ト云、依テ忠恒伏見ニ在テ御上洛ヲ待奉リケルニ、同四月七日、　家康公伏見城ニ御著ナリシカバ、同十九日、忠恒伏見城ニ登テ　公ニ謁シ奉ル、同二十二日、　家康公御參　内ナサレケル時モ忠恒供奉ニ列セラレケルガ、今日又忠恒ヲ伏見城ニ徴テ、御諱ノ字且御腰物大泰長光、・御馬一匹ヲ賜ハリケリ、忠恒珍戴シテ奉謝之、即チ諱ヲ家久ト改タリ、

家康公參　内、付義利頼將叙任事、

八月十一日、　家康公去月二十七日伏見ヨリ洛陽二条ノ城ニ入セ玉ヒ、今日御參　内ナサレケル時ニ、義利後ニ義直ト改ム、從四位下ニ叙シ、右兵衛督ニ任シ、頼將後ニ頼宣ト改ム、從四位下ニ叙シ、常陸介ニ任セラル、同二十七日、伏見城ニ還御ナリ、

九月二十三日、江戸ノ本城御普請成就ス、仍テ　秀忠公今日御移徙ナリ、諸大名群參シテ奉賀之、

十一月四日、　家康公去ル九月二十一日、伏見城ヲ御首途有テ、十月六日、駿府ニ入御シ玉ヒ、今日江戸ノ城ヘ還御ナリ、

同月　家康公常州下妻三万石ヲ鶴松丸頼房ニ賜フ、

是年　家康公諸國ノ大名ニ被仰付、　禁裏ノ四面ヲ石ニテ壘マシメ玉フ、結城秀康卿コレヲ司ル、

（本文ハ底本ニ欠ク、鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ）

（表紙）

義久公
義弘公　慶長十二年
家久公

後編　舊記雜錄　巻六十一

315

「本田助之丞藏書」

◎慶十二正月三日

関東御供衆盛之事

一壱人一日ニ　木賃六文五字
一壱人一日ニ　飯米一升代一分五リひたニメ十二文五字
一壱人一日ニ　故実野菜十文
一壱人一日ニ　わらち三足十二文
合銀子五分但錢ニメ四十一文
一馬一疋一日ニ　木賃十二文
一同　一日ニ　大豆三升代三分七リ五毛、此銀ひたニメ
一同　一日ニ　ぬか一斗・わら十把代四十文
一同　一日ニ　くつ五そく代廿文
合壱匁二分四リ但錢ニメ百三文三字
右之算用ニメ
一壱人卅日之上下ニ銀子十五匁入
一乗馬壱疋卅日之上下ニ同卅七匁二分入
一小荷駄卅日之上下ニ同八十六匁入
卯月廿七日　○「印」

316

「全年間ナシ」

覚

高四百廿五石弐斗一升六合　ゆた村
高百廿六石七斗四升弐合　西かた村
高九拾壱石弐斗六升弐合　しるし村
高佰十五石六斗弐升八合　大川村
高九十五石弐斗五升九合　牛ノ濱村
合八百五十八石壱斗七合
高三百石　西目四ケ村

317

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

爲新年之慶事、如旧例佳書并五明二本到來、珎重候、嘉祥倍可申加候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」正月十一日　　家久（花押）

謹上　北郷次郎殿

318

「忠元譜中」

慶長十二年丁未、忠元朝廳府、二月四日丁酉、將召安滿加元服、改稱次郎四郎名曰忠清、時年十三矣、

319

「正文在大口士丸田久右衞門」

追而□也、見事之調□一段滿足仕候、乍去造作無然々　是も相調候樣ニ談合ニて候、又申候、火用心馬能飼せ候て可然候、已上、

安滿元服之事、來月四日ひのとのとり□取仕候、打立日者、廿九日行吉候、其心得候て肝要ニ候、肥後仲右衞門尉殿・曽木將右衞門尉殿、此等之旨被申候ハヽ、可□出銀之事、今月廿日限被仰出候、子細ハ七分相定候段、此方□候、越□石分之銀子弐貫目□取替可申人有之候、巨細者肥後□（仲右衞門カ）殿御存ニて候、談合被申、先壱貫目程□付候て可然候、乍去此方へも銀子尋させ候之間、何方欤増候する方相定專一候、次者先日打立之砌、内方定□くさなとのやうに被仰候つる、いかゝ候哉、承度候、□可申候へ共取紛候之間如此候、可被申上候、恐々謹言、

「十二年カ」正月十五日　　拙齋判

「スルヽ」

320

「家久公御譜中」

慶長十二年二月朔日、家久之母堂逝去、（法號實窓芳眞大姉）、家久哀傷之餘、三日断水穀、

321

「義久公御譜中」

「案文有之」

（本文書ハ一六六号文書ト同文ニノキ省略ス）

322

「義久公御譜中」

「御文書方ニ有之」

かの實窓正眞大師、こゝちれいならす、病床にふし日數

をふるほとにいれうをもとめ、有驗の僧をたつね、いのりかちしさま〳〵成しに、常ならさるならひ、のかれかたく、世をはやうせしをかなしひ、人〻歌たてまつるにもよほされ、一首をつらね霊前に手向るものならし、

御佛の跡したひてやさかりなる
はなもちり行二月のそら

慶長十二年二月十五日

323

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以鉄砲之儀、山口駿河方迄申候處ニ、被入御念候て被仰付之旨、誠以忝候、何様ニも賴存候、委御使者へ令申候、以上、

御使札殊段子五巻并染付茶椀・同皿兩色三百、被懸御意候、誠以遠路と申、御心入之段別而忝候、去年御歸國之後不申通、所存之外候、手前打續所労ニ取紛候て、不任心底罷過候、去年中ニも國本へ罷下度存候へ共、病中ニ寒國へ罷下儀如何敷候間、上方ニ在之而、緩〻と養生候様ニと大御所被申候故、于今伏見令逗留候、漸此比ハ快氣之躰候条、近〻歸國可申と存事候、委曲期後音之時候、恐〻謹言、

越中納言
秀康○「墨印」

「朱カキ」「慶長十二年」二月廿一日

羽柴陸奥守殿
御返報

324

「御文庫四拾九番箱二巻中」「義久公御譜中「本マヽ」正文有之トアリ」

其已來御無音罷過候、誠非本意奉存候、然者折〻忝蒙上意候、弥以恐悦不少候、今一度遂上洛、御礼雖申上度候、中〻不叶心意爲躰候之間、同名攝津介差上候、委曲者彼者申含候、仍御太刀一腰・御馬一疋并雖不珎候段子五拾端致進上之候、旁宜預御披露候、恐〻謹言、

龍伯(花押)

「朱カキ」「慶長十二年」二月廿六日

本多上野「本マヽ」守殿

「上包」
本多上野守殿

龍伯

「上包裏ニ有之」
嶋津修理入道

325

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御狀令拜見候、仍御母儀様御遠行候由、扨〻沙汰之限御朦氣之段、無是非次第共御座候、將亦大御所様御上洛之

儀、いまた何共御沙汰無御座候、若御上洛近々之様ニ御座候者自是可申入候条、御心安可被思召候、委細伊兵少まて申入候間早々申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」三月二日　　山口駿河守直友(花押)

奥州様参御報

326

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲年頭之祝儀、太刀一腰・馬一疋并段子弐拾端到來、遠境懇慮之至令祝着候、猶片桐市正(且元)可申候、謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」三月十二日　　○(秀頼墨印)

羽柴陸奥守殿

327

「家久公御譜中」

片桐主膳正貞隆贈同年三月十六日之書於家久、告清須下野守忠吉去六日(一説五日)、於江戸逝去、委備于書、

328

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

態申入候、清須之下野守殿(忠吉)去六日、於江戸御遠行之事候、扨々不慮之儀候、此邊へ相聞候而今日爲御弔薄田隼人正被遣、市正・我等も使者を相越申候、其許より御使可被相越候哉、將又　大御所様去四五日之比、小田原迄被成御座由申來候、此比駿河へ可有御座様ニ各被申越候、乍去御着之御沙汰者不相聞候、次大坂・伏見・京相替義も無御座候、此地相應ニ御用候者可被仰聞候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」三月十六日　　片主膳正貞隆(花押)

嶋奥州様人々御中

329

「古御文書御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

昨日、道与方より就幸便之旨、以書狀申入候へ共此御使者御下之事候間令申候、清須下野守殿去六日、於江戸御遠行之儀候、御吊も則江戸ニ而有之通候、御隣國被聞召合候て、御使なと被差下可然候ハん哉、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」三月十七日　　片主膳正貞隆(花押)

羽奥州様人々御中

『在官庫』

330

能可致見物之由、先日約束申候へ共、當時者長坐難成躰
「吉野御馬追」
「福山牧」
候、其上當所之馬追前ニて候間、旁以見物成ましく候、
此旨爲可申談如斯候、將又其元御馬追ニ付、自當地馬乘
「吉野」
「國分」
五六人申付候、是又爲御心得候、恐々謹言、
猶以福山之馬追其方御二所なから、御見物候ハてハ
と申候へ共、御斟酌之様きこえ候、然共是非御覧候
へかしと存事ニ候、又能見物候ハぬ事残多候へ共無
了簡仕合候、
「慶十二年也」
三月廿六日　　龍伯(花押)
又八郎殿

331

「新納忠元勲功記」

▽一慶長八卯夏之頃ニ候哉、從　琴月様別府舎人助頼景御
使を以、御惟子忠元江拜領被仰付、別而難有奉存、則
頼景江取次和歌一首差上、御禮爲申上由、
おほけなき君か御くしの香にふれてしはし我か身を
たとる也
右御覧被爲在、頓て高崎伊豆守能乗一説御使寺山善四郎とも、御返歌
被成下、于今御筆短冊有之、

忠恒

おほけなき身とも思わしから衣きつゝもなれよいく
とせまても
一同年十月、一説六月、琴月様當春御和談等被爲濟、御下向以
後初而帖佐江御越、　松齢様御饗應、諸士出物四石ニ付三文ツ、其後同
下旬比ニも候哉、忠元地頭所大口ニも御光儀被爲在、
誠ニ是迄者前文之通、御國も内外騒乱被爲打續候処、
御静謐ニ而如此御事忠元ニも千秋万歳目出度奉待上、
然共肴迚も無之不如意之在所ニ而、御膳部旁前廣より
別衆配仕、御包丁役石原佐渡守家継其比小作、竹内右馬入道
自休なと幸御供ニ被召列候段承及、段々爲頼遣狀共有
之、左候而大口御城江被爲入候節、忠元何かし進上仕
度被奉存、先年於天堂ヶ尾　太閤秀吉公江初而御目見
仕候砌拜領仕候長刀一柄ニ和歌一首相添進上爲仕由、
君にゆつり奉りけん山賊の身ハ數ならん千代の齢を
爲舟
一本　君にゆつり奉りけん數ならん身ハ仙人の千代の齢を
右御覧被遊、山賊のと申を武士のと一本數ならぬと申を武士とも、御点削
爲被成下由、其節外孫伊勢兵部少輔貞昌等御供仕、孫
聟新納近江守忠在嶋津下野守久元事、等も召呼、御機嫌克御立爲

被遊由、忠元七拾八歳之時ニ御座候、△
慶長十二年未閏四月、唐津城主寺沢志广守正成國分江御
見廻、　貫明様御饗應被遊ニ付、忠元儀も可参上旨蒙
御意、卽参上仕候処、御同席被召出、段〻御叮嚀爲被仰
付由、且御馳走として御馬追共有之、外孫伊勢貞昌抔罷
登晴成出立にて、其比忠元立置候廻野の馬大月毛を、貞
昌依望借し遣し候よし、且忠元江今年之取駒拜領爲被仰
付由御座候、　（▽△部分ハ鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ）

332

「家久公御譜中」

家久信仰大元明王之法殊勝、故從理性院觀助和尚、願御
堂再興之事、且贈投祈禱之符文並錫鉢、因報謝如左、

333

「御文庫廿三番箱家久公十六巻中」「家久公御譜中ニ在リ　御案文也」

其以來不申通罷過、無沙汰候處預御使書忝候、就中御祈
禱之御札并錫鉢＋被懸御意、遠來御芳志難申盡候、仍泰
元御堂再興之儀急度可申付候間、可御心易候、猶從是可
申入候条不能詳候、恐惶謹言、
「朱カキ」
「慶長十二年」三月廿七日
理性院
御報

「末紙ニ」
右之御狀可被相認候、

334

「大口新納氏藏」

加増
坪付

原田村中せまち二反之内
下田壱段　壱石　　園田喜左衞門先　筑右衞門
里村から田
下田四畦拾分　四斗三升三合三夕三才　同先　五郎右衞門
柳井瀬ほき山
下田弐段　壱石六斗　西田ノ　六郎右衞門
山野村くつかけた
中田壱反十六分　但二反二畦廿四分之内　壱石四斗八升六合　園田喜左衞門先　三郎右衞門
原田村とひた
中畠六畦五分　四斗九升三合　濱田爲兵衞尉先　助八
金はたつる
下田八畦　四斗八升　園田喜左衞門先　甚右衞門

合田畠五段九畦壱歩
分米五石四斗九升二合三夕三才

慶長拾二年
卯月朔日　武藏入道
爲舟（花押）
新納利兵衞尉殿

335

「正文在大口士湯田氏」

加増坪付

山野村すゝれ名
中田壱段六歩　壱石四斗弐升八合　濱田將兵衞先　大藏

「外數行略」

田畠參段弐畝十八歩

分米三石壱斗五升六合

慶長十二年　卯月朔日　新納武藏入道　爲舟判

湯田新右衞門尉殿

336

「仝湯田氏家藏」

「口切レテナシ」

合田畠壱町五段八歩

分米拾五石壱斗七升五合六夕六才

慶長十二年　卯月十四日　新納武藏入道　爲舟判

湯田新右衞門尉殿

337

「正文大口土上村氏家藏」

□付

木崎村之内かた牧之門

下田三段二畝廿四歩　二石六斗三升七合　加右衞門尉

中道

下田四段九畝六歩　三石九斗三升五合九夕六才　對馬

「外數行略」

田畠屋敷

合三町四段壱畝廿七歩

分米三拾三石壱斗

慶長十二年　卯月十四日　新納武藏入道　爲舟判

上村千代松殿

338

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様へ御年頭之御祝儀被仰上候、懇ニ致披露候処、

一段御仕合共御座候条、御心易可思召候、則　御内書相

調進之候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」卯月十八日　本田上野介正純（花押）

羽柴陸奥守殿

339

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲改年祝儀、太刀一腰・馬一疋・金子一枚并段子五巻・

しゆちん五巻到來、喜悦候也、

「朱カキ」「慶長十二年」卯月十八日　◯「墨印」

薩广少將とのへ

340

「正文在文庫」

爲陽春嘉儀、太刀一腰・馬一疋并段子拾巻到來、欣然至候、委曲本多佐渡守可述候也、

「朱カキ」「慶長十二年」四月廿日　（秀忠）（花押）

薩摩少將殿

341

『在本田氏』「写」

覚

主從十二人壱騎仕立　上洛之盛

一銭五十弐貫六百卅二文　本田助之丞殿

一銭五貫八百八十文　船中上下付　一ヶ月之木賃故実夫銭

同　但伏見まで　一ヶ月之宿賃也、

関東往還付

「朱ニテ」「六月十二日ゟ八月十五日迄、伏見ゟ関東へ往還日數六十三日之内、三十日者御盛被下候、残三十三日者いまた御盛被下す候」

一銭五拾壱貫四百八十文　一ヶ月之木賃宿賃飯米故実

わら地夫銭

一銀子百匁者　乘馬代

「朱ニテ八百五十文」

一銭八貫五百弐拾文　乘馬一疋一ヶ月之糟藁

大豆厩賃沓之代

一銭廿貫文　小荷駄一ッ雇賃

合百三拾八貫五百十二文

銀子ニメ五百九十五匁六分一毛

馬銀籠ル

合銀子六百九十五匁六分一毛

右之分其元七分出銀之内を以可被相渡候、以上、

慶長十二年四月廿四日　本田新介判

市來八左衛門尉判

「平松ニて」出物請取衆中　まいる

342

覚

一米三石六斗、本田助丞殿主從十二人にて上洛被成候、

二ヶ月之爲飯米、其元出米之内を以可被相渡候、但関東往還之一ヶ月分飯米盛ニ篭也、

慶長十二年四月廿四日　本田新介判

市來八左衛門判

平松出米請取衆中　參

343

「正文在本田助之丞」

覚

主從十二人壱騎仕立　上洛之盛

本田助允殿

一銀弐百廿六匁三分一リ七毛　二ヶ月之木賃故実夫銭
伏見まて
一銀廿五匁二分八リ四毛　一ヶ月之宿賃也、
関東往還分
一銀弐百廿壱匁三分六リ四毛　一ヶ月ノ木賃・宿賃・
飯米故実わら地夫銭
一銀百目者　乗馬之代
一銀卅六匁六分三リ六毛　乗馬一疋一ヶ月之糟藁
大豆厩賃沓之代
一銀八十六匁者　小荷駄一ッ雇賃
合銀子六百九十五匁六分一毛
慶長十二年四月廿四日

344
「御文庫拾七番箱拾六巻中」
敬白　起請文之事
弓稽古之儀、内々懇望至極候処、今度可被成御相傳之由、扨々忝奉存候、被仰聞候秘事之儀共、努々他言申ましく候、若此旨偽於申上者、
▽奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣者日六十余州大小神祇冥道、別者薩州鎮守新田八幡大菩薩並開聞正一位　大隅正八幡宮　霧嶋　白鳥両大權現　日向妻万五社大明神、殊者當所諏方大明神　稲荷　戸柱　若宮　春日大明神　愛宕山大權現並大天狗　小天狗　天満大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰可罷蒙身上者也、仍起請如件、△
慶長十二年卯月廿六日　國分平藏友次（花押）
別府舎人佑殿

345
「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」
尾州薩摩守殿御他界ニ付而、御使者被差越候、則本多佐渡守申談達　上聞候処、遠境之所被入念旨、拙者共より相心得可申由被　仰出候、委曲彼可在口上候条、不能具候、恐々謹言、
「朱カキ」
「慶長十二年」壬　四月十七日　大久保相模守忠隣（花押）
羽柴陸奥守殿　御報

346
「家久公御譜中」
就忠吉逝去、家久遣使者姓名不傳於駿府、奉慰問　両御所、備

見本多正純之同年閏四月二十二日返簡、朝鮮國使者赴江府日、　家康公今茲不上洛等事亦言之、

347

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶〻定式御座候へ共御燒物聚一并扇子一箱數廿本致進覧之候、聊御報驗迄御座候、以上、

尊札致拜見候、仍薩摩守殿去比御遠行被成候付而、以使者被仰上候、御紙面之通具致披露候處ニ、遠路被入御念旨ニ御座候、次ニ江戸へ使者御通候之条、大相州・本佐州方へ拙者書狀相添進之候、然者右兩人衆被達　上聞候処ニ、一段与御懇之由ニ御座候、何も於様子者御心易可思召候、將亦　大御所様去三月十一日ニ駿府へ被成御着座、爰許相替儀無御座、御普請半之御事ニ御座候、随而朝鮮勅使去十七日ニ此地直被罷通、　將軍様へ爲御礼江戸へ被罷下候、　大御所様一段御機嫌共御座候、然而當年者伏見へ御上洛者無御座候、此方相應之御用等御座候者、何にても無御心置可被仰下候、聊不可存疎意、委細者御使者可被申上候之条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」壬　四月廿二日　　本多上野介正純（花押）

羽柴陸奥守様　尊報

348

「三俣院記」

「在正文祝子齊藤氏」

木裏木山神

立願文

一四目二本被立神舞之叟

一七湊之塩井之叟

一御宮作之事

一知行五石御寄進之叟

右立願、巣鷹於有之者、早速可有成就者也、仍願文如件、

慶長十二年閏四月廿四日　　惟新

349

「在地理拾遺集」

一求摩堺山之神・祭神・大山祇命・猿田彦命、八重尾某、

一當社勸請之年月不詳、

一義弘公御尊崇有之、御祈願狀被籠置候、

御立願文

四目二本被立神舞之叀　七湊塩井之叀
御宮作之叀　知行五斛御寄進之事
右立願、巣鷹於有之者、早速可有成就者也、仍願文
如件、
慶長十二年閏四月廿四日　惟新
「右同日之御同案、小林木裏木山神ニ茂有之、略シテ不載、但祝子齊藤某家藏也、」

350
『雑抄』
薩州阿多新山村之内知行目録
御祓田之門
高合六拾石壱斗七升「二ノ誤ならん」
慶長十三「十二年ニ閏月アリ」
閏四月廿八日
伊勢平左衛門判「慶長十二丁未十一月八日死、三十九」
川上四郎兵衛判
蒔繪屋
彦七殿

351
「在忠元譜中」
猶〻平吉參候へかし、あまり無人衆ニ候、寺澤殿參
會候するまゝ如此候、与七兵衛尉もまいり候へと可
被申付候、万忝御意申難盡候、此等之趣内〻御心得
有へく候、
急度令啓入候、仍今度寺澤殿御會尺、「福山カ」御馬追兵部少輔
殿はれたるへく候間、某かめくり野〻大月毛御借被成
候、湯あらい召させられ、尾髪なとも園田狩野介殿憑
入通申度候、さし手ハ大藏兵衛尉、又中間老人相添、
兩人にてさゝせ肝要候、少もをそく候てハ不可然候、
道中なといかにもさつ(ママ)し候て引候やうにと申度候、
一御馬今年之取駒「吉野牧」結構馬被下候、外聞不過之候、
一御客之御會尺付而從國分可參由、　龍伯様御意ニ候之
間、直ニ祗候申候、謹言、
壬四月廿九日　爲舟(花押)
岩城吉左衛門尉殿　「國分ヨリ大ロヘカ」

352
「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」
以上
大御所様爲端午之御祝儀、御帷子拾内御單物綾二染物二
亀屋嶋二のしめ二御進上被成候、致披露候之処ニ御仕合
共御座候条、御心安可思召候、　御内書之儀者重而相調

可進候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」五月一日　　本多上野介
　　正純（花押）

嶋津陸奥守殿

353

「家久公御譜中」
「正文在文庫」

爲端午嘉義、單物十到來、嘉覚候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」五月朔日　（秀忠）（花押）

薩摩少將殿

354

『在伊勢氏』

好便之条企一書候、仍陸奥守殿御事、卯月十八日京都被成御打立、江戸江御下り之由相聞、先以目出度存事ニ候、定而　公方様御前之御仕合も弥可爲召儘与「思ノ字落歟」事候、誠今度も役人者貴所壱人ニて公儀内儀共可爲辛勞与察存候、乍不申御供衆下々ニ至迄涯分無猥様堅被申付御奉公仕事専一存候、將又御目見得相濟、御暇さへ御給候ハヽ、早々被成御下向候て可然存候間、内々其段可被申上候、供衆江戸之御吉左右彼是追々承度候条、注進待居申候、然者藤本彦右衞門事、前々ゟ對當家別而無疎意人ニ而候、殊更関ヶ原時分茂當國之衆種々念比申たる由傳承、無比類存候、其故者此跡陸奥守殿御上洛之時、既御家景之衆さへも心底皆々相替候間、誠彼彦右衞門儀身上ニ替奇特成分別与存事ニ候、彼彦右衞門事、陸奥守殿者無御存知儀も候する間、連々仕合を以そと内證可被申上候、蒔繪御用之時者前々ニ不相変、彼彦右衞門ニ被仰付度存事ニ候、左候ハヽ、其身茂忝存候而御細工等も弥入念可申与存候、旁久御懇申たる儀、于今無間違様被相添心候半ハと存事候、猶期後便不具、恐々謹言、

「慶長十二年比カ」五月十三日　　惟新御花押

伊勢兵部少輔（貞昌）殿

355

『在曾於郡念佛寺』

隅州桑原郡之内寺領目録

一高弐拾石　見次村之内一ヶ皮籠屋敷

但名寄帳有、

慶長十二年五月十七日　　平田久兵衞尉

356

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲端午之祝儀、帷子十到來、喜悦候也、

「朱カキ」「慶長十二年」五月廿三日 ◯「墨印」

薩摩少將とのへ

宗親判

喜入大炊助 久正判

山田越前入道 理安判

357

「古御文書十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

一書令啓上候、仍江戸御下向之儀、大御所様被任御

諚御延引之段、御使者被差下候、本多佐渡守致披露候処

被成御内書候、隨而自分へ段子五巻被懸御意候、遠境

忝奉存候、委細御使□(者)可有演説候間、不能審候、恐惶謹

言、

五月廿五日 大久保相模守 忠隣(花押)

嶋津陸奥守殿 人々御中

358

「古御文書(以下二十三通一巻)十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以申兼候へ共、御國之茶入よきなりを五ツ可被下

候、去年のハみなとられ申候間扨申入候、以上、

御懇之貴札、殊銀子弐拾枚并淺黄紋紗之御紋屋壱帖・同

釣手并薫袋拾六、何も被入御念被懸御意候段、中々書中

不得申候、

一此表へ可被成御見廻旨ニ候間、内々相待申候処、從

大御所様御無用之由、堅御諚ニ付而被成御延候旨、併

迚も思召立、其上時分柄も能御座候ニ、此度御下向無

之義、兼而被立御耳候儀、御分別違と存事ニ候、迚

も一度ニ被成御見廻候ハてハ不叶御事ニ候間、御氣色

如何ニ候へ共、存寄ニ付て申入候、

一御進物其外御音信是も存寄通ニ御使者談合申候、則案

内者を御使者へ添申候、右之目錄別紙ニ進候、

一御舟未伊豆浦へ着申たる一左右も不承候、於參者隨分

疎略を存間敷候間、可御心安候、

一我等手前最前之町場ハ去月末ニ出來候へ共、重而町場

申談、今最中申付候、此比天氣十日計悪ニ付て相延申

候、然共急度出來可申候間、來十日より内ニハ爰元を

可罷立覚悟候間、以面相積儀可得尊意候、委細者御使

者へ申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」五月廿七日　　羽左衛門大夫
羽柴陸奥守様　　正則（花押）
御報

359

「家久公御譜中」

日州諸縣郡大崎郷内飯熊山之別當、往昔雖務先達職、近年闕如、是以如先規欲勤務、故家久以書簡達其趣於聖護院之雑務坊、

360

「寫正文在飯隈山蓮光院」

日向國飯熊山之儀、往昔以來先達役仕候由候處、近年如何候哉、闕如之由候、從當年者如旧規相勤度由被申候間、聖門様御前可然様可預御取成候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」五月廿八日　　羽柴陸奥守
家久判

雑務坊

「在包紙」
雑務坊
まいる

羽柴陸奥守

361

「義久公御譜中」

「正文在平松真岳寺」

慶長十二年六月十八日

懐舊之連歌

露はたゝさなから玉のはちす哉　龍伯
池水きよき夏のゆふかけ　常久
にほとりの羽風絶〳〵音つれて　宗親
眞砂つたひのみちのすえ〳〵　玄与
いく木立松ハらならし深みとり　忠通
あま雲はるゝ秋のすゝしさ　豊信
山窓にいまハた月をまちとりて　宗察
うち出けりなあさのさころも　有栄
歸るへきころとや旅をおもふらん　与進
風もしつかになる興津ふね　忠増
みる〳〵も浪に朝日の移ひて　政徳
たちにしあとにねたるとり〳〵　元綱
かた分てふるやしくれの雨ならむ　武金
冬來てもまたさむからぬそて　龍伯
しはしたゝまきの戸ほそに端居して　常久
入にし月の名殘こそあれ　宗親

行やらて秋の山路の假まくら　玄与
きゝすてかたきさをしかの声　忠通
かなしさやたゝ我からのくれつかた　豊信
こゝろミたるゝおもひはかなや　宗察
なかめこし華はあらしに散つくし　有栄
つれ〳〵にしのをくるなかき日　与進
春雨のをやミもやらぬ草の庵　忠増
たちこむる野のかすみいくむら　政徳
あさ澤の水のひゝきは幽にて　元綱
むすひやそむる氷なるらむ　常久
ほのしろく見ゆる梢のあきの霜　龍伯
松の葉わけの月のゆふくれ　玄与
ひやゝかに雲ふきはらふ風の音　宗親
つハさはなれすかけるとも鶯　豊信
やとりをや出て行えの鷺ならむ　忠通
あけわたりたる遠かたのやま　宗察
夜もすからましハりつゝものむさけに　与進
罪ゆるされてかへるミやこ路　龍伯
こくふねはなミにへたゝるあかし潟　玄与
しつまりけりなすまのうらかせ　元綱

月は猶あしたになるもかけ澄て　常久
をきそひにたる露のむら草　忠増
さま〳〵のなかめもよほす秋の庭　龍伯
とへかしとのミ人をまつくれ　宗親
ちきりてもあすをたのまむ命かは　玄与
おもひの程をいひハのこさし　忠通
みえしその面影をしもわすれかね　宗察
かすそふまりの名殘おしけき　龍伯
袖にしもにはかに雨のそゝきゝて　与進
しのふむかしやなミたともなる　玄与
しほかまの跡をとふこそあはれなれ　政徳
おり〳〵ことの松風の聲　豊信
あたなりとしれは花にもうらみあれや　宗親
見れはこてふの遠さかるかけ　有栄
さひしさやなひくかきほの夕霞　元綱
人は歸りてさすやしはの戸　常久
塵の世をうしとや捨てすみぬらん　龍伯
苔地ふミわけむすふやま水　宗察
菊の香はなかれのすゑに浮ひ來て　玄与
秋をともとしくめるさかつき　有栄

出るよりうち向ひたる月のもと　政徳
あくこもさらにあらぬあらそひ　与進
乘駒はけふのまつりを心にて　龍伯
とり〳〵ならし袖のしらゆふ　玄与
誰もたゝたひのかとてのことふきに　忠増
とをき國まてつかささたまる　豊信
代〻にしも超つゝいまはおさまりて　忠通
あらしの後は雪のくれ竹　宗親
あつまりてすゝめ色とき声すや　宗察
往來たえたるみちのかたハら　元綱
あやしくもたかいひさけし中ならん　与進
うらみ出むもさすかはつかし　龍伯
海士のすむさとをたのめるさすらへに　豊信
明くれにしももくつ燒そて　忠通
蛟のこゑはと絶もやらぬ比にして　玄与
いく度となくさむるうたゝ寢　「本之儀、忠増」忠通
板ふきのひまとめている月のいろ　有栄
露をさそへるかせ過ぬめり　常久
めくり行あとにもあきのうちしくれ　宗親
高根をうつむ雲のむら〳〵　政徳

盛なるはなにかすミやけたるらん　忠通
さくよりそれと梅はまきれす　与進
越やらぬとしにもはるや立けらし　龍伯
声やゝちかき今朝のうくひす　元綱
竹の葉はミきりのうちにさしおほひ　常久
袖にふれ來る風そ涼しき　忠増
例ならぬこゝろなりしもをこたりて　玄与
取みるふみのふかきことハり　豊信
山すみもいてゝつかへん君なれや　忠通
民のさかへのしるきさと〳〵　龍伯
爰かしこつま木のけふりたな引て　宗親
霜よりそらはあけはなれ行　有栄
声〳〵に月にからすのなきさハき　与進
いねかてになる秋のさよかせ　宗察
ひきかこふ草の戸さしもうら枯て　政徳
いかにしのかむ夏の日さかり　「本之儀、忠増」忠通
所たゝかへ行やまの氷室守　豊信
つゝくともなき岩かねのミち　忠通
よそに見て歸るはおしき花の色　龍伯
松の木すゑにかゝる藤かえ　宗親

363

「家久公御譜中」

明ほのゝはるとやきなくほとゝきす　玄与
雲引すつるよとの川風　宗察
くりいれてとむる小舟の綱手なは　与進
おさまりにけりゆふなゝミの音　常久

龍伯十二句　与進九　常久八　忠増七　宗親九
政徳六　玄与十一　元綱六　忠通九　武金一
豊信八　宗察八　有栄六△

（▽△部分ハ、「新編島津氏世録正統系図義久譜」ニヨリ補フ）

362

『旧雑抄』「歳久ノ譜中ニアリ」

慶長十二年六月十八日

懐舊之連歌

露はたゝさなから玉のはちす哉　龍伯公
池水きよき夏のゆふかけ　常久

「外ニ數行略ス」

龍伯公十二句　常久八　平田肥前入道 與進九　宗親九
佐多宮内少 忠増七　阿蘇 玄与十一　鎌田源六 政徳六　川上又左衛門 忠通九　野村才右衛門 元綱六
八木新右衛門 豊信八　調所弥次郎執筆 武金一　山田民部少 有栄六　鮫嶋備後入道 宗察「宗親同人カ」

364

「御文庫四拾番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

同年六月二十五日、本田六右衛門親正從京都歸、思務惟新齋之使節乎、

尚〻祁答院へ罷越、諏訪山の杉きりとり候、跡見申候而驚入候、連〻申候様ニ或上方より何そ無余儀作事なと御當候する事も可在之候、又ハ貴所一代之内ニ新田宮御再興可有之と存候、旁以是非共被立置後年之御用を可被叶事肝要候、留守居之由候間鎌雲方へ書狀を以申遣候、

我等事、昨日吉日ニ付而出水へ令越着候、祁答院より以書狀申候様ニ、昨日者兼日之爲御日取之条、定而かこしま可有發足と存候、然者何比こゝもとへハ可被相越候哉、乍不申御急候へかしと存候、其謂ハ本田六右衛門尉一昨日罷下、京都之様子共懇ニ物語承候、就其も別而被差急上着候ハてハと存候、於様躰者面之時可申候条不詳候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」六月廿七日　惟新（花押）

少將殿
まいる

365

「御文庫拾七番箱拾六巻中」

天罰起請文之事

一今度弓稽古之儀被仰聞候、於身上誠以忝奉存候事、

一相弟子たりとも於重位者、無頭他言申間敷事、

一夜白無油断弓方可入精候、付御指南之ものゝ内にも別心於在之者、承付次第則言上可申候事、

右之条〻若於僞申上者、

▽奉始上梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神、惣者日本國中六十餘州大小神祇冥道、別者當國鎭守正八幡大菩薩　霧嶋六社權現并▒▒▒大明神（ヨメズ）、殊薩州鎭護新田八幡大菩薩開聞正一位　同鹿兒嶋擁護諏方上下大明神　稻荷　祇園春日　若宮勸請諸神　愛岩大權現　大小天狗、取分氏神天滿大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰各身上可罷蒙者也、仍起請如件、△

慶長十二年丁未六月吉日

平田主水左衞門尉　宗誠（花押）
竪山民部左衞門尉　利友（花押）
□村（野カ）吉久　君綱（花押）
吉田新十郎　清次（花押）
小野少三郎　吉張（花押）
平田平藏　宗弘（花押）
伊地知治左衞門尉　重康（花押）
吉岡仲四郎　久綱（花押）
喜入吉兵衞尉　久供（花押）
別府舍人佑殿
高崎弥六殿

366

「御文庫拾七番箱十七巻中」

天罰起請文之事

一今度弓稽古之儀被仰聞候、於身上別而忝奉存候事、

一相弟子たりとも於重位者、無頭他言申間敷候事、

一夜白無油断弓方可入精候、付御指南之ものゝ内にも別心於在之者、承付次第則言上可申候事、

右之条〻若於僞申上者、

▽奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本六十餘大小神祇、別當國鎭守正八幡大菩薩　開聞正一位　新田八

幡大菩薩　霧嶋六所大權現　稲荷　祇薗　春日　若宮
止上　貳宮三社大明神　大天狗小天狗　勸請諸神　天滿
大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰身上可罷蒙者也、仍
起請如件、△

慶長十二年丁未六月吉祥日　白濱覚左衛門尉
重昌(花押)
別府舍人佑殿

367
「御文庫廿二番箱拾卷中」
其已來無音候処、此比一書到來、細〻披覧祝着候、殊摺
本之廿四孝一札かなの注、重寶之儀一入珎重候、然者澁
谷与兵衛尉子とも之能弥仕上候由、寄特之儀候、切〻能
有之事候哉、見物候ハぬ事殘多候、先年常安父子ニ唄稽
古共候、于今忘失之やうに存候哉、聊無其儀候、其方如
存知、此五三年者病出合不腰立ニ成、一席之内も得他力
立居仕躰候、乍勿論長坐一切不罷成候、加之此比者無殘
所歯かけ一圓舌頭不相叶、就中一ッつふれ此十年程ハう
たひなと云候事曽無之候、乍去拙者事今一度上洛、數年
將軍様御厚恩之御礼可申上念望候間、於其儀者聞及候、
与兵子共之能・常安父子之うたひ聽聞候ハんと存候へと
も、右之爲躰候間、中〻存絶候、又下向之儀ハ隠居任不
如意懇望難成候、云袷云恰不叶心意口惜次第候、并又五
郎皷先年在洛之節切〻承候、其時分あるか中ニすくれた
るやうに承候、田舍者之褒美者おかしかるへきと用捨候
キ、此比者双人無之候、案中候、是又今一度聽聞仕まし
き事殘多候、此等之旨兩人へ次之時心得頼入候、次道味
舞殊勝候、大頭の次ニ者此人たるへきと存候、寄特ニ此
人被差下、此二三年者心を慰候、今度上洛之事候間幸傅
筆候、近此見苦候へとも黒絹一端進之候、補書面計候、
謹言、

六月廿四日
道正休甫

「義久公御案文也」

368
「家久公御譜中」
「六月也」
同月二十七日、家久發麗府赴京師、不知何故、且供奉之家老、
先是閏四月八日、權中納言源秀康逝三十四歳、於越前州北荘
城、計至則家久遣使者姓名不傳、於駿武、奉吊慰　兩御所、因
有大久保相模守忠隣六月晦日回復之奉書、

369

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

越前中納言殿依御他界、御使者被指越候、本多佐渡守申談具達　上聞候、委曲御使者可爲演説候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」六月晦日　　大久保相模守忠隣（花押）

羽柴陸奥守殿　御報

370

「御文庫廿二番箱十巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

五月三日之　御書を始、數通又四郎所より持せ下候、

同　到着慥拜見仕候、

一如蒙仰當年之御慶、万事無爲珎重奉存候、殊更一段御息災之由、千秋万歳目出候、愚拙事今年者健敷候、然共膝之痛無怠事候、旁不可過御高察候、

一藤山茂介被差下候、　尊意之旨則陸奥守へ申聞候、惣別他方之人許容之儀、雖無所好候、是者從　東山被仰下儀候間ともかくもと申事候、乍去爰元知行方差つまり候条可爲不有付と咲止ニ存候、并在所之儀、かこしまとも當所とも未定候、委曲者落着次第追而可申上候事、

一毎年御合力申上候調之儀、今年來年分銀子入念可致進上之由被仰下候、先陸奥守所より鎌田次右衞門と申者所用候而差上候、彼者へ右之調申付候、定遂御合點候つらん、就其去年差上候銀子あしき由承候、當分上方へ相用候判之銀子、依遠國不參届候、隨分入念申付候へとも、田舍之故無調法之儀、不及是非候事、

一古今之序之聞書有所よりほり出候間、爲可懸　御目差上候處、　御感之由大慶候、殊外題之儀申上候へハ二ツ迄遊被下候、毎々御無心之儀申上候つるに不被差置被染　御筆候、誠忝段難盡紙上候事、

一御念入候、筆十對・墨二挺拜領、恐悦不少候、此等之条々、可然様可預御取合候、恐々、

白糸二斤進上、

「御譜ニ慶長十二年歟」七月二日

倉光主水佑殿

「義久公御案文也」

371

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々其元之様子、具彼者へ可被仰聞事專一候、

態令啓候、上京以後無音ニ相過候条、早打差上候、東國之御仕合万々可目出度存候、委細吉左右可承候、此等之

爲御祈禱、仁王經千部讀誦申付、御札令遣之候、旁期後信之時候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」七月四日　　龍伯（花押）

陸奥守殿

372

「家久公御譜中」

家久著船于大坂之日不傳、考八月中旬乎、

373

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尊札致拜見候、仍越前中納言殿御遠行被成付而、御使者御下被成候、即致披露候処、遠路海上之儀御座候処、被入御念之旨上意候、於様子御心安可思召候、然而江戸「マヽ」

將軍様ニ此等之趣被仰上度由、即大久保相模守方まて書狀相添、御使者下シ申候、是又被遂披露之由候、御心安可思食候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」七月七日　　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守様

貴報

374

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

去年歳暮之御服并當年端午之御帷子御進上被成候、御内書兩通相調進之候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」七月十一日　　本多上野介正純（花押）

嶋津陸奥守殿

375

『福昌寺文書ノ内』

地藏堂前之打換蒲生ニ二反、天正十六戊子年十二月ニ龍伯爲御心當、地藏堂之至于福昌寺被成預置之由候、先〻爲方丈宛召置候、

天海（花押）

376

『仝』

阿屋

僧堂葺板千四百二十枚

新納縫助殿參

福昌寺

377

『仝』

祠堂之俵物支

一七十弐

右之内廿俵者

平田太郎左衞門殿

一唯様御霊屋之爲掃地之僧、一人兩口之扶助也、年堅可相調之者也、

慶長十貳年丁未七月十六日　　大麟（花押）

378

「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶〻以參雖申度候、令老耄一圓行歩不相叶、座敷之中も不自由之躰候故、乍思無其儀候、御隙明御上之刻、山居之躰御覧候之条、來臨所仰候、旁期面謁候、其後以使札成共可申候之處、事繁中還而如何与令遠慮候、併相似疎意所存之外候、近日東國御下向候欤、殘暑之節御苦労令察候、目出度御仕合能御上洛待入存候、將又此等式雖如何候、團三本進之候、委曲藤山茂介かたまて申越候間、令省略候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」七月十七日　　（花押）「龍山公御判」

奥州

379

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

以上

一書致啓上候、仍而今度嶋津兵庫頭殿ゟ以使者被仰上候、并御進物等何も致披露候処、則御使者御前へ被召出、一段之御仕合共、殘所無御座候、　大御所様弥御懇之御諚共、不成大形候、於様子ハ御心安可思召候、將亦駿府相替儀無御座候、今程御普請半之御事御座候、猶此表相應之御用等御座候者、可被仰付候、疎意存間敷候、何も追而可得御意条、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」七月廿三日　　正純（花押）

本田上野□（介）

嶋津陸□（奥守歟）　　正純

人〻中

380

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

名所和歌抜書并歌枕二冊懸御目候、御上洛之折節、名所之御詠共拜見可仕候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長十一年」夷則廿七日　　雅庸

381

羽陸奥守様
人〻御中

「義久公御譜中」
「案文有之」

態令申候、仍犬すわうはこなた布のよきハなへ候て、わるく候、大ナルハ申事なく候、其ため久しくたしなゝ置申候、唐布にて候、御用にもかと存進之候、御らんし合候てよく候ハヽ、我らモ可爲祝着候、又検見之馬縄のうちにてのとゝめやう、能く御くほう尤候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」七月廿九日　　龍伯

惟新
参

382

平松へ
まいる

國分ゟ

『写本兒玉氏蔵』
（本文書ハ三八五号文書ト同文ニノキ省略ス、但ノ日付ハ八月一日トアリ）

383

『兒玉筑後譜中』

一慶長十二年丁未、　貫明公頗癒、七月、　松齢公亦疾於帖佐、時　貫明公在國分聞、而心憂以爲、遣理心郭國安、療其所疾、必可速癒、乃使實相往訪帖佐且以告之、旁及犬追物事、八月朔日、反　命、

384の1

『在伊作八幡社』

一御戸帳三流

右惟新公御寄進左之通、

大汝八幡大菩薩御寶前

戸帳三流之叟

慶長十二丁未季八月初五日

藤原朝臣島津兵庫頭入道惟新

384の2

謹奉掛

大汝八幡大菩薩御寶前斗帳

三流之叟

右意趣、子孫繁昌、息災延命、武運長久、國家安全、諸願成就、皆令滿足者也、

于時慶長十二年丁未八月初五日

藤原朝臣島津兵庫頭入道惟新

385

「義弘公御譜中」

「正文在蒲地八左衞門」

猶〻犬追物御日取之事、今月廿一日二日と其方へハ聞得申候哉、爰元ニハ廿二日三日四日と聞得申候、如何御座候哉と存計候、兼又我等養生仕候者、理心事、此方可被遣之由忝存候、乍去三日以前ゟ百按之藥を被下申候間、先此節者用所無御座候、又御ひさ今夜ゟいたミ申候由、笑止ニ存候、如御意天氣から左様ニ可有御座と奉存候、弥御養生肝要ニ存候、尊書畏而拜見仕候、仍拙者氣相之儀承候、忝奉存候、氣相も昨日ゟ能御座候間、可御心安候、誠以思食寄被添御心之段、畏悦之至難盡筆紙候、次ニ犬追物檢見ニ付、矢所問様之事、日記委敷見可申由尤奉存候、彼御日記被借下候ハヽ、別而可忝候、先日葉茶つほ・小つほ共進上申候處、御意ニ入申候由、目出度存候、然者むかはき之事、昨日迄ニ一段見事ニ出來申候、兒玉事も今朝歸申候、余者期後音可得尊意候、誠惶敬白、

「朱カキ」
「慶長十二年」八月八日　兵庫入道　惟新（花押）

龍伯尊老様
參人ご御中

386

「家久公御譜中」

「正文在田中善兵衞」

長〻相届在京、在江戸被抽御奉公、爲　御恩賞知行五拾石被宛行旱、田坪字等、在別紙、全可在領知候也、

慶長十二年
八月八日　比志嶋紀伊守國貞（花押）
　　桃山權左衞門尉久高（花押）
　　圖書入道紹益（花押）

田中伊豆守「本ノマヽ」殿

387

「家久公御譜中」

「正文在中西文右衞門」

此鹿於船中先到來候まゝ、則送遣候、此中亭主の色〻待久しく候つらん間、如其京之ミや事にも可成かと存候間、其心得候てよく〳〵てふり肝要候、謹言、

八月十九日　（家久）（花押）
小長門（小幡）とのへ

「在口裏」小長門守　家久

「仝御譜中」
同年八月二十六日、朝鮮使者朝伏見　營、家久亦此日朝
營中、

389 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

貴札忝令拜見候、隨而明日朝鮮人就御對面、貴殿様御出
仕之由御尤候、左様成付、我等所にて可被成御裝束之旨、
昨日内藤紀伊守西丸をも被請取候付、我等も藤森へ宿替
仕候、御城遠御座候へ共、路辺之儀候間、自是可被成御
出仕候、明日四ッ時分ニ高麗人も致出仕候由候条、早朝
ニ御越御尤候、猶期面上之時候、恐惶謹言、

松平河内守
定(花押)

「朱カキ」
「慶長十二年」八月廿五日

嶋奥州様
御報

390 『正文在加治木新納仲左衛門』

初日之二番四角之外鬮次第

≡＋≡＋≡＋≡＋≡＋

犬追物手組之事慶長十二年八月廿七日

少將殿 ─三─三─一─二─三　十三疋　嶋津攝津守 ─一─｜─一─｜─一　三疋

菊池刑部少輔 ─｜─一─｜─一─｜　二疋　山田民部少輔 ─一─｜─｜─｜　一疋
吉田治部左衛門尉 ─一─二─二─一─｜　六疋　嶋津式部太輔 ─一─｜─一─二─二　六疋
嶋津杢右衛門尉 ─｜─二─一─｜　三疋　嶋津近江守 ─二─｜─｜─三─二　七疋
嶋津又吉 ─三─二─一─三　九疋　嶋津又太郎 ─｜─二─｜─｜─一　三疋

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　嶋津雅樂助

391 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以御目録ニうら判を仕致進上候、以上、
爲重陽之御祝儀、呉服五ッ進上被成候趣、令披露候處、
遠路被爲入御念之段、御祝着被　思召、御内書被進候、隨
而私へ呉服三、内染壱・白綾一・段物一送被下候、毎度
御芳情之至、過分忝拜領仕候、委曲山口駿河守方迄申入
候条、可被得貴意候、尚又御使者可爲言上候、恐惶謹言、

本多佐渡守
正信(花押)

「朱カキ」
「慶長十二年」九月二日

羽柴陸奥守様
貴報

392 「義久公御譜中」

爲年頭之嘉慶差越使者、殊太刀一腰・馬一疋并紅糸五十

斤到來、悦覚候、猶本多佐渡守可申候也、

「朱カキ」「慶長十二年」九月七日　○（秀忠）「墨印」

嶋津修理大夫入道とのへ

393

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲重陽之祝儀、小袖五之内綾一到來、悦思召候也、

「朱カキ」「慶長十二年」九月九日　○（家康）「墨印」

薩摩少將殿

394

「仝御譜中」

家久今般始至于武都、拜謁　將軍家、（発伏見到武都之日拝謁之日不傳）、在于江府之間、以眞福寺爲旅館、

395

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以拙者心中之通兵少迄申入候間、不能詳候、以上、

御使札之趣拜見、忝奉存候、如御意今度始而御下向被爲成候處ニ染候共不得御意、乍恐御殘多奉存候、將亦たねか嶋御鉄炮弐丁并筒乱弐被下置候、誠ニ御秘藏之御筒与申、又連々望ニ存候處ニ、別而過分忝奉存候、中々存程ハ御礼不得申上候、委曲伊勢兵部少輔殿迄申入候間、不能一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」九月十八日　土井大炊助利勝（花押）

家久様　御報

396

「義久公御譜中」

「正文在吉田次郎兵衛爲清」

昨日之茶湯誠々祝着之至候、殊老躰之通一段面白令存候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」九月廿二日　竜伯（花押）

「上書」

吉田美作守殿　竜伯

397

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以今度面拜ニ奉得尊意、乍恐御床敷奉存候儀、身ニ餘たる御事ニ御座候、古人之被申置候ハ、あひ見ての後の心をくらふれハ、むかしハ物を思ハさりけりと被存候ことく、しミ〳〵と難忘奉存候、以上、

今度者御造作御苦労ニ而御下向被成候、然共御機嫌能御歸國之儀、拙者一人之様ニ目出度奉存候、就中貴公御事、節〻被　仰出御殘多被　思召候儀、不大形候、扨又御前ニ而之様躰、龍伯様・惟新様へ御參會之節被仰達候者、御滿足可爲与推察仕候、委曲期後音之時奉省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」九月廿五日　　本多佐渡守正信（花押）

羽柴陸奥守様　人〻御中

398

「家久公御譜中」

同年十月九日申刻、駿城便殿二丸、罹池魚災、松平河内守定勝家臣水野甚左衛門以書告伊勢兵部少輔貞昌、

399

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

已上

追而申上候、飛脚之申候者二之丸之内へ人之出入不罷成候て慥ニハ火之出所しれ不申候由申候、其通可被仰上候、以上、

一書申入候、仍駿府御城二丸、昨日九日之七ツ時分ニ火事出來仕、河内守も則夜中ニ被罷越候、乍去御本丸少も不苦由申來候間、此等之趣　奥州様可被仰上候、替儀候者追而可申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」卯ノ刻
十月十日　　水野甚左衛門尉（花押）

伊勢兵部少様（貞昌）　人〻御中

400

「仝御譜中」

家久賜告之月日不傳、辭伏見在十月下旬之間乎、

401

『在雜抄』

慶長拾二年拾月十一日

第一

賦山何連歌

北みなミ咲わくる梅の一木かな　　家久

朝日のかけの長閑なる庭　　久高

「外ニ數行略ス」

家久一句　忠重七　久高八　其阿九　慰畝十三

長恭二　久洪八　清房七　武政十　盛利七

玄佳十　久次一　宗可十　起雲七

第二

賦何木連歌

其阿八　慰畋十四　國貞二　久洪八　清房九

起雲九　忠重七　久高九　武政十一　玄佳九

宗可九　來河一　盛利四

第三

賦何二字返音、連歌

久高七　起雲九　長恭三　宗可九　玄佳八

慰畋十四　清房九　其阿八　忠重八　武政十一

盛利六　扁也一　久洪七

慶長十二年十月拾三日

第八

賦何船連歌

「前行同断故實名略ス」

402

「義久公御譜中」

「正文在入來院石見重頼」

陸奥守殿其宅へ被成入御候哉、定何かと馳走之志推察候、近比乍輕微上酒兩樽損候て無尓々之由候へとも令進之候

補空書計候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長十二年」十月廿三日　龍伯 ◯ 「御墨印」

入來院石見守殿

「上包」入來院石見守殿　竜伯

403

『最上氏藏』

先年貴久公被任陸奥守、予亦号修理太夫義久刻、光源院様御取次之方迄遣使之儀、最上長門拯へ被仰付、京都之旨趣申調畢、剰善左衞門尉事、近年息女依在京、爲警固之者被召列、兩度辛勞之至、于今条々無忘却者也、仍狀如斯、

慶長十二年十月廿四日　龍伯（花押）

最上善左衞門尉とのへ

「義久公御譜中、正文在最上右近トアリ」

404

「三番箱宝鑑中」

御下國、乍珎重殘多事千万候、黒方二束者進候、海路之間於お樓船可被試候、委細者休甫可申候、かしこ、

「朱カキ」「慶長十二年」十一月四日　信尹

鹿兒嶋少將殿

「家久公御譜中ニ在リ」

405

慶長十二年丁未

十一月八日、伊勢平左衛門貞成（肥前寺沢侯に使し、高畠仲兵衛と戰ひ唐津に死す、年三十九歳）

406

「家久公御譜中」

粤惟新有差使者於寺澤志摩廣忠（肥前唐津之城主）而所欲言之事、然而使者得其人、則其事成、不得其人則其事敗、由是惟新呻吟移日之間、家老伊勢平左衛門尉貞成稟惟新曰、君所呻吟吾知之、宜無勞心、只以使命吾、吾決如君所欲必成事、於是惟新欣然命之、貞成奉命、同年冬十月下旬、主從五十二人（内與力四人、生之士八人）、蒲發麗府到唐津、述國命則廣忠肯其事、如惟新心事已成、乃奉報命還之路經天草、領此地者廣忠家臣高畠仲兵衛也、初因同事使于麗府、今有以其事含貞成、故十一月十日矯點茶而招貞成、貞成知其謀雖辭之、再三強之不措、貞成奉使命之日胸算已定、如不行似恐懼、遂至彼、則請待茶亭進饗膳點雲脚、當貞成飲之、仲兵衛以白刃切之、貞成奪取其刀而切仲兵、仲兵衛不得防而逃、貞成追行之間躓厨之長爐而僵、時有大津喜右衛門者、討之、貞成遂死、時貞成家臣瀬戸口主税者突入切殺大津、而仲兵來貞成之乘船之前、以被深傷故不能自盡、引頸討傍人死、既而貞成死骸至平松、則惟新自臨貞成宅、周見其傷大哀惜之、嘗聞、仁者喪身爲仁、嗚呼爲君喪身而成君之事、其仁乎、義乎、忠乎、於清平之時爲國家喪身可謂眞忠臣也、廣忠聞此告、則大驚惑、翌十一日作靈社之神裁、而投伊勢兵部少輔貞昌、而言此事不曾知、且贈仲兵・喜右之首、家久亦贈使書述不知之趣、共載左方、

407

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

敬白天罰靈社上巻起請文前書之事

今度於天草對伊勢平左衛門、高畠仲兵衛不慮之仕合仕出候儀、毛頭不存候、然者昨日子剋從彼地到來承付、一世之迷惑此時御座候、此旨爲可申分、靈者上巻起請文を以申入候、若右之意趣於偽申者、

「以下別紙」

敬白天罰靈社上巻起請文之事

謹請散供再拜、夫惟年号者慶長五庚子年、月數者十二月、日數者三百五十余ヶ日、擇吉日良辰而、致信心請白、大施主等、謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釈四太天王　日光菩薩　月光菩薩　七曜　九曜　二十八宿　三千星宿　四天

八天　十二天　二十八天　三十三天　十二神將　七千夜叉　第六天魔王　無量無辺三千界中所顕現之大小神祇、上者有頂天、下者到金輪在之佛神、悉驚白言、堅牢地神八海所接竜王竜衆　十王十躰俱生神　冥官冥衆　天神地神　山神　海神　木神　火神　土神　金神　水神　風神　界内界外諸善神　東方降三世明王　南方軍荼利夜叉明王　西方大威徳明王　北方金剛夜叉明王　中央大日大聖　不動明王　大黒尊天　毘沙門天王　大弁才天女　宇賀神　十五童子　三宝荒神　多婆羅天王　武答天神　金剛界七百余尊　胎藏界五百余尊　愛染明王　妙見菩薩一万八千軍神　五万八千軍神　十万八千軍神、於諸佛諸菩薩者、本師釈迦文佛　阿弥陀如來　薬師如來　宝生如來　文殊普賢　觀音勢至　當來下生(所カ)弥勒尊佛　地藏菩薩般若會上十六善神、忝日域崇朝天照皇大神宮　四十末社内宮　外宮　風宮　諸末社　八幡大菩薩　春日大明神王城鎮守　祇園牛頭天王　山王廿一社　松尾大明神　平野大明神　吉田　立田　熱田　大原野大明神　稲荷大明神　賀茂下上大明神　貴布祢大明神　北野天滿天神　三輪大明神　住吉大明神　愛宕岩(ママ)四所大權現　熊野三所大權現　廣田大明神　金峰山權現　吉備宮大明神　對馬天王　羽黒山大權現　葛城大權現　客之(ママ)藏王權現　関東守護神　伊豆箱根兩所權現　三島大明神　鹿嶋大明神　冨士大權現　白山大權現　立山大菩薩　諏訪上下大明神出雲大社　多賀大明神　御霊八所大明神、殊者氏神、抱而日本國中大社　二千小社　五百九十二所大小神祇等八万四千鬼神　大疫神　大歳神　刀八毘沙門天並父天狗母天狗　太郎坊眷属　九億四万三千四百九十余神　善害坊　次郎坊　八万四千眷属　飯縄大明神　域中山々峯々所居住之大天狗　小天狗等、各作群集、而正路之屑(ママ)伏希戊(ママ)一覧、若偽心於在之者、立処受白癩黒癩重病、八万四千毛孔、四十二骨節日々夜々苦痛無止、弓矢冥加子々孫々永尽向、仏神三宝雖所祈願不可叶、於來世者、堕八寒八熱無間地獄、未來永劫不可有佳期者也、仍上巻起請文如件、

慶長十二年十一月十一日　　寺澤志摩守廣忠(花押)「血判朱カキ」

伊勢兵部少輔殿

408

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以拙者心底迷惑仕候通、乍序口上ニ申含候間、委曲可得尊意候、以上、

態令啓上候、今度不慮出來候儀、伊勢兵部少輔迄手前疎略無之通、靈社上巻起請文を以申入候、惟新へ申入候儀者何共致迷惑遠慮仕候、何とそ可然様ニ被仰、拙者心中相違無御座之通被仰分候て可被下候、誠か様ニ申入候儀無面目事ニ御座候へ共、毛頭不存候儀候間、不顧憚得御意申候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」十一月十一日　寺志广守　廣忠（花押）

羽陸奥守様
人〻御中

409

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

今度本郷次郎殿御上之儀候間、御同名河内守殿可被成御下通申談候、爲御心得以書狀申上候、此中之ことく、當地ニ靡〻被成御詰通、猶以可申上候、御心易可被思召候、猶河内守殿可被仰上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」霜月廿日　山口駿河守　直友（花押）

薩广
少將様
參人〻御中

410

「北郷忠能譜中」

慶長十二年丁未十一月二十九日、忠能上洛在伏見有年、時師吉田印西翁探射藝之奥旨、得翁之卯(印)可、印西畀一箭於忠能曰、這是稱唐衣我家之奇珍也、其重之云云、

411

「御文庫拾七番箱十七巻中」

敬白　起請文之事

一雖不新申上事候、奉對　奥州様無別心御奉公可申上候段、又御茶之湯なと被仰付候間、努〻悪心を不存間敷旨、先年ふか〳〵しく以神文申上置候へ共、猶以疎意有ましき事、

一去年之時分、御印籠うせ申候刻、相良新三郎何かと被申候由、其後傳承候間、さやうの儀各前にて引合、我等無慮外段可申晴と存候へ共、于今無指出候へハ、無其儀候条、無疎意とハ申なから、左候ハありかたく候故如此候、數年忝連〻被召仕候、殊御他行の御留主番なとニ被召置候とても、毛頭程も不致慮外候、いハんや右之様子曽以不存候事、

一自然於　御前、御をんミつの事承候共、少他言申ましく候、若縁者親類對　奥州様悪心をたくミ候共、無同

心則可申上候、萬一於身上聞召かすめらるゝ儀於有之者、可被成下御紀明候事、

右之条々若於偽申上者、

▽奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣者日本國中六十余州大小神祇、別者薩州鎭守新田八幡大菩薩並開聞正一位　大隅正八幡宮　霧嶋　白鳥兩大權現　日向妻万五社大明神、殊者當所諏方大明神　稲荷　戸柱　若宮　春日大明神　愛宕山大權現并大天狗小天狗　天滿大自在天神御部類眷属等、神罰冥罰可罷蒙身上者也、仍起請若件、△

慶長十二年十二月三日　自圓（花押）

御荷衆中

412

「御文庫二番箱家久公十一巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申上候、從　公方様御誂之御藥種御上被成候、則関東へ致進上候、是又御心安可被思召候、猶後音之時可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」十二月五日　山口勘兵衛直友（花押）

少將様
参人ゝ御中

413

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲歳暮之御祝儀、御小袖五御上被成候、披露可申候間、御心易可被思召候、猶　御黒印重而進入可申候、將亦私御小袖一重贈被下候、目出度存候、猶以來春萬悦可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十二年」極月廿二日　山口駿河守直友（花押）

薩州
少將様
参貴報

414

『在本田氏』

高百八拾石

一慶長四年正月三日ニ主從五人伏見へ上着仕候、但高麗ゟ直ニ罷上り候、何れも自力之者、

一同年庄内御弓箭ニ付御使被仰付候て罷下候、十二月廿八日、帖佐江下着仕候、但伏見打立日限覚不申候、

一慶長五年三月二日、帖佐打立罷上候、父子主從八人、何れも自力之者、但上着之日限覚不申候、右内壱人ハ慶長五十月（ママ）初罷下候、三人者同拾月廿五日下着仕候、

三人ハ慶六九月七日下着候、一人ハ今ニ不罷下候、
一御使として上下向辛労仕候、御合力とて長壽老ゟ鳥目
拾貫文給候欵と存候、覚不慥候、
一右在京中御盛不給候、飯米迄被下申候、
以上
慶長拾二年
十二月廿二日　本田助允判
指出
御請取衆中　まいる

415
「正文在大口士大田氏」
去夏之御馬追之時、息藤吉殿之事　奥州様懸御目候、舍
兄故小平次殿眼前之儀候間、彼跡可被相續之由申上候、
勿論向後別儀有間敷候、爲御心得候、以上、
慶長十二年
十二月廿六日　新納武藏入道　爲舟判
大田三川入道殿

416
「家久公御譜中」
「正文在文庫」
爲歳暮祝儀、小袖五重到來、悦覚候、猶本多佐渡守可申
候、謹言、
「朱カキ」「慶長十二年」十二月廿七日　（秀忠）（花押）
薩摩少將殿

417
「樺山權左衛門久高譜中」
久高居麑島、而勤家老役者有年矣、于時慶長十二年丁未、
代本田六右衛門尉、而蒙移出水守封疆宜警固之命、再三
雖辭敢無免許、故不得已而應補任之命、時　太守家久卿
使相良日向守畀寶刀、一尺二寸、無銘　是又　惟新公傳來之脇指
云云、又新恩賜二百石之地、既移居、而後城郭小松口・
霧降口樓門、西之口門矢倉造立已畢、大手之口者在先代
之樓門矣、件營作達　太守之聞、使島津豊後守久賀・白
濵周防入道伴松褒美之言禮詞、眉目之到也、

418
「得能氏記録」
慶長十二年丁未
下野守忠吉卒去事、
三月五日、尾州名護屋ノ城主、從三位左近衛權中將下
野守忠吉卿家康公ノ四男ナリ、去月二日、江府ニ來リ大久保加賀
守忠常カ宅ニ寄宿セラレケルガ、重病ニ卧ス、依テ同

二十八日、　家康公忠常カ家ニ渡御有テ、彼病ヲ問セ玉フ、諸醫療治ヲ盡セトモ不驗、終ニ今日卒去ナリ、享年二十八、家臣石川主馬助・稲垣將監・中川清九郎・小笠原監物等殉死ス、

同十一日、　家康公去月二十九日江城ヲ出御有テ、今日駿府ノ城ニ入御シ玉フ、

三河守秀康卿逝去事

四月八日、越前ノ國主從三位權中納言三河守秀康卿家康公ノ二男、越前ニ於テ逝去、歳三十四、家臣土屋左馬・長見新右衞門等殉死ス、

義利賜尾張國事

同二十六日、右兵衞督義利ニ甲州ヲ轉シテ、尾州名護屋城六十一万九千五百余石ヲ賜フ、

同二十九日、　家康公松平隱岐守定勝ヲシテ伏見城ヲ守ラシメ玉フ、

朝鮮國信使來朝登江戸駿府兩城事

五月六日、去月二十四日、朝鮮國ノ使者江戸ニ來ル、信使ハ呂祐吉、副使慶信、從事官八丁好寛ナリ、三使今日城ニ登リテ　秀忠公ニ謁シ奉リ、大鷹五十連・人參二百斤、幅段二百卷・虎皮三十張・豹ノ皮二十張・青皮十張・白苧布三十疋・黒麻布三十枚・細五十疋・花席二十枚・紙五十帖ヲ献上ス、同十一日、　秀忠公ヨリ長刀十五振・白銀六百枚ヲ三使ニ賜フ、同十九日、三使駿州清見寺ニ到ル、翌二十日、駿府城ニ登テ　家康公ニ謁シ、人參六十斤・白苧布二十疋・密百斤・蠟百斤ヲ献ス、　家康公モ亦太刀三柄・鎧三領ヲ三使ニ賜ハル、

平岩親吉賜犬山城事

同二十六日、　家康公尾州犬山城十万石ヲ平岩主計頭親吉ニ賜ヒ、義利ニ代ツテ清洲城ヲ守ラシメ、國中ノ政事ヲ聞シメ玉フ、

家康公御移徙駿府城事、

七月三日、今年正月二十五日ヨリ駿府城ノ御普請始リ、頃日成就シケルユヘ、　家康公今日御移徙ナリ、諸大名以下各賀儀ヲ献シ奉ル、　秀忠公酒井右兵衞大夫忠世今日稚樂頭ト改ム、ヲ御使トシテ、御移徙ヲ賀シ玉フ、

源和子御誕生事

十月四日、秀忠公ノ御娘源和子、江戸ノ城ニ誕生シ玉フ、元和六年六月六日女御、寛永元年十一月二十八日中宮、同六年十一月九日、東福門院ノ號ヲ蒙リ給フ、

駿府城燒失事

十二月二十四日、去ル二十二日駿府城出火、悉ク燒失ス、今日火災ニ付、諸大名自ラ來リ謁スルニ不及ノ旨、諸國ニ御奉書ヲ賜フ、

（本文ハ底本ニ欠ク、鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ）